福岡市埋蔵文化財調査報告書第 832 集

比恵遺跡群 37

HI E

— 第 82 次調査報告 —

2004

福岡市教育委員会

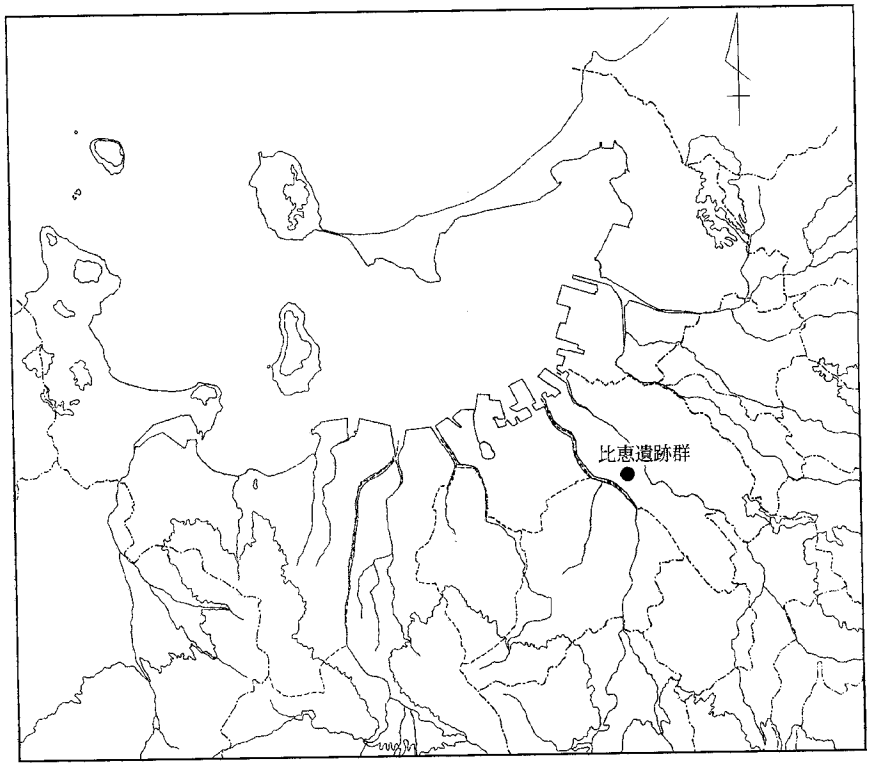
岡三リビック埋蔵文化財調査室

福岡市埋蔵文化財調査報告書第832集

比恵遺跡群37

HIE

—第82次調査報告—



遺跡略号　HIE-82
調査番号　0308

2004

福岡市教育委員会
岡三リビック埋蔵文化財調査室

カラー写真 1.　第 82 次調査遺跡全景（南東から）

カラー写真 2.　SE010 井戸跡遺物出土状況（北から）

カラー写真 3.　SE027 井戸跡遺物出土状況（北から）

カラー写真 4.　SE028 井戸跡下層下面遺物出土状況（北西から）

カラー写真 5.　SE028 井戸跡作業風景（北から）

カラー写真 6.　第 82 次調査出土土器

カラー写真 7.　SE021 井戸跡出土長頸壺

序

現在、国際化の流れの中で、アジア地域により一層開かれた国際都市を目指し、まちづくりを進めている福岡市は、古くからアジア大陸との交流を通じて発展してきました。本市では、この交流を物語る文化財の保護、活用に努めていますが、開発によりやむを得ず失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は博多区比恵遺跡群内の開発事業に先立って行われた第82次発掘調査を報告するものです。調査の結果、弥生時代から中世における遺構および遺物が発見され、当時の生活を復元する上で多大な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまでの、費用負担などのご協力を賜りました株式会社レッドキャベツ様をはじめとする関係者の方々および地元の方々には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表すとともに、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ辛甚に存じます。

平成16年8月31日

福岡市教育委員会

教育長　生田征生

例　言

1. 本書は福岡市教育委員会の指導のもと、2003年5月6日から2003年8月14日にかけて、岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室が実施した、㈱レッドキャベツの店舗建設に伴う比恵遺跡群の第82次発掘調査の報告書である。
2. 本書の執筆・編集は堀苑孝志・中山浩・天野直子・入江俊之が分担して行った。
3. 遺構の実測図は中山・入江が行なった。
4. 遺物の実測図は天野・平野由紀子・相原正人・佐田裕一・中下まり江が行なった。
5. 遺構・遺物のトレース図は、Adobe Illustrator 10を使用し、松尾祥子・倉園眞記が行った。
6. 遺構、遺物の写真は中山が撮影した。
7. 遺構及び遺物の色調については、『新版標準土色帖2002年版』を基準にした。
8. 遺構番号は調査区内で連番をつけ、遺構の略号を冠して呼称する。遺構の略号は以下の通りである。

   掘立柱建物　SB　・　竪穴住居跡　SC　・　溝　SD　・　井戸　SE　・　土坑　SK

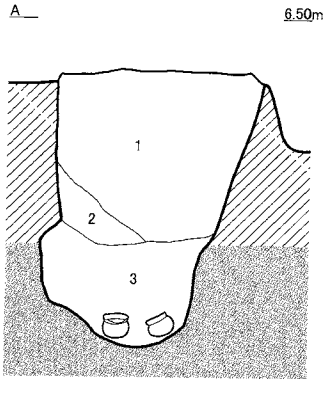
   柱穴、小穴　SP　・　その他　SX
9. 方位は磁北であり、真北から6°21′西偏する。
10. 本報告書に係わる図面、写真、遺物等は、『埋蔵文化財の整理・収蔵要項』福岡市教育委員会1994年に従い、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する。

凡　例

1. 遺構平断面図の見方

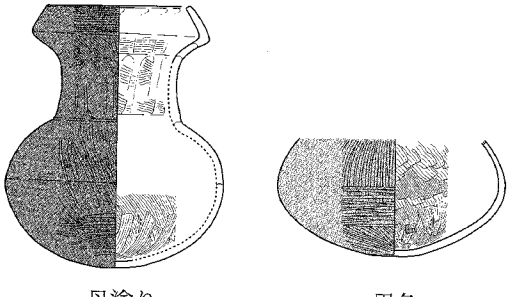
   ①. 基本土層は2種類の、トーンによって分けられる

   ②. 井戸跡の断面図における出土遺物は投影図とする



2. 遺物実測図の見方

断面にトーンのあるものは須恵器を表す



丹塗り　　黒色

器面のトーン

本文目次

Ⅰ．はじめに
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査体制 …… 1
Ⅱ．遺跡の概要
　１．遺跡の立地と環境 …… 2
　２．遺跡の歴史的背景 …… 2
Ⅲ．発掘調査の記録
　SE001 …… 7
　SE002 …… 8
　SE003 …… 8
　SE004 …… 15
　SE005 …… 16
　SC006 …… 17
　SC007 …… 18
　SE008 …… 19
　SE009 …… 20
　SE010 …… 21
　SE011 …… 23
　SE012 …… 25
　SE013 …… 27
　SK014 …… 28
　SD015 …… 29
　SD016 …… 30
　SE017 …… 31
　SE018 …… 32
　SE019 …… 33
　SE020 …… 35
　SE021 …… 36
　SE022 …… 37
　SE023 …… 37
　SE024 …… 38
　SE025 …… 38
　SD026 …… 39
　SE027 …… 40
　SE028 …… 43
　SX029 …… 50
Ⅳ．まとめ
　１．第 82 次調査の成果 …… 53
　２．比恵遺跡の意義 …… 54

挿図目次

Fig. 1　比恵遺跡群と周辺遺跡 …… 3
Fig. 2　調査区位置図 -1 …… 4
Fig. 3　調査区位置図 -2 …… 5
Fig. 4　第 82 次調査全体図 …… 6
Fig. 5　SE001 遺構平断面図 …… 7
Fig. 6　SE001 出土遺物実測図 …… 7
Fig. 7　SE002 遺構平断面図 …… 8
Fig. 8　SE003 遺構平断面図 …… 8
Fig. 9　SE003 出土遺物実測図 -1 …… 9
Fig.10　SE003 出土遺物実測図 -2 …… 10
Fig.11　SE003 出土遺物実測図 -3 …… 11
Fig.12　SE003 出土遺物実測図 -4 …… 12
Fig.13　SE004 遺構平断面図 …… 15
Fig.14　SE004 出土遺物実測図 …… 15
Fig.15　SE005 遺構平断面図 …… 16
Fig.16　SE005 出土遺物実測図 …… 16
Fig.17　SC006 遺構平断面図 …… 17
Fig.18　SC006 出土遺物実測図 …… 18
Fig.19　SC007 遺構平断面図 …… 18
Fig.20　SE008 遺構平断面図 …… 19
Fig.21　SE008 出土遺物実測図 …… 19
Fig.22　SE009 遺構平断面図 …… 20
Fig.23　SE009 出土遺物実測図 …… 20
Fig.24　SE010 遺構平断面図 …… 21
Fig.25　SE010 出土遺物実測図 …… 22
Fig.26　SE011 遺構平断面図 …… 23
Fig.27　SE011 出土遺物実測図 …… 24
Fig.28　SE012 遺構平断面図 …… 26
Fig.29　SE012 出土遺物実測図 …… 26
Fig.30　SE013 遺構平断面図 …… 27
Fig.31　SE013 出土遺物実測図 …… 27
Fig.32　SK014 遺構平断面図 …… 28
Fig.33　SK014 出土遺物実測図 …… 28
Fig.34　SD015・016 遺構平断面図 …… 29
Fig.35　SD015 出土遺物実測図 …… 30
Fig.36　SD016 出土遺物実測図 …… 30
Fig.37　SE017 遺構平断面図 …… 31
Fig.38　SE018 遺構平断面図 …… 32
Fig.39　SE018 出土遺物実測図 …… 32
Fig.40　SE019 遺構平断面図 …… 33
Fig.41　SE019 出土遺物実測図 -1 …… 33
Fig.42　SE019 出土遺物実測図 -2 …… 34
Fig.43　SE020 遺構平断面図 …… 35
Fig.44　SE020 出土遺物実測図 …… 35
Fig.45　SE021 遺構平断面図 …… 36
Fig.46　SE021 出土遺物実測図 …… 36
Fig.47　SE022・023 遺構平断面図 …… 37
Fig.48　SE024 遺構平断面図 …… 38
Fig.49　SE025 遺構平断面図 …… 39
Fig.50　SE025 出土遺物実測図 …… 39

Fig.51 SD026 遺構平断面図・・・・・・・・ 40
Fig.52 SE027 遺構平断面図・・・・・・・・ 40
Fig.53 SE027 出土遺物実測図 -1 ・・・ 41
Fig.54 SE027 出土遺物実測図 -2 ・・・ 42
Fig.55 SE028 遺構平断面図・・・・・・・・ 44
Fig.56 SE028 出土遺物実測図 -1 ・・・ 45
Fig.57 SE028 出土遺物実測図 -2 ・・・ 46
Fig.58 SE028 出土遺物実測図 -3 ・・・ 47
Fig.59 SE028 出土遺物実測図 -4 ・・・ 48
Fig.60 SX029 遺構平断面図 ・・・・・・・ 51
Fig.61 SX029 出土遺物実測図 ・・・・・ 51

表目次

Tab . 1 SE001 出土遺物観察表・・・・・ 7
Tab . 2 SE003 出土遺物観察表 -1 ・・ 13
Tab . 3 SE003 出土遺物観察表 -2 ・・ 14
Tab . 4 SE004 出土遺物観察表・・・・・ 15
Tab . 5 SE005 出土遺物観察表・・・・・ 17
Tab . 6 SE006 出土遺物観察表・・・・・ 18
Tab . 7 SE008 出土遺物観察表・・・・・ 19
Tab . 8 SE009 出土遺物観察表・・・・・ 21
Tab . 9 SE010 出土遺物観察表・・・・・ 22
Tab .10 SE011 出土遺物観察表・・・・・ 25
Tab .11 SE012 出土遺物観察表・・・・・ 26
Tab .12 SE013 出土遺物観察表・・・・・ 27
Tab .13 SK014 出土遺物観察表・・・・・ 28
Tab .14 SD015 出土遺物観察表・・・・・ 30
Tab .15 SD016 出土遺物観察表・・・・・ 31
Tab .16 SE018 出土遺物観察表・・・・・ 32
Tab .17 SE019 出土遺物観察表・・・・・ 34
Tab .18 SE020 出土遺物観察表・・・・・ 35
Tab .19 SE021 出土遺物観察表・・・・・ 36
Tab .20 SE025 出土遺物観察表・・・・・ 39
Tab .21 SE027 出土遺物観察表 -1 ・・ 42
Tab .22 SE027 出土遺物観察表 -2 ・・ 43
Tab .23 SE028 出土遺物観察表 -1 ・・ 48
Tab .24 SE028 出土遺物観察表 -2 ・・ 49
Tab .25 SE028 出土遺物観察表 -3 ・・ 50
Tab .26 SX029 出土遺物観察表 ・・・・ 52

図版目次

巻頭図版
カラー写真 1. 第 82 次調査遺跡全景
カラー写真 2. SE010 井戸跡遺物出土状況
カラー写真 3. SE027 井戸跡遺物出土状況
カラー写真 4.SE028 井戸跡下層下面遺物出土状況
カラー写真 5.SE028 井戸跡作業風景
カラー写真 6. 第 82 次調査出土土器
カラー写真 7.SE021 井戸跡出土長頸壷

PL.1
①. SC006 竪穴式住居跡
②. SC007 竪穴式住居跡
③. SD015・016 溝跡
④. SD015 溝跡 作業風景
⑤. 調査地区中央付近の井戸跡集中箇所

PL.2
⑥. SE001 井戸跡遺物出土状況
⑦. SE005 井戸跡遺物出土状況
⑧. SE009 井戸跡遺物出土状況
⑨. SE009 井戸跡から出土した壷
⑩. SE019 井戸跡遺物出土状況
⑪. SE021 井戸跡遺物出土状況

PL.3
⑫. SE025 井戸跡遺物出土状況
⑬. 井戸跡掘削作業風景
⑭. SE027 井戸跡下層上面遺物出土状況
⑮. SE028 半裁完掘状況
⑯. SE028 井戸跡下層上面遺物出土状況
⑰. SX029 不明遺構

PL . 4 遺物写真 001 ～ 009
PL . 5 遺物写真 010 ～ 018
PL . 6 遺物写真 019 ～ 029
PL . 7 遺物写真 030 ～ 042
PL . 8 遺物写真 043 ～ 057
PL . 9 遺物写真 058 ～ 076
PL .10 遺物写真 077 ～ 088
PL .11 遺物写真 089 ～ 099
PL .12 遺物写真 100 ～ 109
PL .13 遺物写真 110 ～ 120
PL .14 遺物写真 121 ～ 130
PL .15 遺物写真 131 ～ 145

Ⅰ．はじめに

1. 調査に至る経緯

平成15年3月20日に、㈱レッドキャベツの代表取締役社長・岩下義之氏より、福岡市博多区博多駅南6丁目9番地7号（総面積6611.99㎡）について、店舗建設に係る埋蔵文化財事前審査願が提出された（事前審査番号14-2-899）。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に含まれており、申請地周辺においても埋蔵文化財発掘調査が多く行われてきた地点である。これを受けた埋蔵文化財課では、平成15年3月24日に試掘調査を行い、対象地内において遺構が存在することが明らかになった。このため事業者と埋蔵文化財課で、埋蔵文化財の取り扱いについて協議がなされた。

この結果、事業地内において地下に掘削が及ぶ範囲について、記録保存のための発掘調査を行う合意を得ることができた。しかし埋蔵文化財課が発掘調査に着手する時期と、事業者の工事日程に調整が困難な事態が生じた。そこで民間調査機関である岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室が、㈱レッドキャベツの調査委託を受けて発掘調査を受託することになり、㈱レッドキャベツ、岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室、福岡市教育委員会の三者間で、適正な発掘調査を実施するための協定書が取り交わされた。また、福岡市教育委員会の指導のもと、岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室が発掘調査を行うことになった。発掘調査は平成15年5月6日から開始し、同年8月14日に終了することができた。整理作業および報告書作成は、調査終了後に開始し、平成16年8月31日に報告書を刊行した。

なお、現地で調査を行うにあたり、ご理解と多大な協力をして頂いた事業者関連各位、および指導を賜った諸氏には、ここに記して感謝の意を表したく思います。

池崎譲二・岩下義之・久住猛雄・田上勇一郎・田中壽夫・常松幹雄・長家　伸・堀田正道・吉留秀敏
山口譲治・山崎純男・米倉秀紀
福岡市教育委員会埋蔵文化財課・福岡市埋蔵文化財センター・㈱レッドキャベツ・㈱流通企画イスク
㈱都市資源開発・㈱友清商店

2. 調査体制

事業主体（調査委託）	㈱レッドキャベツ	
調査主体	福岡市教育委員会	
調査担当（調査受託）	岡三リビック㈱埋蔵文化財調査室	
調査員	堀苑孝志	（埋蔵文化財調査室　室　長）
	中山　浩	（埋蔵文化財調査室　研究員）
	入江俊之	（日本大学大学院博士課程前期　　現埋蔵文化財調査室　研究員）
	天野直子	（埋蔵文化財調査室　研究員）　整理作業のみ
	相原正人	（埋蔵文化財調査室　研究員）　整理作業のみ
調査作業	加治久佳・菊澤将憲・城戸一郎・倉園眞記・黒木三千夫・柴田徳平・城　僚太郎 中下まり江・浜　梨里子・古川　満・守屋寛志・安富文雄	
整理作業	平野由紀子・佐田祐一・倉園眞記・中下まり江・松尾祥子	

Ⅱ．遺跡の概要

1. 遺跡の立地と環境

比恵遺跡群が所在する福岡平野は博多湾に面し、海浜・砂丘・潟・沖積低地・段丘・丘陵・山地と多様な自然環境を内包している。長い歴史の中では、海岸部における環境の変化が最も著しく、海進・海退や砂丘の形成などが絶えず行われてきた。また内陸部も河川による侵食や堆積作用がみられ、こうした環境の変化が先人の営みを、大きく左右してきたことは言うまでもない。

比恵遺跡群はこの平野のほぼ中央に位置し、北西から流れる御笠川と那珂川に挟まれた台地上にある。基層は花崗岩の風化礫層を基盤とし、その上に粗砂・細砂・シルトが堆積する。さらに上層は阿蘇火砕流による、八女粘土層と鳥栖ロームで形成され、遺構はこのローム面で確認されることになる。標高は５～11ｍ前後を測り、古くは北・東・西側には多くの開析谷が形成され、所謂、八つ手状の景観が望めたものと考えられる。しかし戦前の区画整理や近年の市街地化により、著しく平坦化された現状に往時の面影を見出すことは困難となっている。それでも比恵遺跡群の占めている総体的地形を眺めれば、4㎞ほど南側の春日丘陵を起点として連なる、緩やかな起伏の延びきった北端にあたることを理解できるはずである。

2. 遺跡の歴史的背景

今回で第82次を数えることからも、頻繁に発掘調査が行われてきたことが物語られている。内在する遺跡の時代も旧石器から中世にかけてと幅広く、また遺構及び遺物の密度も高いと言える。

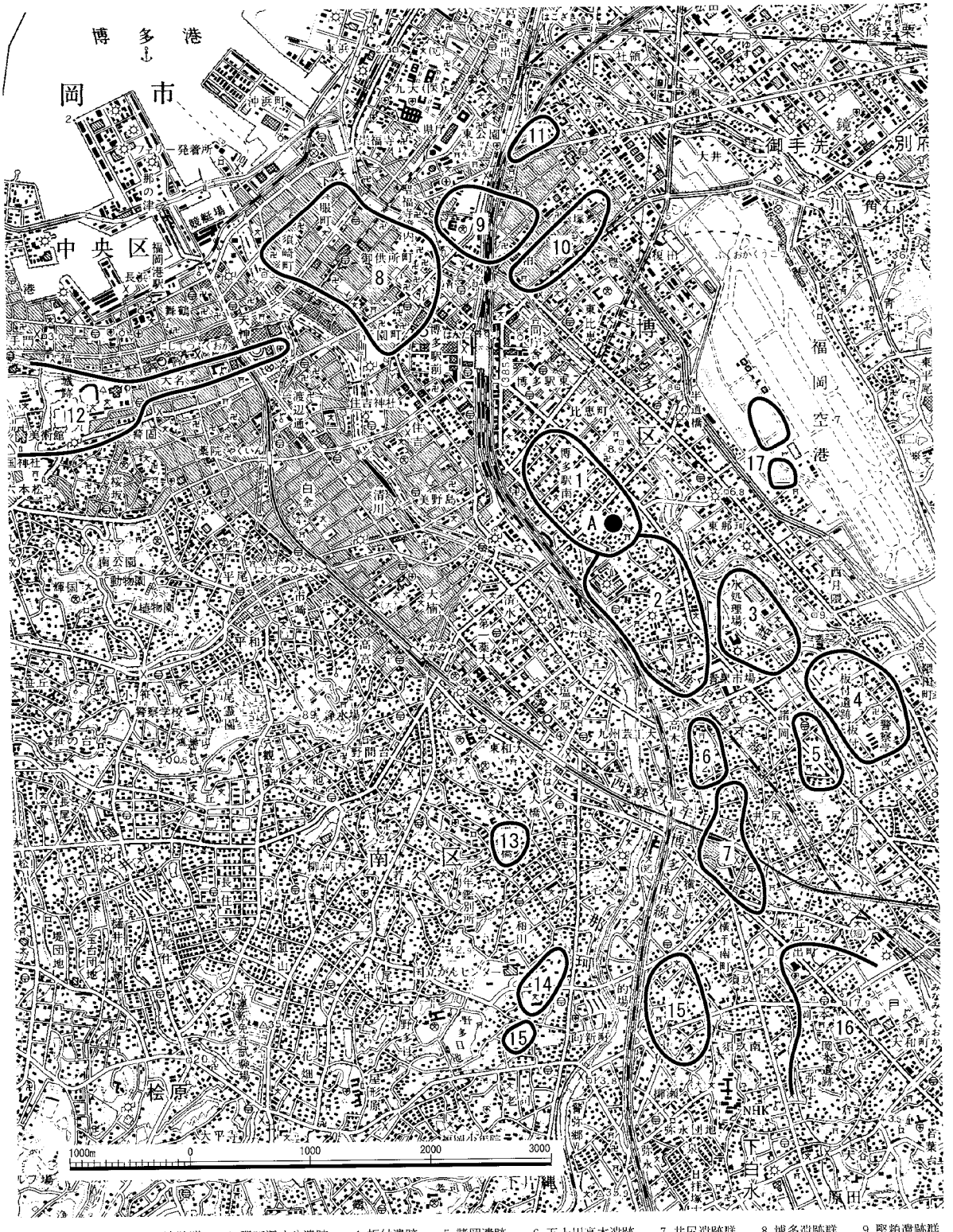
各時代の概略を見ておくと、旧石器時代はナイフ形石器が出土し、縄文時代も土器が出土しているが、いずれも僅少な量である。

しかし弥生時代になると、福岡平野の中心的役割を担っていたことが窺え、急激に密度を増すことになる。その変遷は、まず前期において、台地の北側と西側に集落が出現することにはじまる。中期には集落は、台地全体に広がる様相をみせる。第40・42次調査では、青銅鋳型と取瓶が出土している。さらに57次では板状の鉄製品が発見されており、素材の可能性が指摘されている。こうしたことから、生産活動も行われていたことが推察される。

ここで同時代の遺跡をもう少し視野を広げて探すと、比恵遺跡群の南東には那珂遺跡群が続き、東から入る浅い谷地形を境とし、合わせると約130haの広域にも及ぶ。さらに南側には五十鈴・井尻遺跡群、板付遺跡など他にも多くが続く。また御笠川を挟んだ対岸側にも、雀居遺跡をはじめ複数の遺跡が点在している。春日丘陵まで眼を転じれば、奴国の中心地であり、その権力者を埋葬したと考えられる須玖岡本遺跡や、これを取り巻く多くの遺跡群が知られる。

古墳時代も相変わらず営みは継続していくが、後期になると大型建物群やこれに伴う柵が認められ、「那津官家」の可能性が指摘されている。しかしこれ以降においては、那珂遺跡群の方にこうした官衙的機能が移行していくらしく、瓦・硯・貿易陶磁器をはじめ密度の多寡が逆転する傾向が認められる。

以降の中世においては、那珂郡比恵村の地名が認められることより、村落が営まれていたものと思われるが、かつての盛況をそこに見出すことは難しいようである。



1. 比恵遺跡群　2. 那珂遺跡群　3. 那珂深オサ遺跡　4. 板付遺跡　5. 諸岡遺跡　6. 五十川高木遺跡　7. 井尻遺跡群　8. 博多遺跡群　9. 堅粕遺跡群
10. 占塚遺跡群　11. 吉塚本町遺跡群　12. 福岡城　13. 三宅廃寺　14. 野多目拈渡遺跡　15. 日佐遺跡群　16. 須玖遺跡群　17. 雀居遺跡
A. 比恵遺跡群 第82次地点

Fig.1　比恵遺跡群と周辺遺跡（1/50,000）

Fig.2　調査区位置図 -1

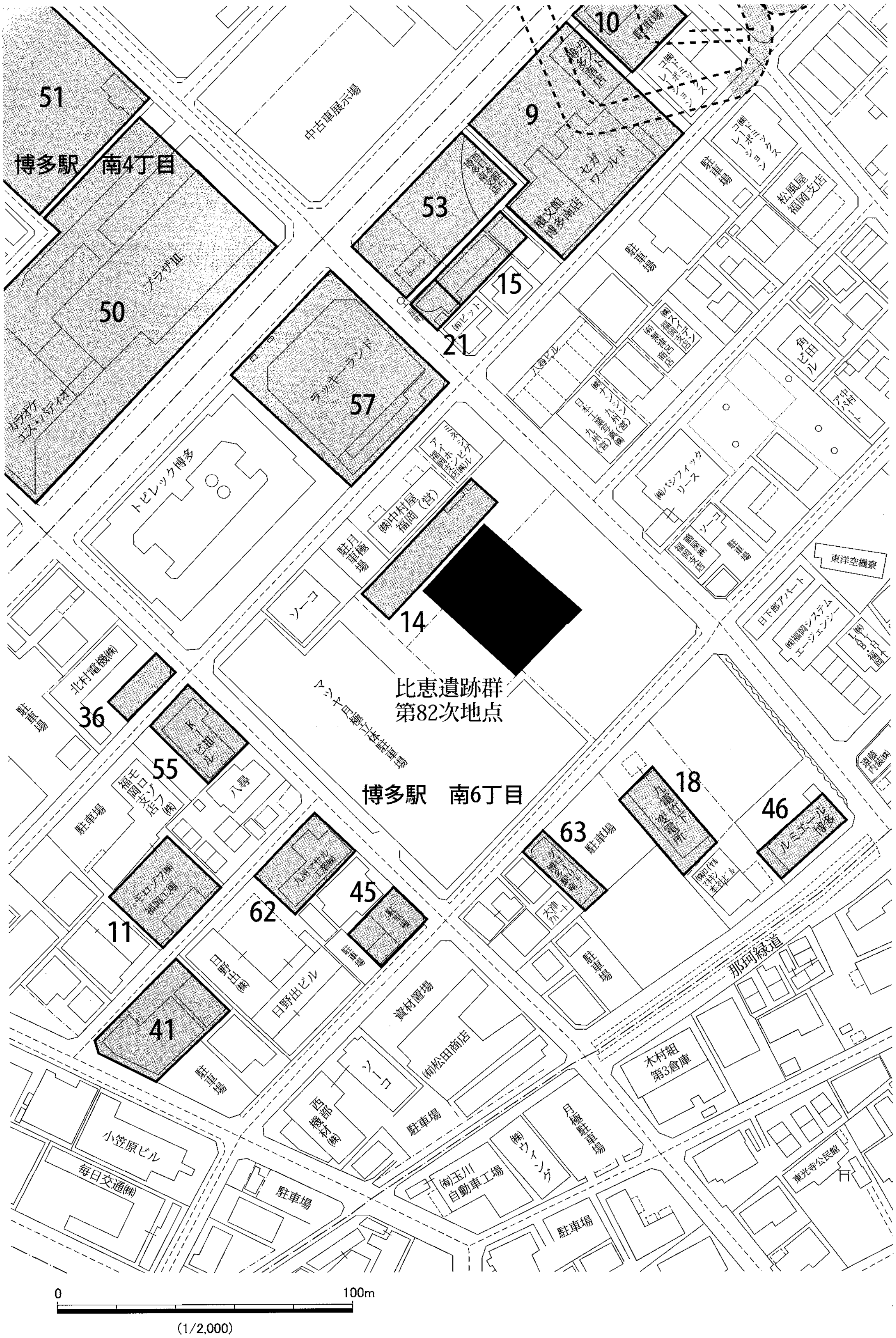


Fig.3　調査区位置図 -2

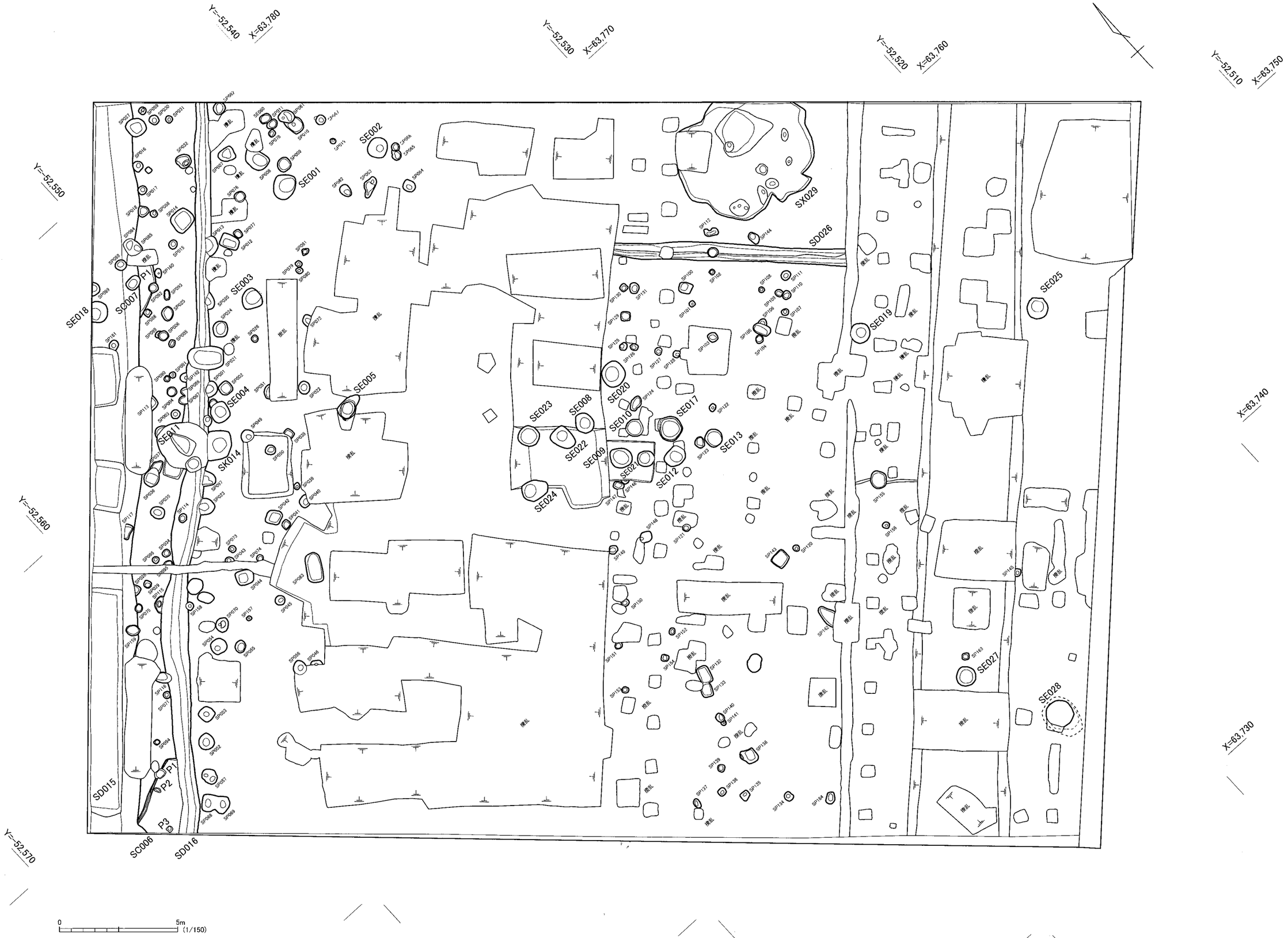


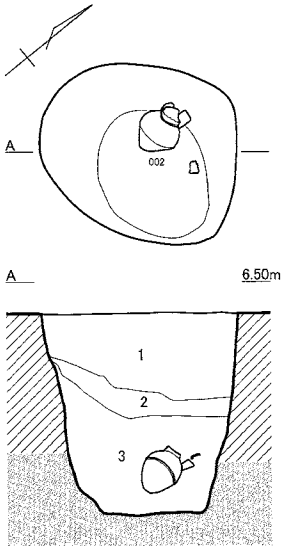
Fig4. 第82次調査全体図

Ⅲ. 発掘調査の記録

SE001　井戸跡

掘り込みの平面形態は、長径約 1.0m、短径約 0.9m を測り、楕円形を呈する。確認面からの深さは約 1.1m を測り、壁はやや緩やかに立ち上がる。八女粘土層には確認面から約 0.8m の深さで達している。

出土遺物は、中層から下層にかけて弥生土器片、礫等が多数出土している。埋土中から弥生時代後期に属すると考えられる甕の口縁部（001）、さらに下層からは弥生時代後期に属する壺（002）が、ほぼ完全な形で出土している。



1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロックを含む
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性やや有り　ロームブロック・粘土ブロックを少量含む

0　1m (1/40)

Fig.5　SE001 遺構平断面図

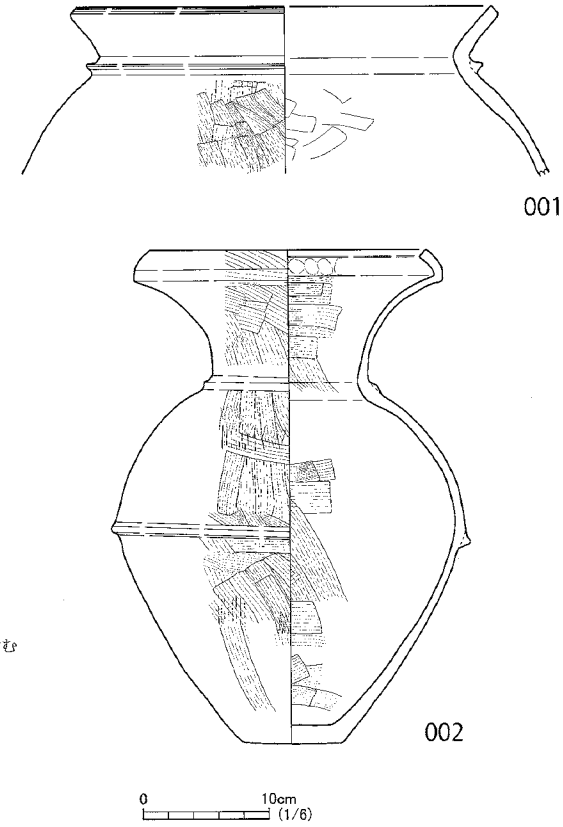


Fig.6　SE001 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
001	埋土	弥生土器 甕	(32.8)	—	13.3	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部から胴部の上部まで残存。頸部には突帯が巡る。外面胴部はハケ目、内面胴部はヘラ削り。口縁部はハケ目後、横ナデ。胎土は砂粒を含む。	弥生後期
002	下層	弥生土器 壺	22.0	7.9	39.4	浅黄橙 7.5YR6/4	口縁から頸部を僅かに欠損するが、ほぼ完形の複合口縁壺。頸部の付け根と胴部に突帯が巡る。内外面ともハケ目が施され、口縁部の外面はハケ目、内面は指頭圧痕が残る。胎土は砂粒を含む。	弥生後期

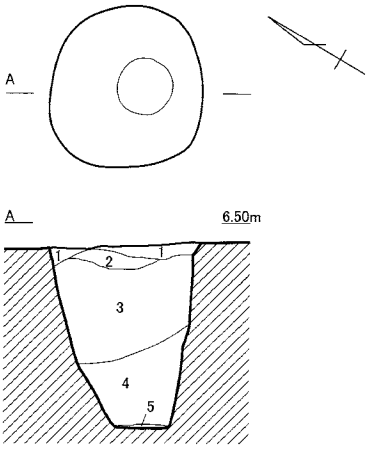
( ) 内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab1.　SE001 出土遺物観察表

SE002　井戸跡

掘り込みの平面形態は、直径 0.8m を測り、ほぼ円形を呈する。確認面からの深さは約 1.0m を測る。壁は底部に向かうに従って先細りとなり、八女粘土層までは達しない。当遺構は周辺の井戸と比較して、やや小規模で浅いものの、全体の形状からして井戸と考えた。

出土遺物はなく、時代は判然としない。



1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強　粘性弱
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強　粘性弱　ローム粒・ブロックを多量に含む
3. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒を微量含む
4. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性強　ローム粒を微量含む
5. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり弱　粘性有り

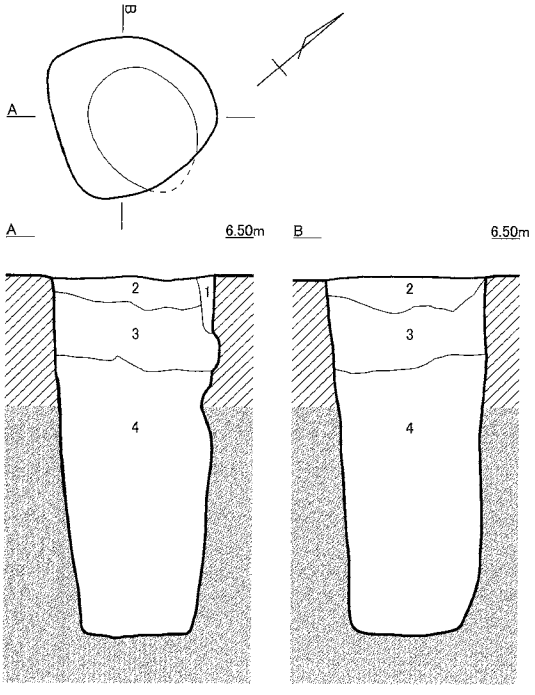
0　1m (1/40)

Fig.7　SE002 遺構平断面図

SE003　井戸跡

掘り込みの平面形態は、直径約 0.9m を測り、やや歪な円形を呈する。確認面からの深さは約 1.9m を測る。壁は東壁がややオーバーハングするのを除いて、ほぼ垂直に立ち上がる。八女粘土層には確認面から約 0.7m の深さで達している。

出土遺物は上層から中層にかけて僅かに出土する。下層からは弥生時代中期末頃に属する土器片と、接合して完形になる赤色顔料を施した壺（024）と、器台（033）が出土する。また大型の甕（019）も接合したところ、胴部下半分が欠損しており、井戸に付設した用途も考えられる。



1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロックを多量に含む
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロックを少量、小礫を微量含む
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロックを少量含む
4. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り

0　1m (1/40)

Fig.8　SE003 遺構平断面図

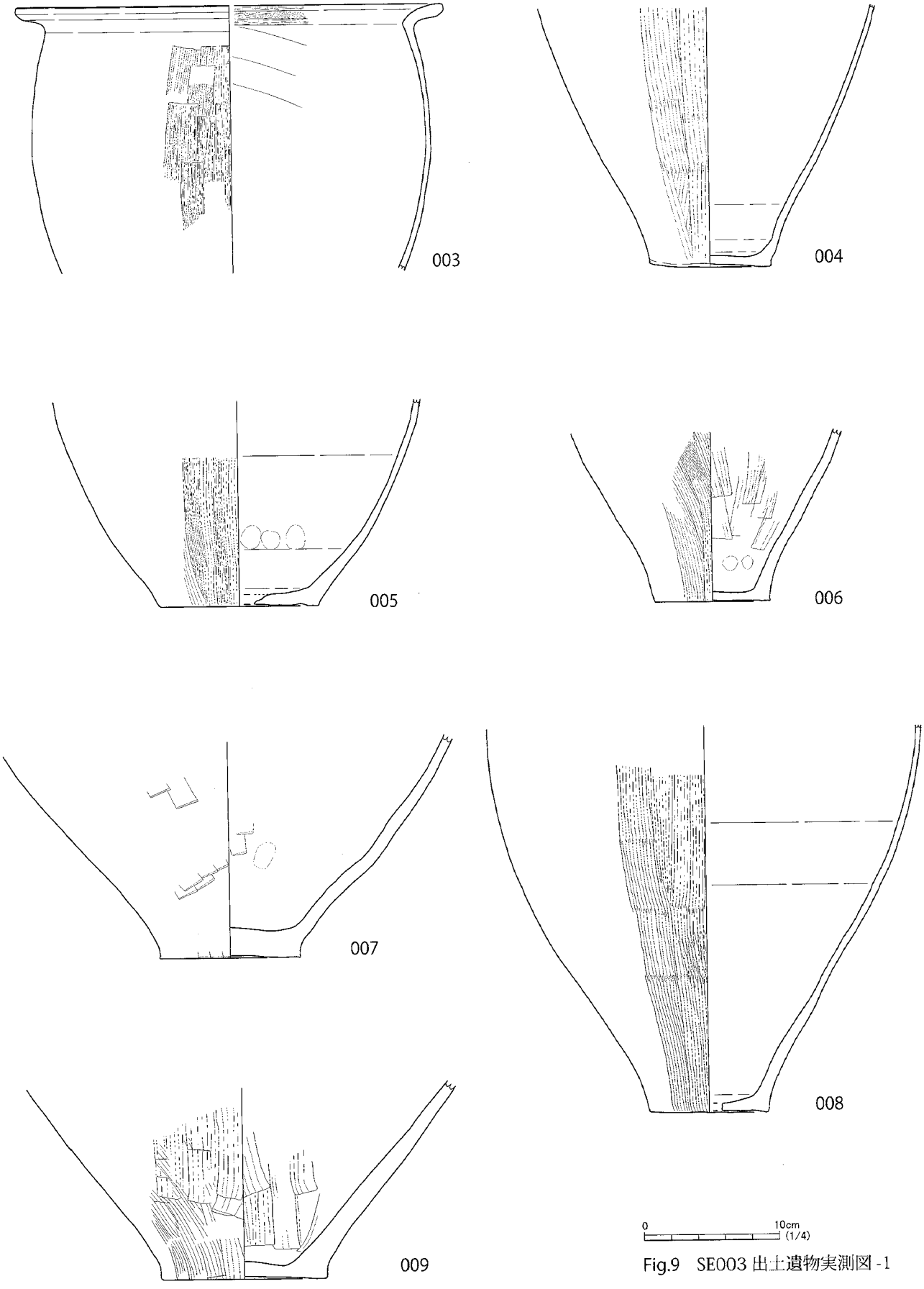


Fig.9　SE003 出土遺物実測図 -1

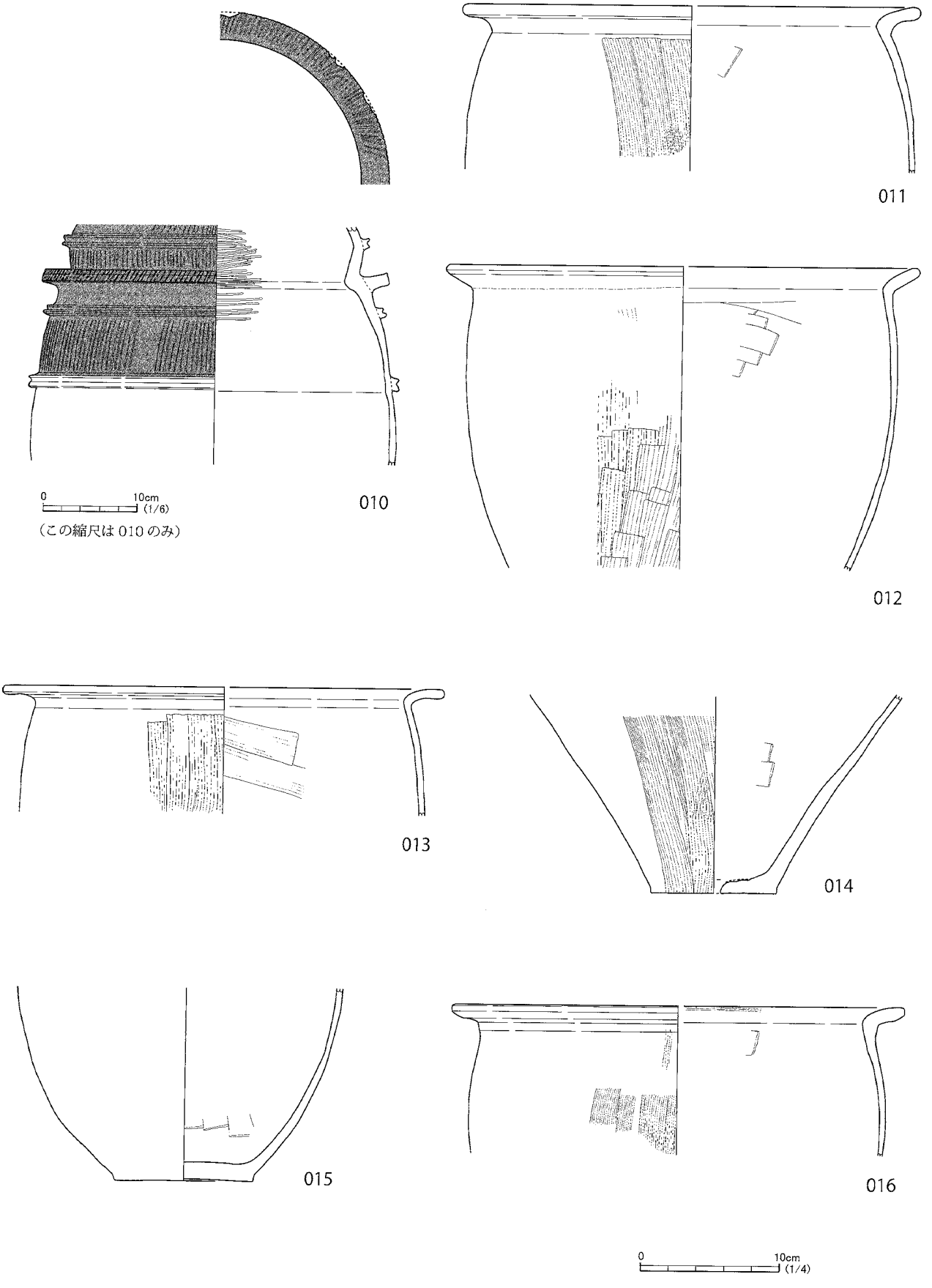
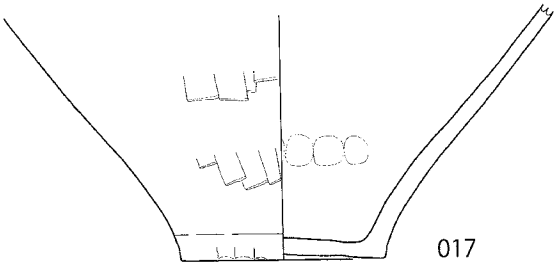
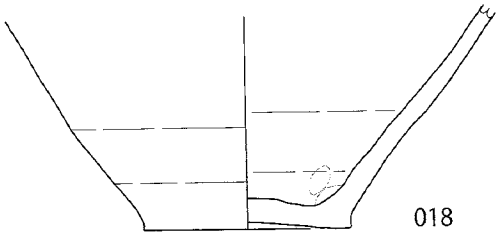
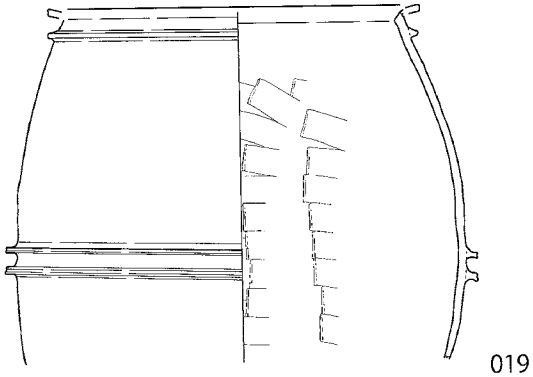


Fig.10　SE003 出土遺物実測図 -2

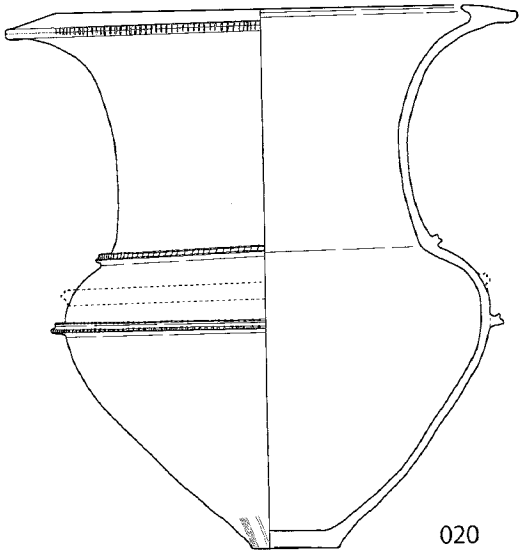


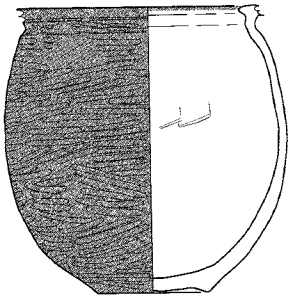


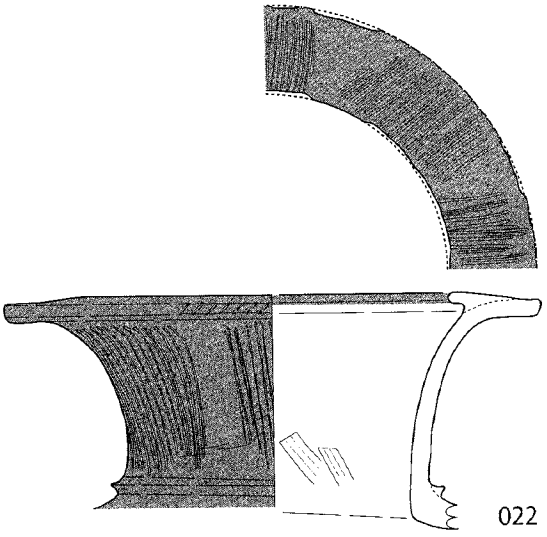


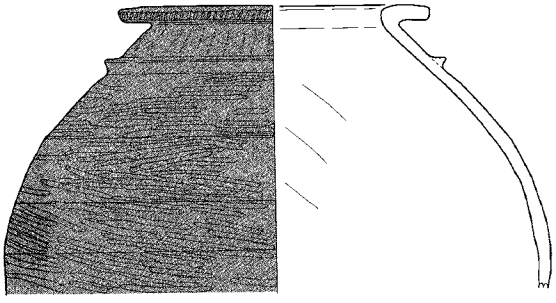
0 25cm (1/10)

（この縮尺は 019 と 020 のみ）









0 10cm (1/4)

Fig.11　SE003 出土遺物実測図 -3

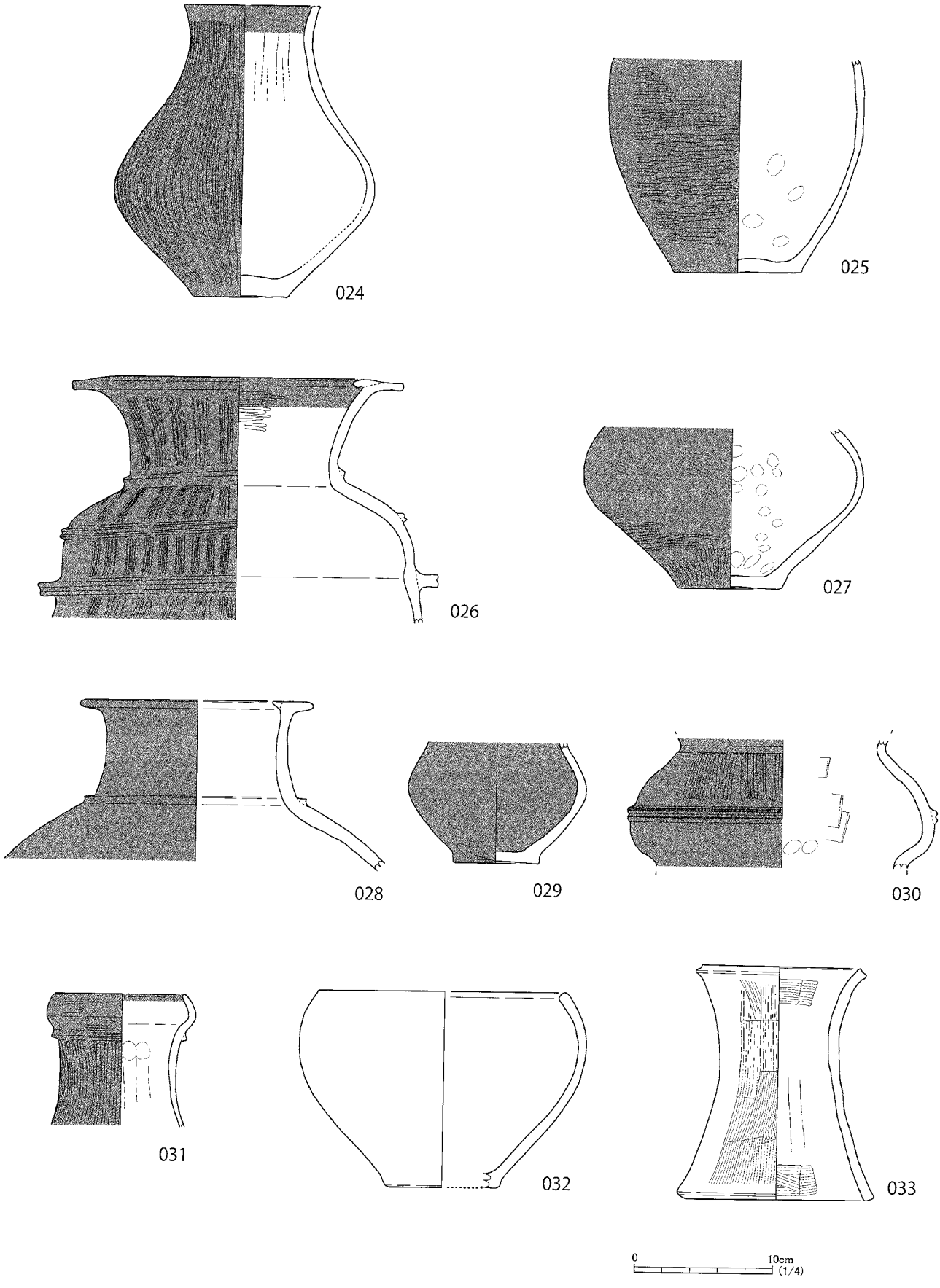


Fig.12　SE003 出土遺物実測図 -4

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
003	下層	弥生土器 甕	(31.6)	—	〔19.8〕	橙 2.5YR6/6	口縁部から胴部が残存。外面はハケ目、内面は横方向のヘラ削り、口縁部はハケ目。	弥生中期
004	下層	弥生土器 甕	—	8.9	〔19.2〕	にぶい橙 7.5YR6/4	胴部から底部が残存。外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。内面底部には煤が付着する。	弥生中期
005	下層	弥生土器 甕	—	11.7	〔15.2〕	橙 7.5YR7/6	胴部から底部が残存。底部に焼成後の穿孔がある。外面はハケ目、内面はナデ。底部付近に指頭圧痕が残る。	弥生中期
006	下層	弥生土器 甕	—	8.5	〔12.5〕	にぶい橙 7.5YR6/4	胴部から底部が残存。外面はハケ目、内面はハケ目後ナデ。底部付近に指頭圧痕が残る。	弥生中期
007	下層	弥生土器 甕	—	10.3	〔16.0〕	にぶい橙 7.5YR6/4	胴部から底部が残存。外面はヘラ削り、内面はヘラ削りとナデ。底部付近に指頭圧痕が残る。	弥生中期
008	下層	弥生土器 甕	—	8.8	〔28.6〕	にぶい赤褐 5YR5/4	胴部から底部が残存。外面はハケ目、内面はナデ。底部中央には焼成後の穿孔がある。	弥生中期
009	下層	弥生土器 甕	—	10.7	〔14.1〕	にぶい黄橙 10YR6/4	胴部から底部が残存。外面は粗いハケ目、内面は底部付近がナデ、胴部がハケ目。内面に炭化物が付着する。	弥生中期
010	下層	弥生土器 甕	—	—	〔25.8〕	明赤褐 2.5YR5/6	胴部のみ残存。M字状の突帯が3条、刻目突帯が1条巡る。赤色顔料は上部から最下段のM字状突帯まで塗布され、以下は部分的な付着。外面は縦方向のヘラ磨きで暗文が施される。内面はナデで、輪積み痕に沿って爪痕が残る。	弥生中期
011	下層	弥生土器 甕	(33.2)	—	〔12.0〕	橙 5YR6/8	口縁部付近のみ残存。胴部は外面が縦方向のハケ調整、内面はヘラ削り。口縁部は横ナデ。	弥生中期
012	下層	弥生土器 甕	(34.2)	—	〔22.0〕	にぶい赤褐 5YR5/4	外面は摩滅しているが、ハケ目が施され、口縁部付近は横ナデ。内面は上位はヘラ削りが施されるが、下位は摩滅のため不明瞭。	弥生中期
013	下層	弥生土器 甕	(31.8)	—	〔9.2〕	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部付近のみ残存。胴部は外面が縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目が施される。口縁部は横ナデ。	弥生中期
014	下層	弥生土器 甕	—	(9.0)	〔14.3〕	にぶい黄橙 10YR7/2	底部付近のみ残存。底部は平底で、穿孔有り。外面はハケ目、内面はヘラ削り後、ナデ。	弥生中期
015	下層	弥生土器 甕	—	9.9	〔14.0〕	にぶい黄橙 10YR6/4	底部付近のみ残存。底部は平底。外面は縦方向のナデ、内面は胴部がヘラ削り、底部はナデ。	弥生中期
016	下層	弥生土器 甕	(32.6)	—	〔10.8〕	にぶい赤褐 2.5YR5/4	口縁部付近のみ残存。胴部は外面が縦方向のハケ目、口縁付近はハケ後、横ナデ。内面はヘラ削り、口縁部はハケ後、横ナデ。	弥生中期
017	中層	弥生土器 壺	—	10.9	〔13.0〕	橙 7.5YR6/6	底部付近のみ残存。底部は平底。外面は下から上方向へのヘラ削り。内面はナデ。指頭圧痕有り。底部は僅かに上げ底となっている。	弥生中期
018	下層	弥生土器 甕	—	11.0	〔11.3〕	にぶい橙 7.5YR6/4	底部のみ残存。底部は平底で、僅かに上げ底となっている。外面はヘラ削りのような工具痕が一部に残るが、不明瞭。内面はなで調整、指頭圧痕有り。胎土には粗い砂粒が混じる。外面の一部に煤の付着あり。	弥生中期

( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab2.　SE003 出土遺物観察表 -1

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
019	下層	弥生土器 甕	—	—	〔46.6〕	橙 7.5YR6/6	大型甕の口縁部付近から胴部のみ残存。突帯が3条巡る。外面は磨滅が著しく、調整は不明。内面はハケ目が施される。胎土は粗砂粒を含む。	弥生中期
020	下層	弥生土器 壺	67.8	11.5	71.9	にぶい橙 7.5YR7/4	大型の壺。口縁部は鋤型を呈し、先端に刻目を施す。頸部の付け根と胴部に刻目を持つM字の突帯が巡り、肩部には突帯の痕が残る。内外面とも胴部はナデ、外面底部付近はハケ目。	弥生中期
021	下層	弥生土器 壺	—	5.9	15.2	赤褐 5YR4/6	赤色顔料を塗布した無頸壺。全面に磨きが施されていたと思われるが、摩滅が著しいため不明。内面はヘラ削り後、ナデ。	弥生中期
022	下層	弥生土器 壺	(28.4)	—	〔11.3〕	明赤褐 5YR5/6	赤色顔料を塗布した壺。口縁部から頸部まで残存。口縁部は鋤状を呈し、刻目を施す。頸部の付け根には突帯が1条巡る。外面頸部は削り後に磨いたのか、ヘラ磨きに工具痕が僅かに残る。口縁部上面は放射状に磨きを施される。突帯付近はナデ。内面はハケ目、頸部の上位はナデ。胎土は粗い砂粒を含む。	弥生中期
023	下層	弥生土器 壺	(16.6)	—	〔15.2〕	赤褐 2.5YR4/8	赤色顔料を塗布した壺。口縁部は刻み目を施し、頸部付け根に三角突帯が1条巡る。頸部は縦方向の暗文が施され、突帯以下は横方向のヘラ磨きが施される。内面は頸部はヘラ磨き、胴部はヘラ削りが施される。	弥生中期
024	下層	弥生土器 壺	(9.8)	6.8	21.3	赤褐 2.5YR4/8	赤色顔料を塗布した壺。口縁部の内面にも顔料が施される。外面は全面ヘラ磨きで、暗文が施される。内面はナデ、底部付近に僅かに指頭圧痕が残る。	弥生中期
025	下層	弥生土器 壺	—	9.3	〔15.6〕	明赤褐 2.5YR5/8	赤色顔料を塗布した壺。外面は全面的にヘラ磨きを施す。内面はナデ、僅かに指頭圧痕が残る。	弥生中期
026	下層	弥生土器 壺	23.9	—	〔17.7〕	赤褐色 2.5YR4/8	胴部より口縁部まで残存。口縁部は鋤状を呈す。頸部の付け根に三角突帯、肩と胴部にM字形の突帯が巡る。外面はヘラ磨き、口縁部、突帯付近は横ナデ。内面は口縁付近はヘラ磨きを施すが、胴部以下は摩滅しており、不明。	弥生中期
027	下層	弥生土器 壺	—	7.4	〔11.7〕	明赤褐 2.5YR5/8	赤色顔料を塗布した壺。外面は横方向のヘラ磨き、底部付近は縦方向。内面はナデで、指頭圧痕、爪痕が僅かに残る。	弥生中期
028	下層	弥生土器 壺	(7.4)	—	〔11.7〕	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁部から胴部の一部まで残存。摩滅が著しく、内外面とも調整は不明。頸部の付け根に突帯が1条巡る。口縁部は鋤先状をなす。	弥生中期
029	下層	弥生土器 壺	—	6.2	〔8.8〕	橙 5YR6/8	赤色顔料を塗布した壺の底部付近。底部を含めて内外面とも赤色顔料を施す。外面はやや不明確だが、底部付近にヘラ削りが見られる。内面はナデ。胎土は粗い砂粒を含む。	弥生中期
030	下層	弥生土器 壺	—	—	〔9.3〕	赤褐 5YR4/6	赤色顔料を塗布した壺の胴部のみ残存。刻目突帯が巡る。突帯より上方は縦のヘラ磨き、突帯以下は磨滅のため不明。内面はヘラ削りで、部分的に赤色顔料の付着が見られる。	弥生中期
031	下層	弥生土器 壺	(9.3)	—	〔9.6〕	赤褐 5YR4/6	赤色顔料を塗布した袋状口縁壺の口縁部から頸部。口縁部下に三角突帯が1条巡る。外面は口縁部が横方向のヘラ磨き、頸部が縦方向のヘラ磨きで、内面は口縁部が横ナデ、頸部はナデ上げており、指痕が残る。	弥生中期
032	下層	弥生土器 鉢	(17.9)	8.3	14.3	にぶい黄橙 10YR7/4	外面は摩滅しており不明確だが、内外面共にナデと思われる。口縁部は内湾している。	弥生中期
033	下層	弥生土器 器台	12.2	14.1	17.1	にぶい黄橙 10YR7/3	外面は縦方向のハケ目、内面は口縁部、底面付近は横方向のハケ目、胴部はナデ。	弥生中期

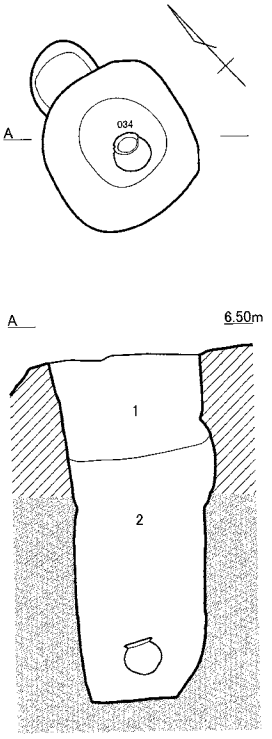
( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab3.　SE003 出土遺物観察表 -2

SE004　井戸跡

平面形態は直径約 0.8m を測り、ほぼ円形を呈する。確認面からの深さは約 1.9m を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。八女粘土層には確認面から約 0.7m の深さで達している。当遺構の北側に小穴との切り合いが確認されるが、新旧関係は明確にし得なかった。

出土遺物は埋土中から弥生土器片がわずかに出土しており、底部付近では弥生時代後期に属する壺が（034）、完形で出土している。



1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロックを微量、小礫を微量含む
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　小礫を微量含む

0　1m (1/40)

Fig.13　SE004 遺構平断面図

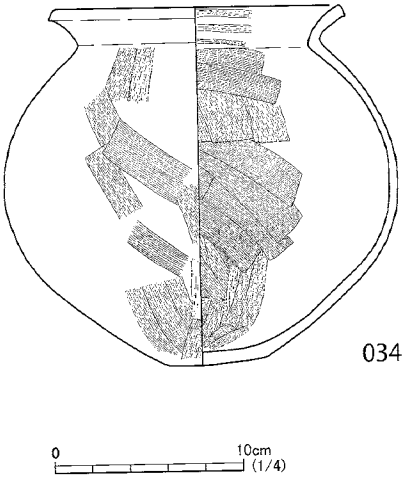


Fig.14　SE004 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
034	下層	弥生土器 壺	15.7	5.3	19.05	橙 7.5YR6/6	完形だが、口縁部を僅かに欠損する。口縁部は面取りが行なわれ、くの字状に折れて緩やかに外反する。底部は平底。外面は摩滅しているが、胴部は内外面ともハケ目が密に、口縁部は横ナデ。胎土には粗砂と雲母が混じる。	弥生後期

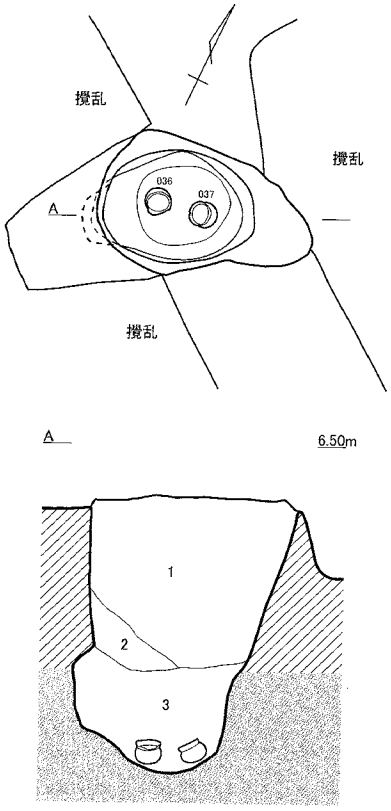
（ ）内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab4.　SE004 出土遺物観察表

SE005　井戸跡

確認時は、周囲も含め攪乱で破壊されていたが、歪な楕円形を呈するのが確認できた。規模は長径約 1.2m、短径約 0.7m を測り、確認面からの深さは約 1.4m を測る。壁は東壁が緩やかに立ち上がるのを除いては、ほぼ垂直に立ち上がる。八女粘土層には確認面から約 0.9m の深さで達しており、西壁の一部には粘土の崩落の跡がある。底面は丸みを帯びている。

出土遺物は全層から須恵器、土師器片、礫等が多数出土しており、底部付近では古墳時代後期に属する完形の丸底の壺が、2 点（036・037）並んだような状態で出土している。



1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒を微量、小礫を微量含む
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性あり　ローム粒、ブロックを少量含む
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロックを少量含む

0　1m (1/40)

Fig.15　SE005 遺構平断面図

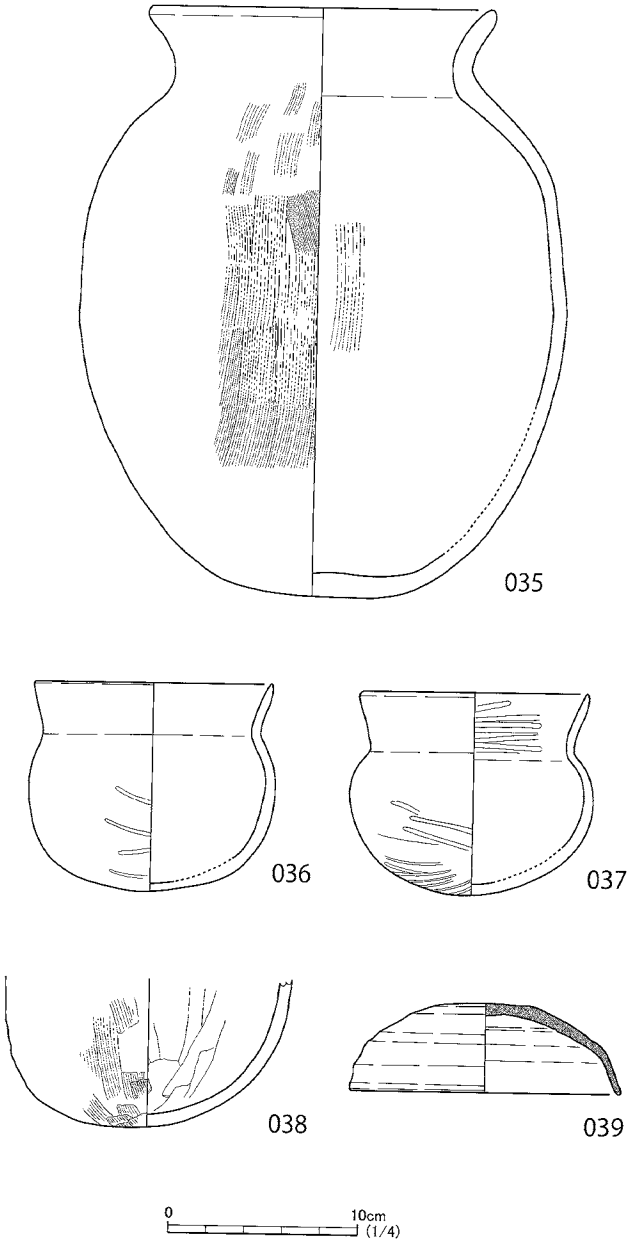


Fig.16　SE005 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
035	埋土 一括	土師器 甕	18.4	—	31.3	にぶい黄橙 10YR7/3	一部欠損するが、ほぼ完形の丸底の甕。口縁部は外反する。外面は摩滅しているが、ハケ目が施される。内面も摩滅が著しいが、ハケ目が確認できる。底部付近は指頭圧痕が残る。	古墳後期
036	下層	土師器 壺	12.6	—	11.1	橙 2.5YR7/8	小型の丸底土器。口縁部が部分的に欠損する。全体的に摩滅しているが、僅かに磨きの痕が確認できる。胎土は細かい砂粒を含む。	古墳後期
037	下層	土師器 壺	12.2	—	10.8	橙 2.5YR6/8	小型の丸底土器。口縁部が僅かに欠損するが、ほぼ完形。外面は摩滅しているが、磨きが確認できる。口縁部内面も磨きが施される。胎土は細かい砂粒を含む。	古墳後期
038	下層	土師器 壺	—	—	〔8.0〕	赤 10R5/6	丸底の壺。胴部下半から底部まで残存。外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。胎土は粗い砂粒を含む。	古墳後期
039	下層	須恵器 蓋	14.3	4.9	4.0	灰 5Y5/2	底部は回転ヘラ削りが施される。胎土は砂粒を含む。	古墳後期

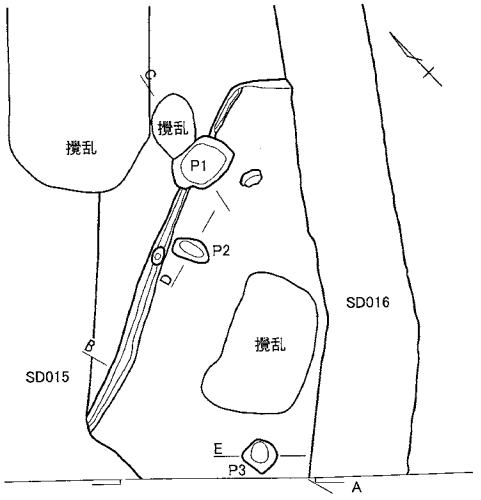
( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

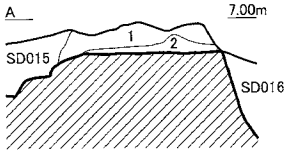
Tab5.　SE005 出土遺物観察表

SC006　竪穴式住居跡

北西側は SD015、南東側は SD016 と 2 条の溝によって破壊されている。また、南側は調査区外へ延びることが推測される。そのため平面形態、規模は不明であるが、北東隅のコーナーが検出されていることから、方形を呈していたのではないかと推測される。確認面からの深さは約 0.1m を測る。床面は全体的に硬化しており、北壁に沿って周溝が検出された。住居内には小穴が 3 基検出されたが、そのうち 1 基は周溝を破壊しており、住居に伴うものかどうかは不明である。

出土遺物は弥生土器の小破片が多いが、床面からは弥生時代後期に属する甕の底部が 1 点（040）出土している。





1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性弱　暗褐色土を少量含む
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり強　粘性有り　ローム粒多量、ブロックを微量含む

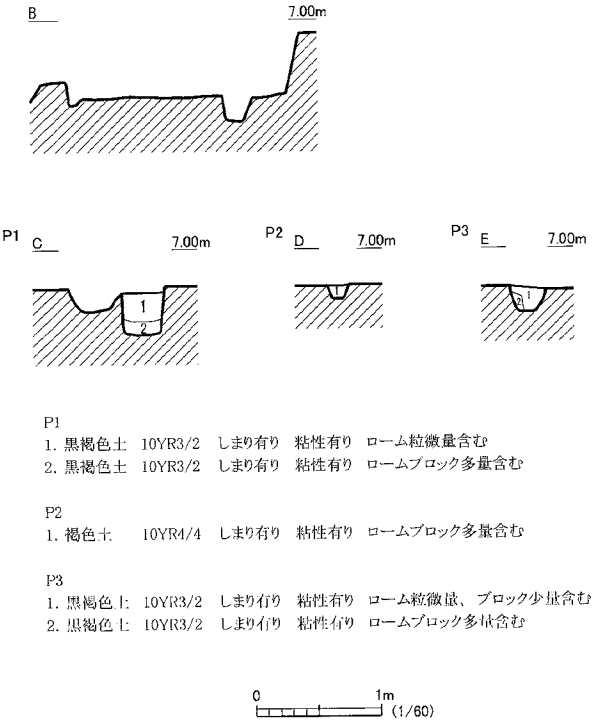


Fig.17　SC006 遺構平断面図

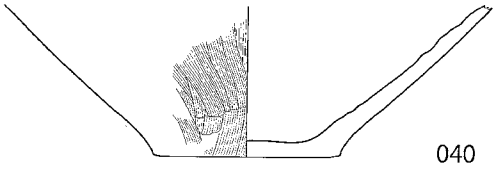


Fig.18　SC006 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
040	床直	弥生土器 甕	—	10.0	〔8.0〕	橙 5YR6/8	甕の底部のみ残存。平底。外面はハケ目が施される。内面は摩滅が著しく調整痕は不明。胎土は粗い砂粒を多く含む。	不明

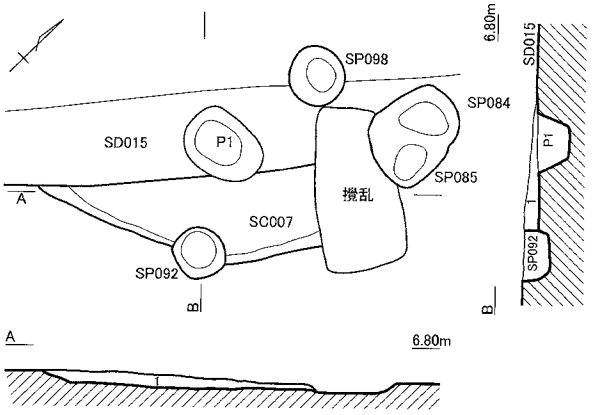
( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab6.　SC006 出土遺物観察表

SC007　竪穴式住居跡

北西側は SD015 に、北東側は攪乱に破壊されており、竪穴式住居跡の南東部のみ検出された。規模は不明だが、南東壁が弧状を呈しているのが確認できたため、平面形態は円形に近い形状を呈していたのではないかと推測される。確認面からの深さは約 0.1m を測り、床面は硬化している。住居内には小穴が 1 基検出されたが、柱痕等は確認できず、住居に伴うものであったかどうかは明確にし得なかった。

出土遺物は弥生土器、須恵器の小破片、黒曜石等が出土しており、また住居内の小穴からも多数の小破片が出土しているが、SD015 からの混入も考えられる。



1. にぶい黄褐色土　10YR4/3　しまり有り　粘性 弱　小礫を含む

P1
1. 黒褐色土　　7.5YR3/2 しまり 強　粘性有り　ローム粒・ブロック少量含む

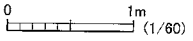
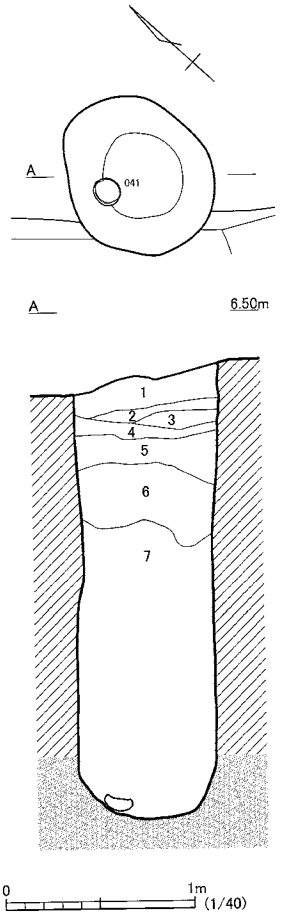


Fig.19　SC007 遺構平断面図

SE008　井戸跡

確認面は削平を受けているが、平面形態は楕円形を呈し、長径約 0.9m、短径約 0.7m を測る。確認面からの深さは約 2.4m を測り、八女粘土層には約 2.1m の深さで達している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

出土遺物の点数は少ないが、底部付近からは弥生時代後期に属する壺が（041）出土している。



1. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り
2. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　炭化物を微量含む
3. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　小礫を微量、炭化物を微量含む
4. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　小礫を微量、ローム粒を微量含む
5. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒を微量含む
6. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロック微量、炭化物を微量含む
7. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロックを微量含む

Fig.20　SE008 遺構平断面図

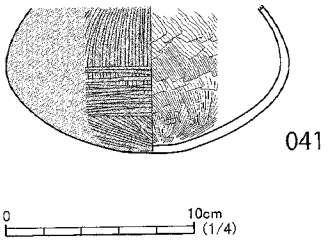


Fig.21　SE008 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
041	下層	弥生土器 壺	—	3.1	〔7.8〕	灰黄褐 10YR6/2	壺の胴部から底部にかけて残存。底部はわずかに平底となる。外面は黒色研磨が施され、胴部の最も膨らむ部分は横方向にそれ以外は縦方向に磨きが確認できる。内面のハケ目は底部から外側に放射線状に施される。	弥生後期

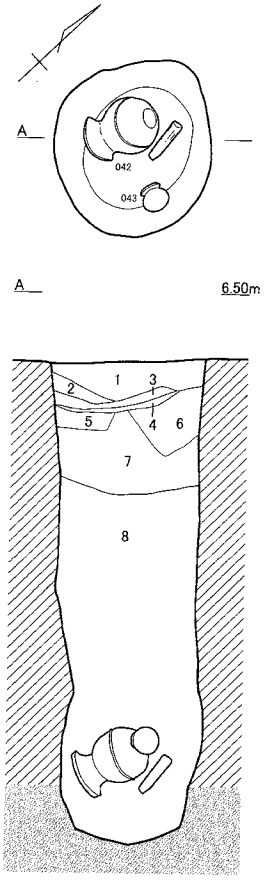
( ) 内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab7.　SE008 出土遺物観察表

SE009　井戸跡

掘り込みの平面形態は長径約 1.0m、短径約 0.9m を測り、ほぼ楕円形を呈する。確認面からの深さは約 2.6m を測る。八女粘土層には約 2.2m の深さで達している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

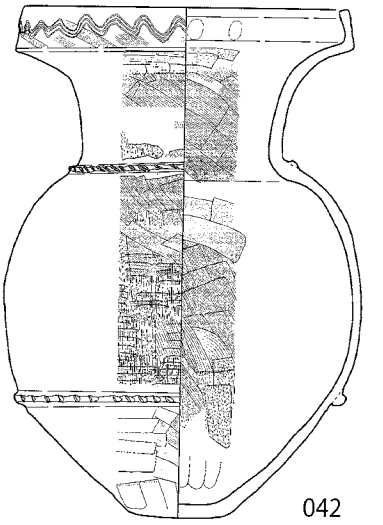
出土遺物の点数は少ないが、下層から弥生土器片、木片が数点出土している。底部付近からは弥生時代後期に属する、完全な形をした複合口縁壺（042）と袋状口縁壺（043）が出土している。



1. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロック少量含む
2. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック多量含む
3. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック微量、炭化物微量含む
4. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり有り　粘性有り　砂粒少量、炭化物微量含む
5. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック少量、炭化物微量含む
6. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック少量、小礫微量、炭化物微量含む
7. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック多量、炭化物微量含む
8. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック少量含む

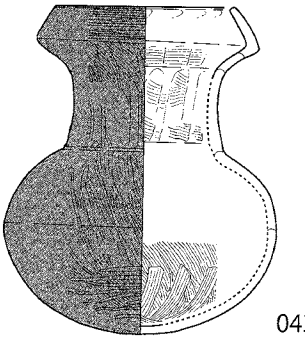
0　1m (1/40)

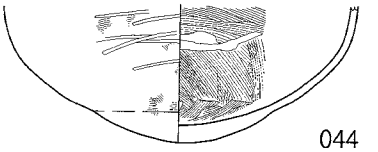
Fig.22　SE009 遺構平断面図



0　10cm (1/6)

（この縮尺は 042 のみ）





0　10cm (1/4)

Fig.23　SE009 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
042	下層	弥生土器 壺	25.7	8.3	40.25	灰黄褐 10YR5/2	複合口縁壺。頸部の付け根と胴部に刻み目を持つ突帯が1条ずつ巡る。外面胴部はタタキ後、ハケ目、底部付近はハケ目、ヘラ削りが施される。頸部はハケ目が施され、口縁部はハケ目後、波状の櫛描紋が施される。内面は口縁部、底部付近がナデ、他はハケ目が施される。胎土は粗い砂粒をやや多く含む。	弥生後期
043	下層	弥生土器 壺	9.6	—	17.4	明赤褐 2.5YR5/8	口縁部の一部を欠き、胴部の一部が剥離するが、ほぼ完形の袋状口縁壺。表面は摩滅しているが、赤色顔料が施されている。外面はハケ目後、磨きが施される。内面はハケ目で、頸部はナデ上げた後ハケ目が施される。口縁部は横ナデで、指の痕が残る。胎土は精良で、金雲母を含む。	弥生後期
044	下層	弥生土器 壺	—	—	〔7.3〕	灰黄 2.5Y7/2	胴下半のみ残存。底部は丸底。外面はハケ目後、磨き、内面はハケ目が施される。胎土は精良で、金雲母が含まれる。	弥生後期

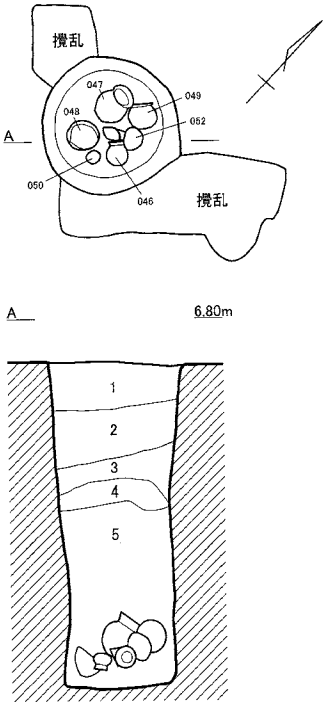
( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab8.　SE009 出土遺物観察表

SE010　井戸跡

西側と東側が攪乱に破壊されているが、平面形態はほぼ円形を呈し、直径約 0.7m を測る。確認面からの深さは約 1.7m を測る。八女粘土層には達しておらず、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦となっている。

出土遺物は弥生時代後期に属する甕と壺が出土しており、底部付近からは完全な形をした壺（046・047・049・052）と破片が集中して出土している。



1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性 弱　ロームブロック少量、小礫微量含む
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性 弱　ロームブロック多量含む
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性 有り　ローム粒微量、小礫微量含む
4. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性 有り　ロームブロック多量含む
5. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性 有り　ローム粒少量、炭化物微量含む

0　1m (1/40)

Fig.24　SE010 遺構平断面図

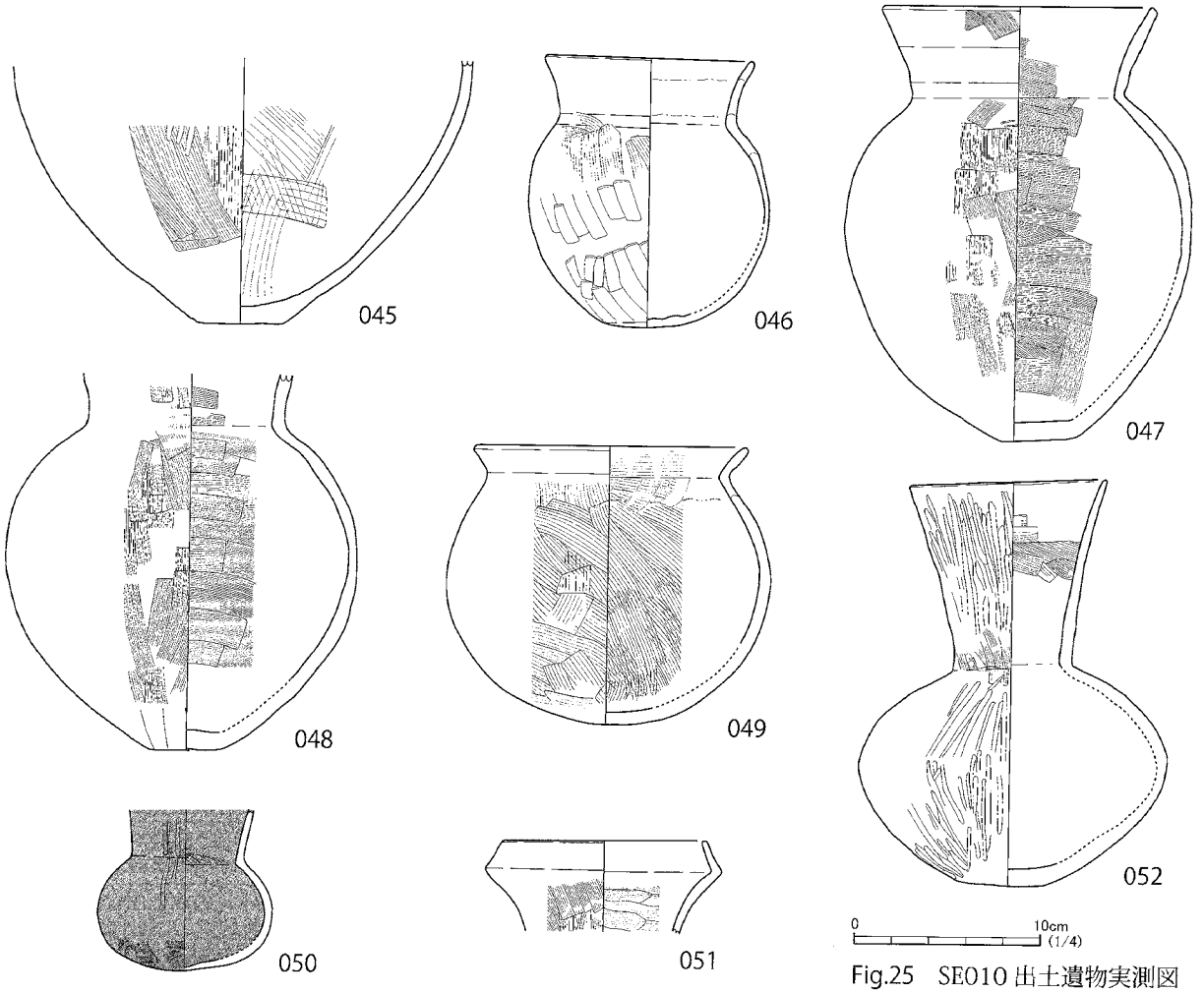


Fig.25　SE010 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
045	下層	弥生土器 甕	—	4.6	〔14.4〕	浅黄橙 7.5YR8/4	甕の胴部下半から底部が残存。底部は平底。外面はハケ目が施され、内面は粗いハケ目が施される。胎土には粗い砂粒が含まれる。	弥生後期
046	下層	弥生土器 壺	11.3	4.8	14.8	灰黄 2.5Y7/2	完形の小型の壺。底部は稜があり、平底に近いが、丸みを帯びる。胴部下半はヘラ削り、上半はハケ目。内面はナデ。口縁部は横ナデ。胎土は砂粒を多量に含む。	弥生後期
047	下層	弥生土器 壺	14.8	3.9	23.5	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁を一部欠くが、ほぼ完形。底部は平底。口縁部はく字状に折れる。内外面ともハケ目。口縁部付近はハケ後、横。胎土は砂粒を多量に含む。	弥生後期
048	下層	弥生土器 壺	—	4.0	〔20.4〕	浅黄橙 7.5YR8/6	底部は平底。口縁部はやや急に立ち上がる。内外面ともハケ目が施され、内面底部付近はナデ。外面の一部に煤の付着あり。	弥生後期
049	下層	弥生土器 壺	14.8	—	15.1	浅黄橙 7.5YR8/4	完形の壺。内外面ともハケ目が施されるが、頸部内面に指頭圧痕が残り、口縁部は横ナデ。胎土は砂粒を含む。	弥生後期
050	下層	弥生土器 壺	—	—	〔8.8〕	明赤褐 2.5YR5/6	口縁部を除いて完形。底部は丸底。内外面とも全面赤色顔料を塗布。頸部と底部付近にハケ目が施され、頸部、胴部上半に磨きが施される。胎土は細かい砂粒を含む。	弥生後期
051	下層	弥生土器 壺	11.0	—	〔5.0〕	灰白 2.5Y8/2	袋状口縁壺の口縁部のみ残存。口縁部は外面に稜線が認められる。頸部は内外ともハケ目、口縁部は横ナデ。	弥生後期
052	下層	弥生土器 壺	10.6	4.8	22.1	にぶい橙 7.5YR6/4	ほぼ完形の長頸壺。外面はハケ目後、ヘラ磨きが施されるが、頸部、胴部に僅かにハケ目が残る。内面頸部はハケ目、口縁部付近は横ナデ。胎土は僅かに金雲母が含まれる。	弥生後期

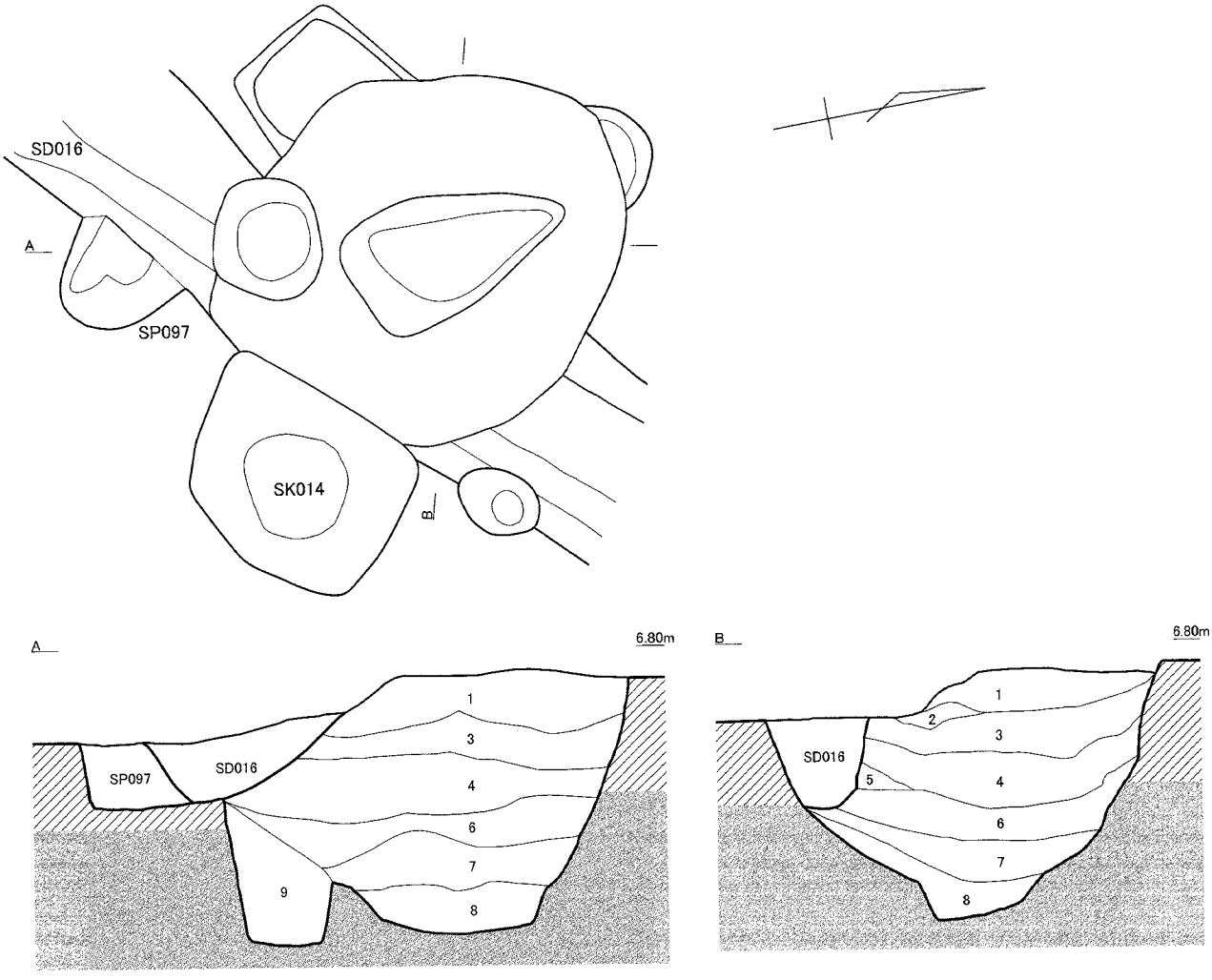
( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab9.　SE010 出土遺物観察表

SE011　井戸跡

南側をSK014、SD016に切られ、西側を攪乱に破壊されているが、残存形態からほぼ楕円形だったと推測される。確認された規模は長径約2.4m、短径約2.0mを測る。確認面からの深さは約1.5mを測る。八女粘土層には約0.6mの深さで達している。壁は全体的に緩やかだが、深さ約1.2m辺りで急に落ち込んでいる。

出土遺物は埋土全体から弥生土器、古式土師器、須恵器、石製品等が破片で多数出土している。周辺の井戸と異なり、布留系や庄内系と考えられる外来系の土器（053～062）が多数出土している。



1. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒を微量含む
2. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロックを多量に含む
3. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　小礫を多量に含む
4. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロックを少量含む
5. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒を微量、小礫を微量含む
6. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロックを多量に含む
7. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロックを多量、灰白色粘土を少量含む
8. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性強　灰白色粘土を含む
9. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性強

0　1m　(1/40)

Fig.26　SE011 遺構平断面図

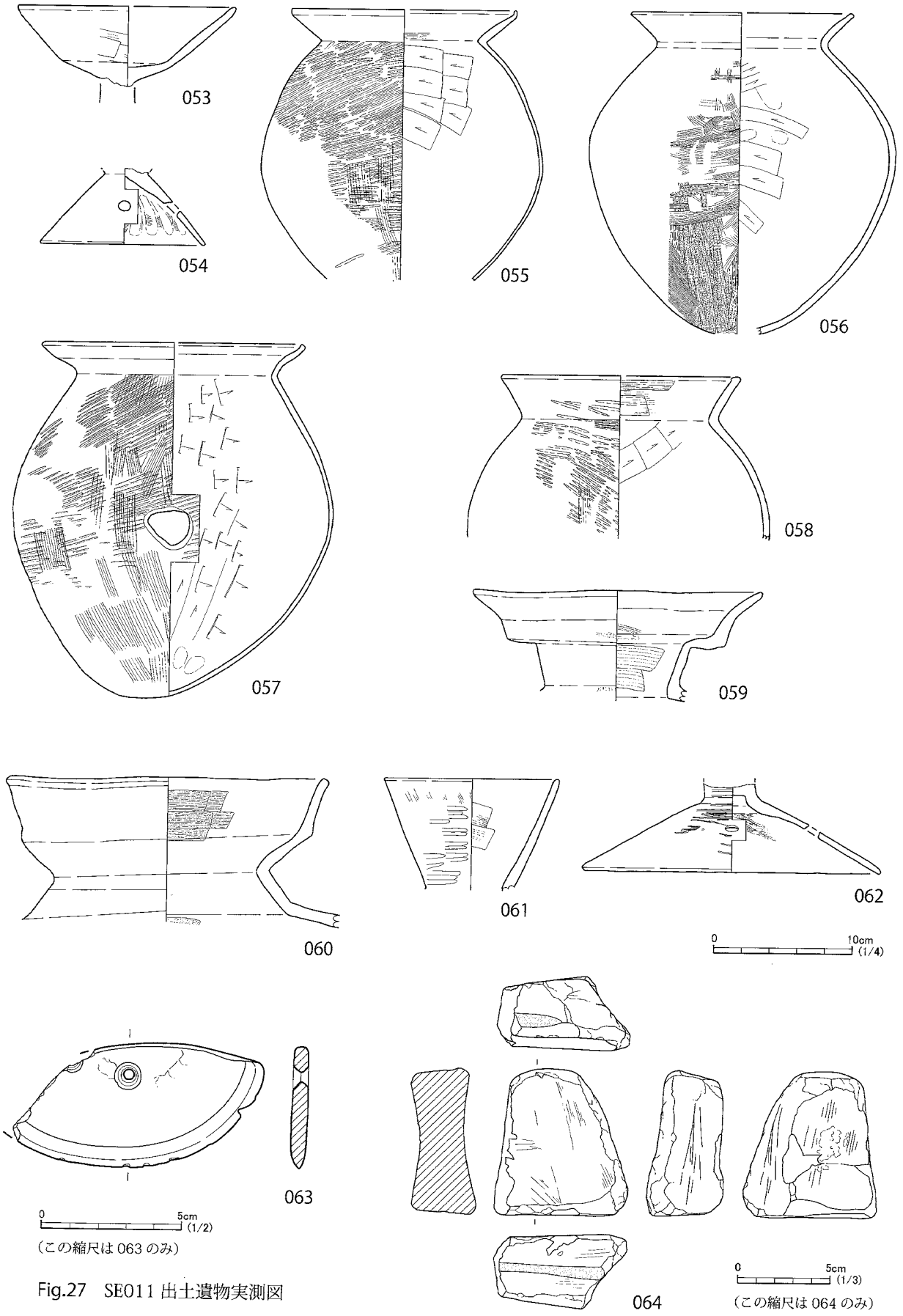


Fig.27　SE011 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特徴	時期
			口径	底径	器高			
053	上層	土師器 高坏	(15.5)	—	〔5.85〕	浅黄橙 7.5YR8/3	坏部のみ残存。ハケ目が確認できるが、摩滅が著しく、不明確。胎土は砂粒を含む。	古墳前期
054	下層	土師器 高坏	—	11.8	〔5.5〕	橙 5YR7/6	脚部のみ残存。透かし窓は1箇所確認できる。外面は横ナデ、内面はハケ目後ナデ。一部に赤色顔料が見られるが、摩滅のため、範囲は不明。	古墳前期
055	下層	土師器 甕	(16.3)	—	〔19.6〕	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部先端は小さく上につまみ上げられる。外面胴部上半は叩き、下半は叩き後ハケ目、内面はヘラ削りが施される。	古墳前期
056	下層	土師器 甕	(15.6)	—	23.3	にぶい黄橙 10YR7/3	外面はハケ目、口縁部は横ナデ。内面はヘラ削りで、部分的に指頭圧痕が残る。胎土には砂粒が多く、僅かに金雲母が含まれる。	古墳前期
057	下層	土師器 甕	(19.0)	—	25.8	にぶい黄橙 10YR7/2	丸底で、やや長胴で、胴部に穿孔がある。外面は叩き、胴部下半はハケ目、内面はヘラ削り、内面底部はナデ。外面の中央からやや下には煤の付着が見られる。	古墳前期
058	上層	土師器 甕	(17.0)	—	〔11.8〕	橙 5YR7/6	外面は叩きで、一部ハケ目が確認できる。内面はヘラ削りが施される。胎土は粗い砂粒を含む。	古墳前期
059	下層	土師器 壺	20.9	—	〔6.3〕	橙 7.5YR7/6	二重口縁壺の口縁部のみ残存。外面は摩滅が著しいが、ハケ目が施される。布留系と思われる。	古墳前期
060	上層	土師器 壺	23.2	—	〔10.5〕	浅黄橙 10YR8/4	口縁部のみ残存。外面はナデ、内面はハケ目が施される。胎土に砂粒を含む。	古墳前期
061	上層 下層	土師器 壺	12.6	—	〔8.1〕	浅黄橙 7.5YR8/6	直口壺の口縁から頸部。外面は横方向の磨きで口縁付近はハケ目が施される。内面はヘラ削りが施される。	古墳前期
062	下層	土師器 高坏	—	21.5	〔6.4〕	橙 5YR7/1	脚部のみ残存。穿孔は3箇所確認できる。外面は横方向のヘラ磨きだが、脚の端部付近はナデ。内面はハケ目が施される。	古墳前期
063	下層	石製品 石庖丁	長さ 〔9.0〕	幅 4.5	厚さ 0.6		小孔は本来2箇所あったと思われるが、欠損したために1箇所の状態で再利用していたものと考えられる。	
064	上層	石製品 砥石	8.0	〔7.2〕	4.0		断面を見ると中央部が磨り減ってくぼんでいる。最も小さい面とその対面には磨り減った浅い溝が見られる。	

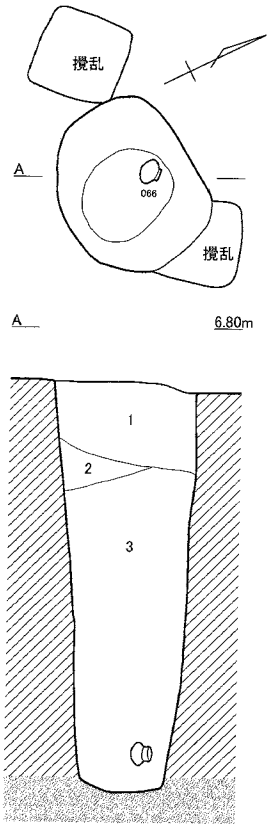
( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab10. SE011 出土遺物観察表

SE012 井戸跡

東側と西側を攪乱に破壊されているが、平面形態はほぼ楕円形を呈し、長径約0.9m、短径約0.7mを測る。確認面からの深さは約2.2mを測り、八女粘土層には約2.1mの深さで達している。壁は底部に向かうに従って先細りとなる。

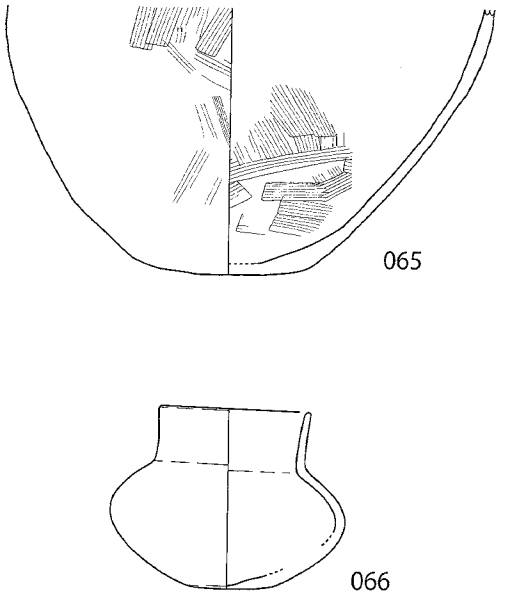
出土遺物の点数は少ないが、下層から弥生時代後期に属する完全な形をした小型の直口壺(066)が、出土している。



1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ローム粒微量、小礫微量、炭化物を微量含む
2. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック多量、小礫微量含む
3. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ローム粒微量、炭化物微量含む

0　1m (1/40)

Fig.28　SE012 遺構平断面図



0　10cm (1/4)

Fig.29　SE012 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
065	下層	弥生土器 甕	—	8.5	14.2	灰白 5Y7/1	胴部下半から底部にかけて残存。底部は丸みを帯びる。内外面共にハケ目が施される。胎土に砂粒を含む。	弥生後期
066	下層	弥生土器 壺	8.1	4.5	97.5	灰白 10Y8/1	ほぼ完形の直口の小型壺。胴部が張出し、小さな底部がある。内外ともナデ。胎土は砂粒を多量に含む。	弥生後期

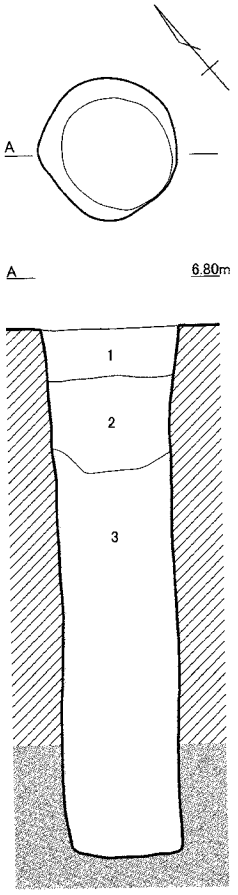
( ) 内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab11.　SE012 出土遺物観察表

SE013　井戸跡

平面形態は円形を呈し、直径約 0.7m を測る。確認面からの深さは約 2.8m を測り、八女粘土層には約 2.2m の深さで達している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

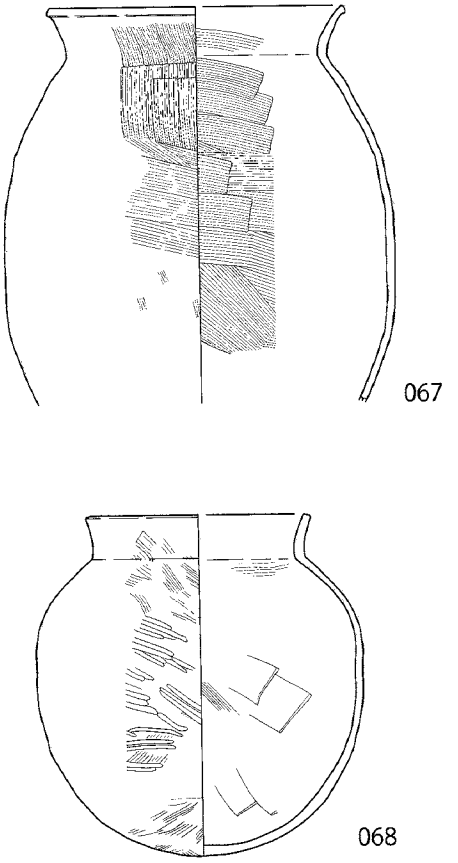
出土遺物は下層から弥生時代後期に属する甕（067）と壺（068）の破片が出土している。



1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性 弱　ローム粒微量、小礫微量含む
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒多量含む
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性 強　ローム粒微量含む

0　1m (1/40)

Fig.30　SE013 遺構平断面図



0　10cm (1/4)

Fig.31　SE013 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
067	下層	弥生土器 甕	(15.8)	—	〔21.1〕	にぶい橙 7.5YR 7/4	甕の胴部から口縁部にかけて残存。口縁部は外反する。外面胴部はハケ目が施され、口縁部付近は縦ハケ後、横ナデ。内面は胎土は砂粒を多量に含む。	弥生後期
068	下層	弥生土器 壺	(11.2)	—	18.1	にぶい赤褐 5YR5/4	丸底の壺、口縁は垂直に近いが、やや外反する。外面は胴部から底部にかけてハケ目が見られ、胴部は粗いヘラ磨きが施される。内面はヘラ削りで、口縁部下には僅かにハケ目がみられ、口縁部は横ナデ。	弥生後期

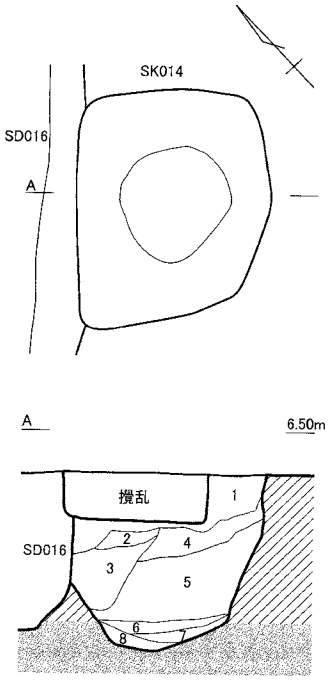
( ) 内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab12.　SE013 出土遺物観察表

SK014　土坑

確認面は攪乱に破壊され、北西側はSD016に破壊される。平面形態は方形を呈し、長辺約1.2m、短辺約1.0 mを測る。確認面からの深さは約0.9mを測り、八女粘土層には約0.8mの深さで達している。壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びている。

出土遺物は弥生土器の小破片が多数を占め、この他には石庖丁（069）が1点出土している。



1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック微量含む
2. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック多量に含む
3. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック多量、灰白色粘土を微量含む
4. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック多量、灰白色粘土を少量含む
5. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性強　ロームブロック微量、灰白色粘土を多量含む
6. 灰白色粘土　10YR8/2　しまり有り　粘性強　黒色土粒を微量含む
7. 黒褐色土　10YR3/2　しまり弱　粘性有り
8. 灰白色粘土　10YR8/2　しまり有り　粘性強

0　1m (1/40)

Fig.32　SK014 遺構平断面図

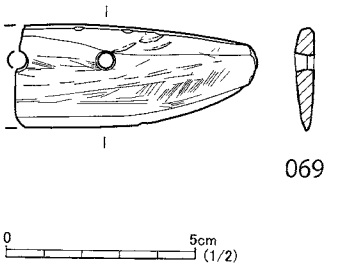


Fig.33　SK014 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	色調	特徴	時期
069	埋土一括	石製品 / 石庖丁	〔6.4〕	2.8	0.5		2/1程度残存する。小孔は2箇所確認できる。表面には削痕が残る。	

（ ）内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab13.　SK014 出土遺物観察表

SD015　溝跡

SD016に沿って、南西から北東方向へ延びる溝状の遺構で、北東端と南西端は調査区の外へ延びている。確認面からの深さは約0.4mを測り、底面は平坦で、全面的に八女粘土層に達している。底面には深さ約0.3mの方形の掘り込みが3箇所で検出された。

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器の破片が多数出土している。底部の掘り込みからの出土遺物は少数であるが、須恵器の坏身（071）が出土している。

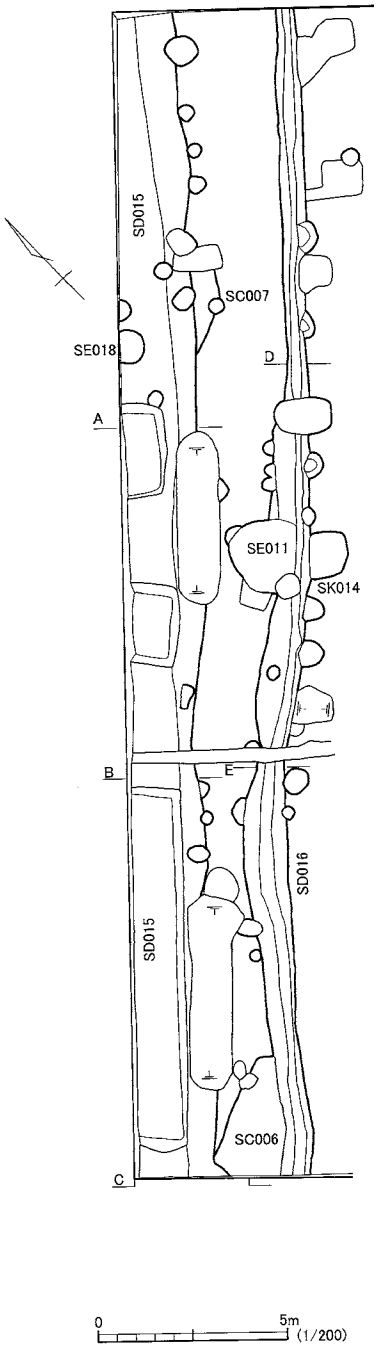
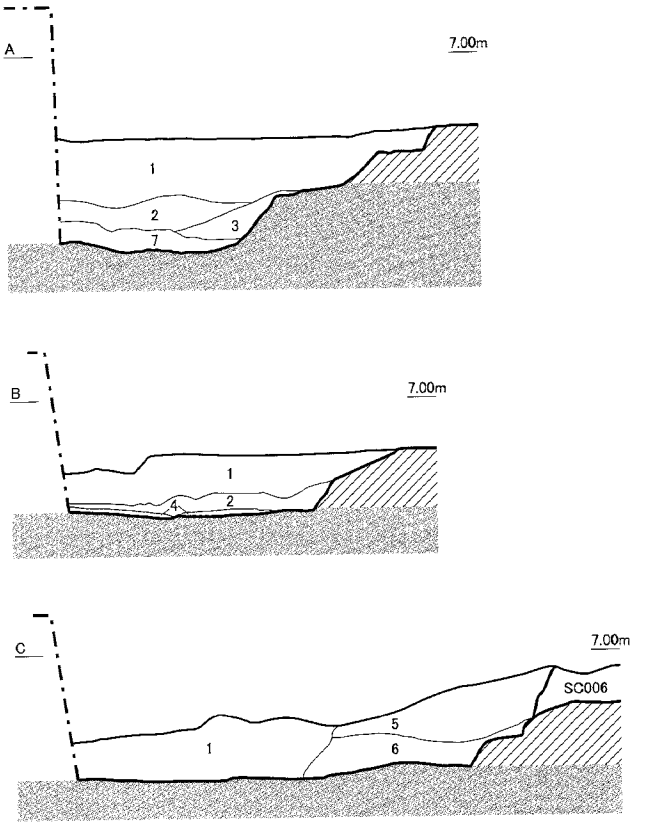
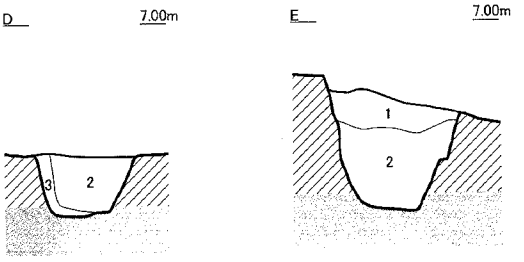


Fig.34　SD015・016遺構平断面図



1. 暗褐色土　10YR3/3　しまり有り　粘性有り　灰褐色粘質土を少量、小礫を微量含む
2. 暗褐色土　10YR3/3　しまり有り　粘性有り　灰褐色粘質土を少量含む
3. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ローム粒を多量、小礫を微量含む
4. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ローム粒を多量に含む
5. 暗褐色土　10YR3/3　しまり有り　粘性有り　ローム粒微量、灰褐色粘質土を少量含む
6. 暗褐色土　10YR3/3　しまり有り　粘性有り　ローム粒中量含む
7. 暗褐色土　10YR3/3　しまり有り　粘性有り　ローム粒、ブロックを多量に含む



1. 暗褐色土　7.5YR3/3　しまり有り　粘性有り　ローム粒微量含む
2. 暗褐色土　7.5YR3/3　しまり有り　粘性有り　ローム粒少量、ブロック少量含む。
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒少量含む

0　1m　(1/40)

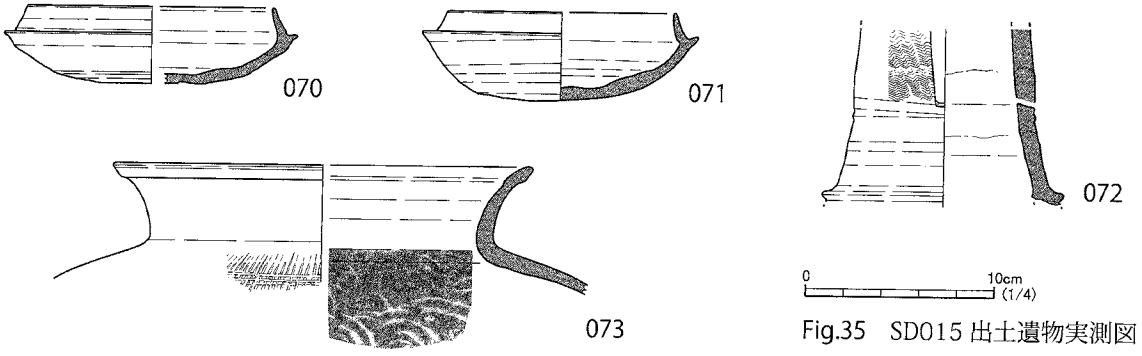


Fig.35　SD015 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
070	埋土 一括	須恵器 坏身	(12.9)	(10.4)	〔4.1〕	灰 N 4/0	回転ヘラ削りの坏。底部はやや丸みを帯びる。	古墳後期
071	下層 最下層	須恵器 坏身	(12.1)	8.7	4.75	灰 10Y5/1	回転ヘラ削り。底部はやや丸みを帯びる。口縁部はやや内傾し、先端が尖る。内面底部にはナデの痕がかすかに見える。胎土は精良だが、僅かに砂粒を含む。	古墳後期
072	下層	須恵器 高坏	—	—	〔9.5〕	灰 N 4/0	高坏の脚部のみ残存、透し窓の一部がが 2 箇所確認できる。下部は脚と脚の継ぎ目と思われ、刻み目がある。外面は波状紋が施され、その下部には輪積みの痕が残る。	古墳後期
073	上層	須恵器 甕	(22.2)	—	〔6.2〕	灰 10Y5/1	頸部、口縁部のみ残存。胴部は叩きが施され、内面のあて具は青海波紋である。	古墳後期

( ) 内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab14.　SD015 出土遺物観察表

SD016　溝跡

SD015 の南側に沿って検出された溝状の遺構である。SD015 と同様に両端は調査区の外へ延びている。幅は最大で約 1.2m、確認面からの深さは最深部で約 0.8m を測る。壁は急に立ち上がり、底面は八女粘土層に達している。

出土遺物は下層からは少数であるが、上層からは弥生土器、土師器、須恵器の破片が多数出土している。

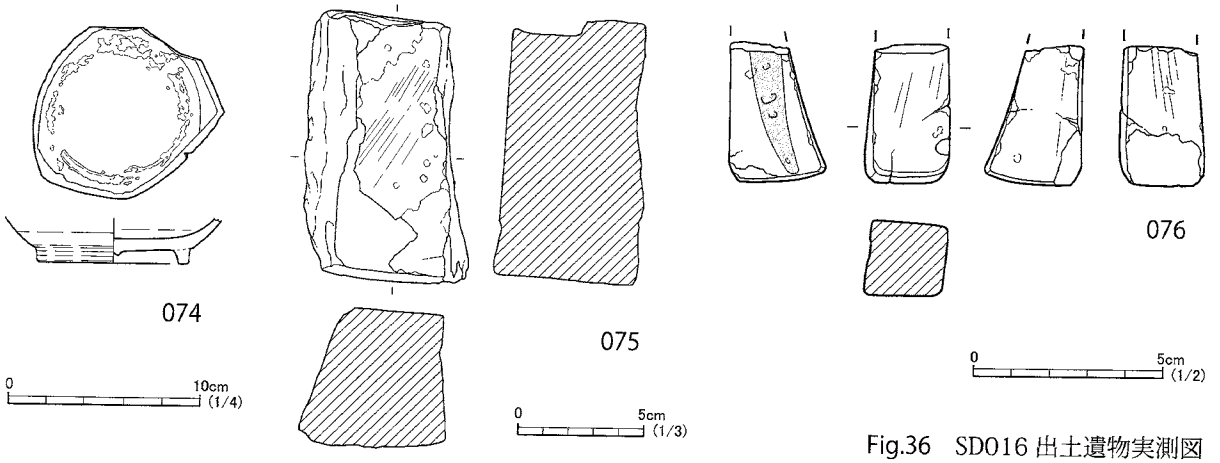


Fig.36　SD016 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
074	上層	磁器 碗	—	7.9	〔2.4〕	オリーブ灰 2.5GY6/1	竜泉系の青磁で碗の底部のみ残存。内面と高台端に重ね焼きした際の砂目の痕が残る。	中世
075	上層	石製品 砥石	長さ 10.9	幅 6.6	厚さ 5.9		堆積岩を使用した砥石。使用面は1面のみ確認される。	不明
076	上層	石製品 砥石	〔3.7〕	2.2	2.5		先端は欠損する。使用面は4面と思われる。	不明

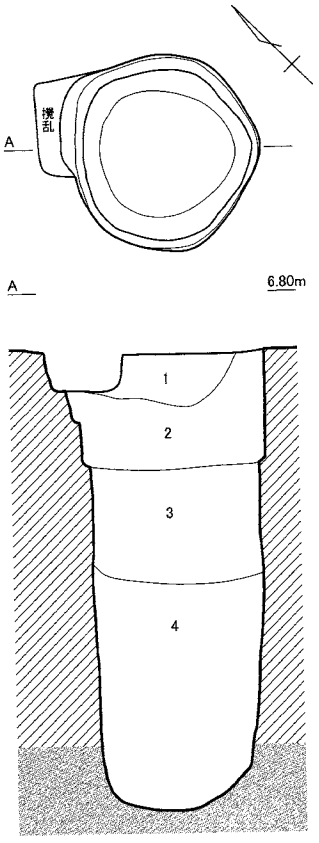
( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab15.　SD016 出土遺物観察表

SE017　井戸跡

確認面の一部が攪乱に破壊されているが、平面形態は円形を呈し、直径約 1.0m を測る。確認面からの深さは約 2.4m を測り、八女粘土層には約 2.1m の深さで達する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びている。確認面から約 0.6m の辺りで、幅約 6cm の小さな段が一周しており、何らかの施設が存在した可能性をうかがわせる。しかし木片や板材等は出土しておらず、また出土遺物も僅少であるため、これ以上は推測し難い。

出土遺物は下層から弥生土器と礫の破片が僅かに出土しているが、時期は確定し得ない。



1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック含む
2. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック多量含む
3. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ローム粒・ブロック少量含む
4. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り

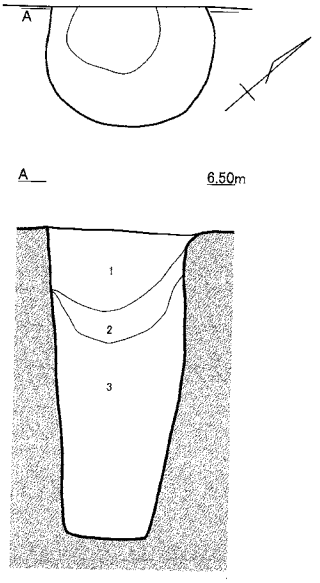
0　1m (1/40)

Fig.37　SE017 遺構平断面図

SE018　井戸跡

SD015 の掘削後に検出された。北西側は調査区外にあるが、確認された形状から、直径約 0.9m の円形を呈すると推測される。確認面からの深さは約 1.6m を測り、八女粘土層を掘り込んでいる。壁は底部に向かうに従って先細りとなる。

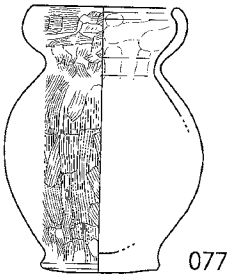
出土遺物は上層から弥生土器の破片が多数出土しているが、下層からは弥生時代後期に属する完全な形をした袋状口縁壺（077）が 1 点出土している。



1. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒・ブロック中量、小礫微量、炭化物微量含む
2. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　粘性有り　ローム粒微量含む
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒少量、粘土ブロック少量含む

0　1m (1/40)

Fig.38　SE018 遺構平断面図



0　10cm (1/4)

Fig.39　SE018 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
077	下層	弥生土器 壺	7.8	6.1	14.15	灰褐 7.5YR6/2	胴部が一部剥離するが、ほぼ完形の袋状口縁壺。外面はハケ目が施され、内面胴部は不明確。口縁部はナデ。	弥生後期

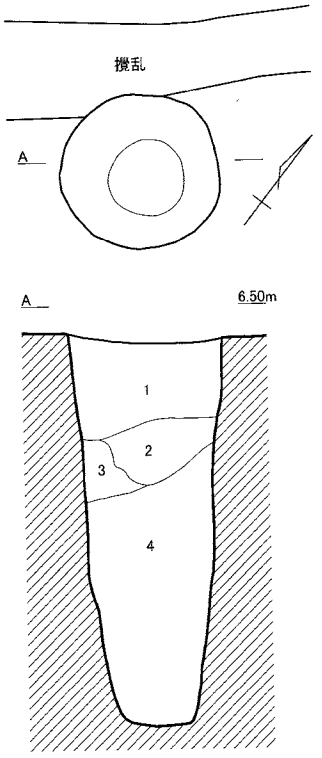
( ) 内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab16.　SE018 出土遺物観察表

SE019　井戸跡

西側を攪乱で僅かに破壊されているが、平面形態は直径は約 0.8m の円形を呈することは判別できる。確認面からの深さは約 2.0m を測り、八女粘土層には達していない。壁はほぼ垂直であるが、中程からは底部に向かうに従って先細りとなる。

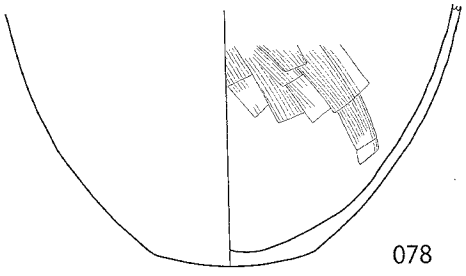
出土遺物は上層から弥生土器の破片が多数出土している。下層の遺物は少数であるが、底部付近からは弥生時代後期に属する完全な形をした複合口縁壺（080）が出土している。

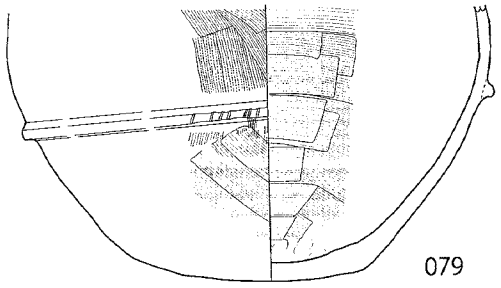


1. 黒褐色土　10 YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒少量、小礫微量含む
2. 黒褐色土　10 YR3/2　しまり有り　粘性有り　ロームブロック多量含む
3. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり有り　粘性有り　ロームブロック微量含む
4. 黒褐色土　7.5YR3/1　しまり有り　粘性有り　ローム粒微量含む

0　1m (1/40)

Fig.40　SE019 遺構平断面図





0　10cm (1/4)

Fig.41　SE019 出土遺物実測図 -1

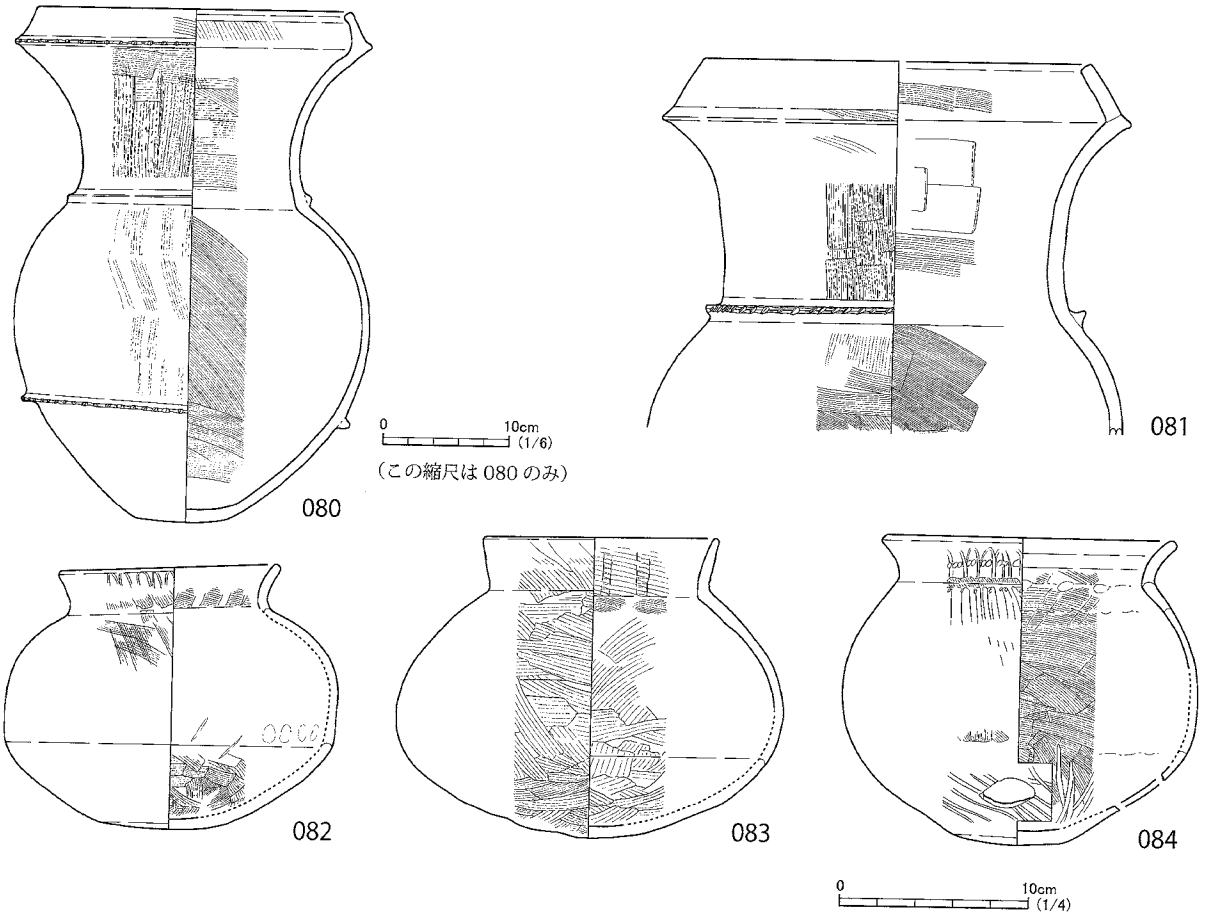


Fig.42　SE019 出土遺物実測図 -2

遺物番号	層位	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	色調	特　　徴	時期
078	下層	弥生土器 甕	—	8.6	〔13.6〕	にぶい黄橙 10YR6/3	胴部から底部まで残存。底部は平底だが、丸みを帯びる。外面はナデ、内面はハケ目。底部付近はナデ。	弥生後期
079	中層	弥生土器 壺	—	(9.8)	〔14.5〕	にぶい橙 5YR6/4	胴部から底部まで残存。突帯の跡が一条巡り、刻目のある突帯が部分的に残る。内外面共にハケ目が施され、内面底部には指頭圧痕が残る。	弥生後期
080	中層 下層	弥生土器 壺	24.8	7.5	41.0	灰黄褐 10YR6/2	ほぼ完形の複合口縁壺。底部は丸みを帯びる。胴部は刻目突帯、頸部の付け根は三角突帯が巡る。口縁部の稜には刻みが施される。内外面ともにハケ目。	弥生後期
081	上層	弥生土器 壺	20.4	—	〔19.7〕	にぶい橙 7.5YR6/4	複合口縁壺の口縁部から胴の上部まで残存。頸部の付け根に刻目突帯が巡る。内外面胴部はハケ目、内面頸部はヘラ削り。	弥生後期
082	下層	弥生土器 壺	11.6	6.5	14.2	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部は僅かに欠損する。外面はハケ目。口縁部はハケ目後、横ナデであるが、僅かに弧状の磨きが見られる。内面は底部がハケ目、胴部にはヘラの痕が残る。胎土は僅かに金雲母を含む。	弥生後期
083	下層	弥生土器 壺	12.4	—	16.0	灰白 5YR7/1	口縁部は僅かに欠損する。内外面ともハケ目。口縁部はハケ目後、横ナデ。胎土は僅かに金雲母を含む。	弥生後期
084	下層	弥生土器 壺	15.6	6.1	16.4	にぶい橙 7.5YR6/4	完形の壺。底部は丸みを帯びており、胴部下に焼成後の穿孔がある。外面胴部はハケ目後、磨きが施されるが、中央部は摩滅が著しい。口縁部はハケ目後弧状に磨きが施され、口縁部と付け根に点状の工具痕が残る。内面はハケ目。胎土は金雲母を含む。	弥生後期

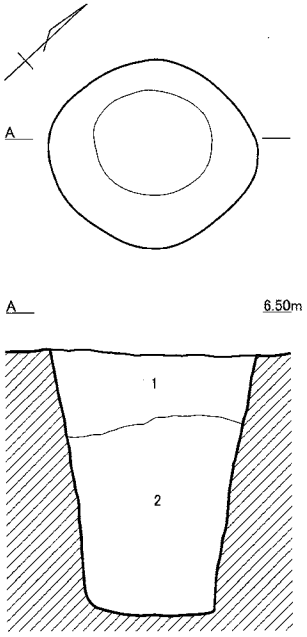
( ) 内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab17.　SE019 出土遺物観察表

SE020　井戸跡

平面形態は楕円形を呈し、長径約 1.1m、短径約 1.0m を測る。確認面からの深さは約 1.4m を測り、八女粘土層には達していない。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。周囲の井戸と比較すると浅い部類に属する。

出土遺物は上層から弥生土器の破片が多数出土している。下層の遺物は少数であるが、弥生時代後期に属する完全な形をした小型壺が（085）出土している。



1. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒微量、炭化物微量含む
2. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまり有り　粘性有り　ローム粒微量、小礫微量含む

0　1m (1/40)

Fig.43　SE020 遺構平断面図

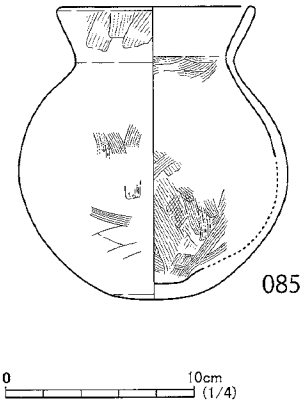


Fig.44　SE020 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
085	下層	弥生土器 壺	10.4	4.8	15.55	灰黄 2.5Y7/2	口縁部を僅かに欠損する。底部は丸みを帯びる。外面は口縁部、胴部がハケ目、頸部は横ナデ。内面は胴部がハケ目、口縁部、頸部は横ナデ。	弥生後期

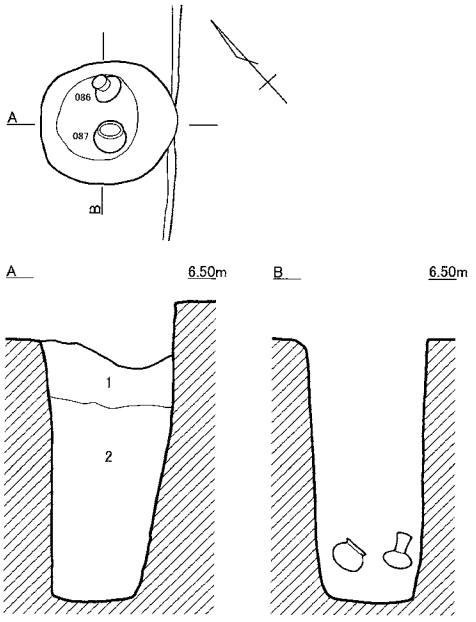
（ ）内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab18.　SE020 出土遺物観察表

SE021　井戸跡

確認面は攪乱で破壊されているが、平面形態は楕円形を呈することは判別できる。長径約 0.7m、短径約 0.6m を測る。確認面からの深さは約 1.3m を測り、八女粘土層には達していない。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。周囲の井戸と比較すると小さく、浅い部類に属する。

出土遺物の点数は少なく、上層からの遺物が多勢を占める。底部付近からは弥生時代後期に属する完全な形をした壺が 2 点出土している。そのうちの長頸壺には（086）、2 つの意匠製のある線刻が、張り出した胴部をめぐるように描かれている。



1. 黒褐色土　10YR3/1　しまり有り　　粘性有り　ローム粒微量、小礫微量、炭化物微量含む
2. 黒褐色土　10YR3/1　しまりやや弱い　粘性は 1 層より強い

0　1m (1/40)

Fig.45　SE021 遺構平断面図

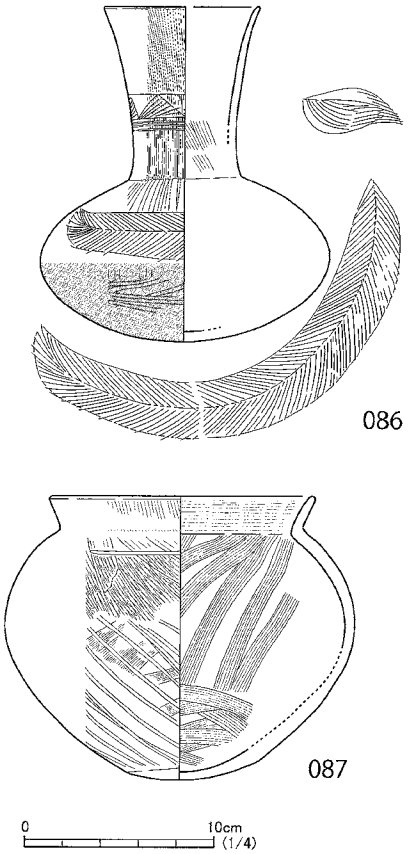


Fig.46　SE021 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
086	下層	弥生土器 壺	8.3	—	17.85	灰白 5Y8/1	口縁部を欠くがほぼ完形の長頸壺。底部は丸底。口縁部から胴上部までは縦方向の磨き、胴部下半部は黒色研磨が施される。内面頸部の下部はハケ目、上部は横ナデ。頸部は鋸歯紋が施され、胴部にも意匠性ある線刻が胴回り 2/3 に描かれる。胎土は僅かに金雲母を含む。	弥生後期
087	下層	弥生土器 壺	141.0	7.0	15.1	浅黄橙 7.5YR8/4	完形の壺。底部は丸みを帯びる。外面胴上部はハケ目、下部はハケ目後ナデ、さらに磨きが施される。内面はハケ目。口縁部は上部は縦ハケ、下部は横ナデ、付け根にはハケの痕が点状で残り、内面は横ハケ。赤色顔料が塗布されていたと思われるが、摩滅が著しいため、口縁部、胴部の一部でしか確認できない。胎土は僅かに金雲母を含む。	弥生後期

( ) 内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab19.　SE021 出土遺物観察表

SE022　井戸跡

平面形態は楕円形を呈し、長径約 1.0m、短径約 0. 8 m を測る。確認面からの深さは約 2.0m を測り、底部付近で八女粘土層に達している。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁は確認面付近が少し奥に広がる。

埋土にはしまりがなく、ブロック状のローム土を主体としており、下層からは現代のごみが混入していた。しかし周囲の井戸跡と比較しても、規模や形体が類似することから、以前に発掘された遺構と判断した。

遺物はこうした攪乱層から陶磁器と弥生土器片が 2 点出土しているだけである。

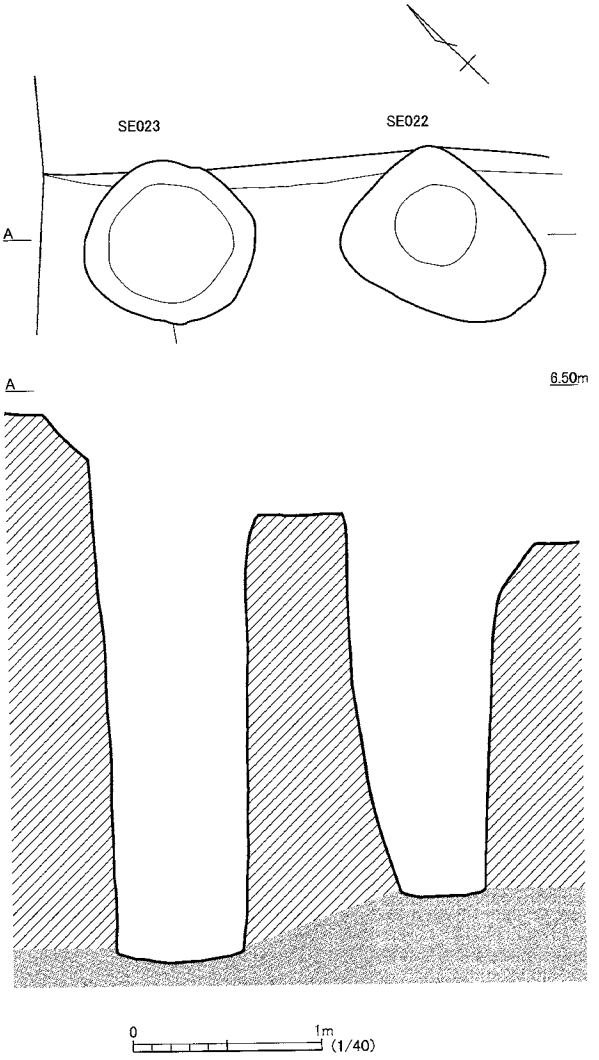


Fig.47　SE022・023 遺構平断面図

SE023 井戸跡

確認面は攪乱されているが、平面形態は円形を呈することは判別できる。直径は約 0.9m、確認面からの深さは約 2.7m を測り、底部付近で八女粘土層に達している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。SE022 と同様、規模や形体が周囲の井戸跡と類似することから、以前に何らかの理由で発掘された井戸と考えた。出土遺物はなく、時代は判然としない。

SE024　井戸跡

確認面は攪乱されているが、平面形態は楕円形を呈することは判別できる。長径約 1.1m、短径約 0.8m、確認面からの深さは約 2.2m を測り、八女粘土層には達していない。本遺構も先の２つの遺構と同様に、以前に発掘された井戸と考えられる。

出土遺物はなく、時代は判然としない。

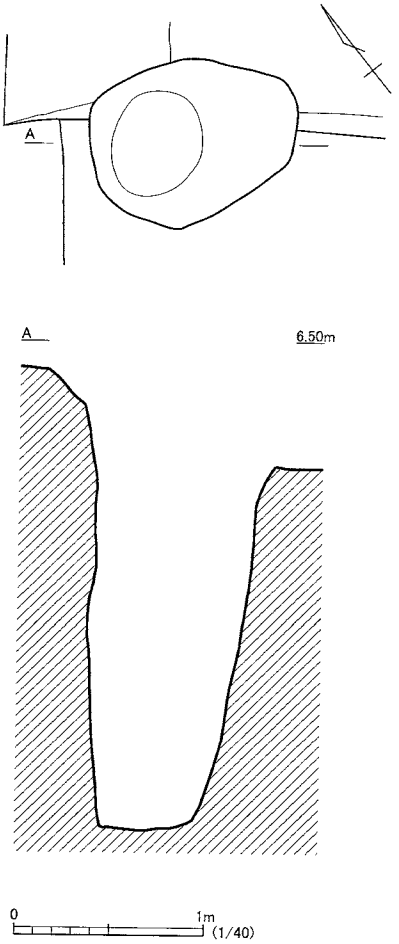
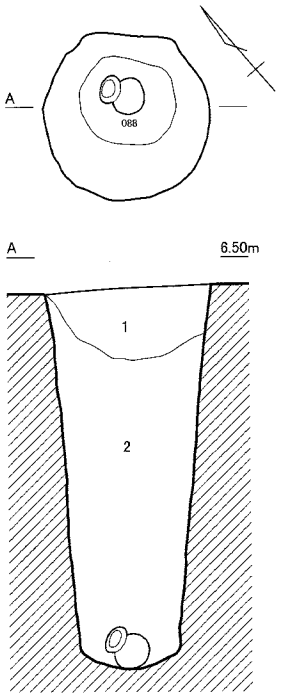


Fig.48　SE024 遺構平断面図

SE025　井戸跡

平面形態は円形を呈し、直径約 0.9m を測る。確認面からの深さは約 2.0m を測り、壁は底部に向かうに従って先細りとなる。八女粘土層には達していない。

出土遺物の点数は少なく、底部付近からは弥生時代後期に属する完形の袋状口縁壺（088）と石庖丁 (089) が出土している。



1. 黒褐色土　7.5YR2/3　しまり有り　粘性有り　ロームブロック多量、小礫少量、炭化物を微量含む
2. 黒褐色土　7.5YR2/3　しまり有り　粘性有り　ロームブロック中量、小礫少量含む

0　1m (1/40)

Fig.49　SE025 遺構平断面図

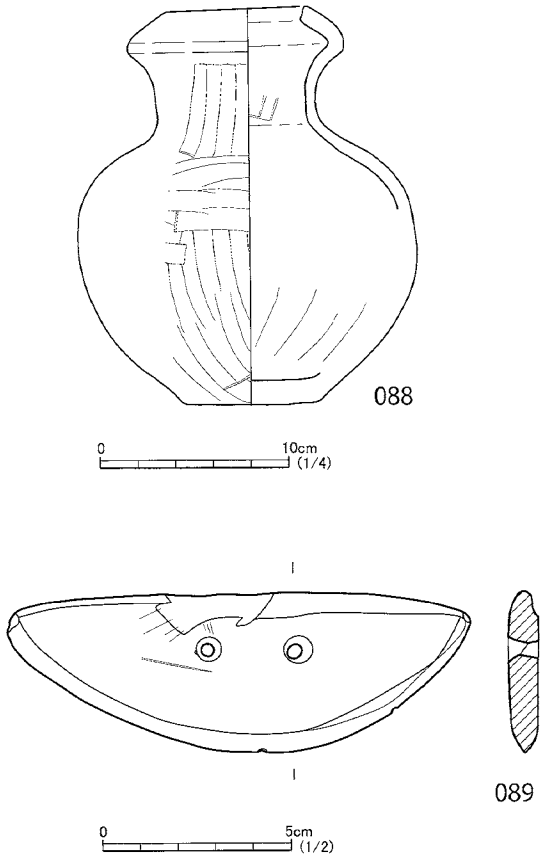


Fig.50　SE025 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
088	下層	弥生土器 壺	7.3	7.4	21.2	にぶい橙 7.5YR6/4	完形の袋状口縁壺。外面は頸部は縦のヘラ削り、肩部は横のヘラ削り、胴部は縦のヘラ削り。口縁部は横ナデ。内面は頸部がヘラ削り、底部から胴部はナデ。胎土は粗い砂粒を含む。	弥生後期
089	下層	石製品 石庖丁	長さ 13.3	幅 4.3	厚さ 0.8		半月形の石庖丁で、穿孔は2箇所。表面は削痕があり、刃は僅かに欠損する。	

( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab20.　SE025 出土遺物観察表

SD026　溝跡

南東方向から北西方向へ延びる溝である。両端とも攪乱により破壊されている。最大幅約 0.8m、確認面からの深さは最大約 0.2m を測る。東側は段があり、緩やかに立ち上がる。

出土遺物はなく、時代は判然としない。

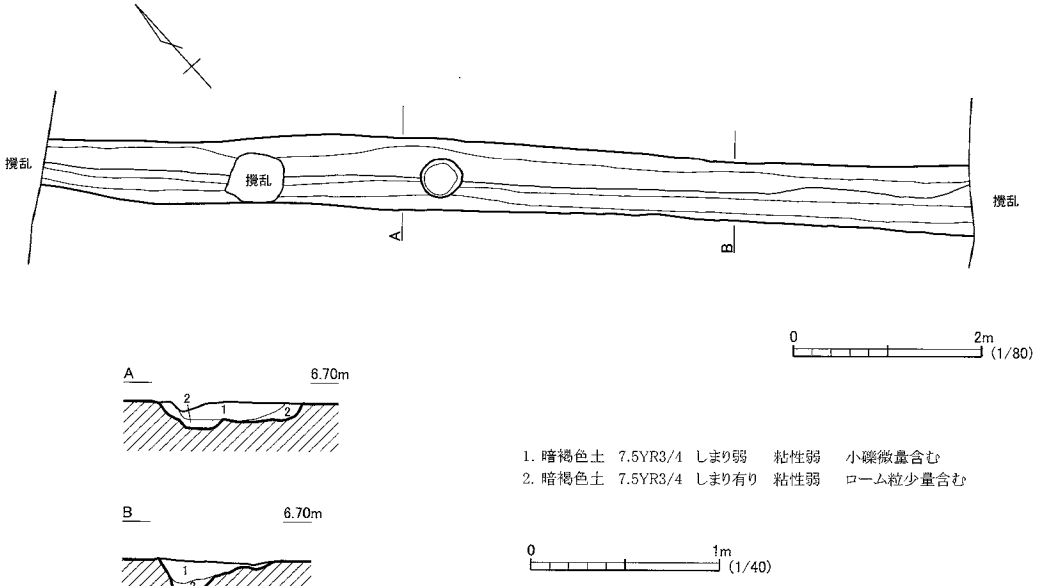


Fig.51 SD026 遺構平断面図

SE027 井戸跡

平面形体は円形を呈し、直径約 0.8m を測る。確認面からの深さは約 2.1m を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から約 1.6m の深さで八女粘土層に達している。

出土遺物は中層から下層にかけて、弥生時代中期から後期に属する土器が多数出土している。中層からは完形の器台や底部を欠いた大型の甕（094）が出土している。この甕は胴部から下半分が欠損しており、井戸に付設した機能が考えられる。下層からは木片や弥生時代中期から後期に属する完全な形をした壺（097・101・102）等が出土している。

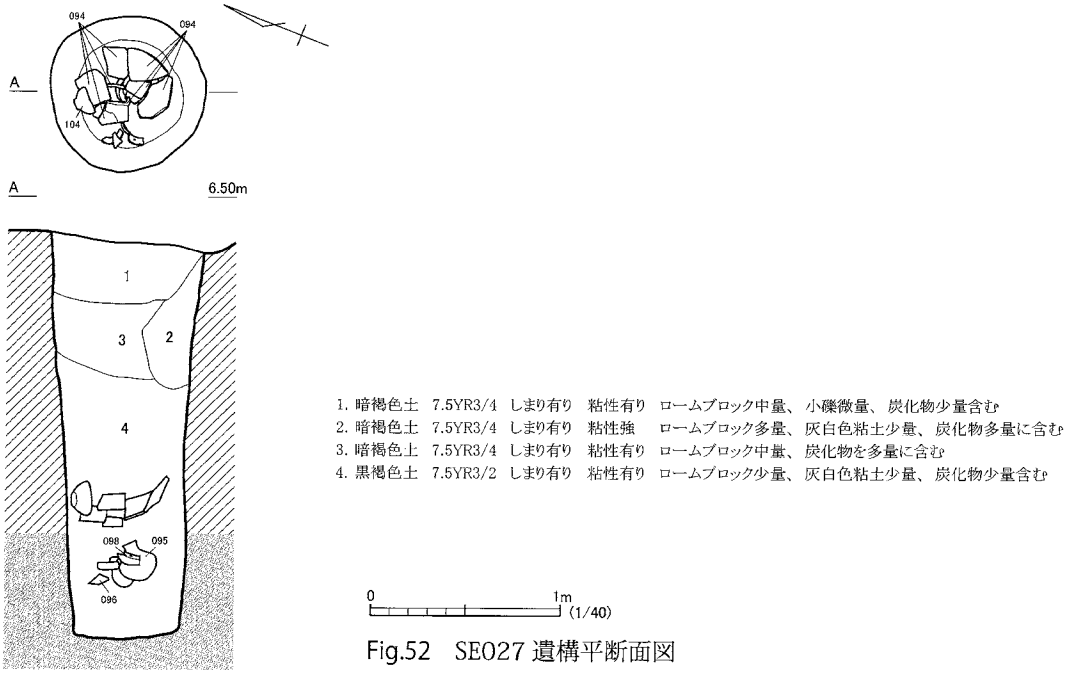
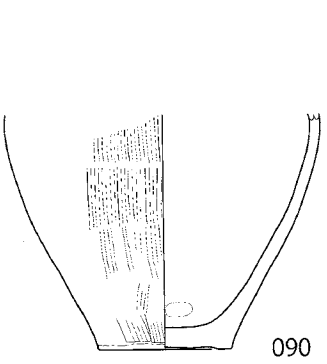
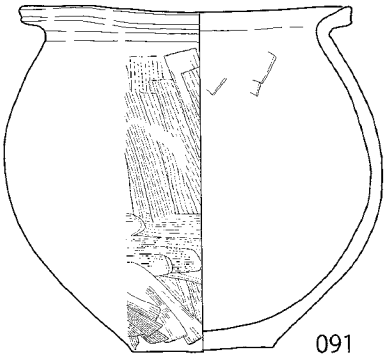
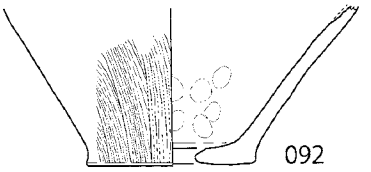
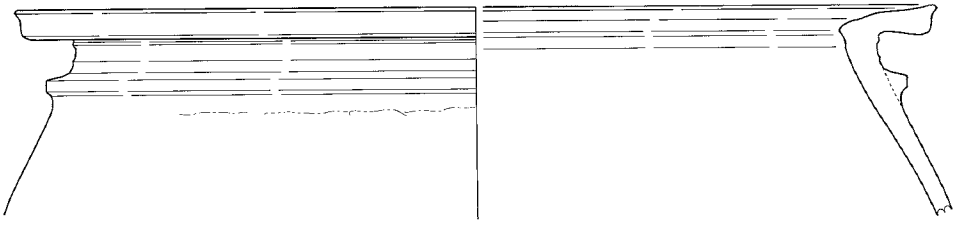


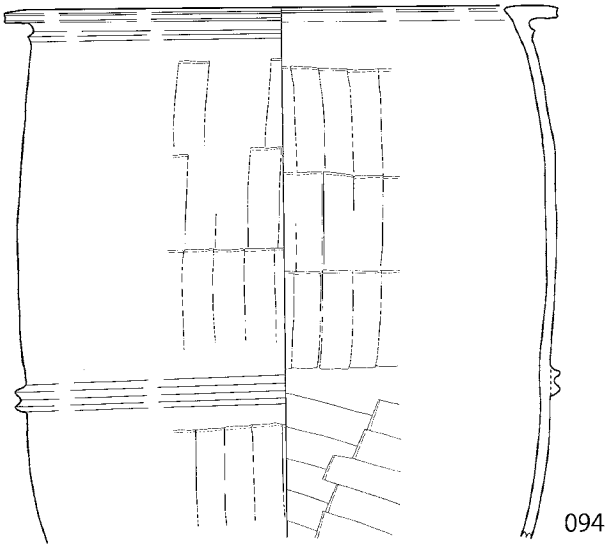
Fig.52 SE027 遺構平断面図

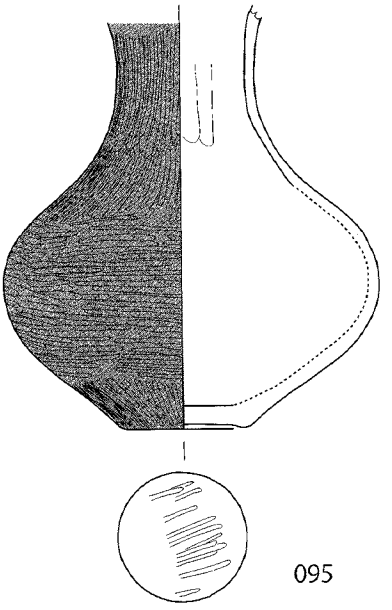






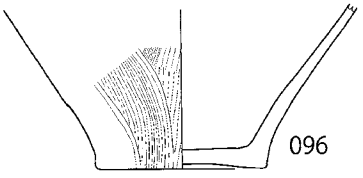




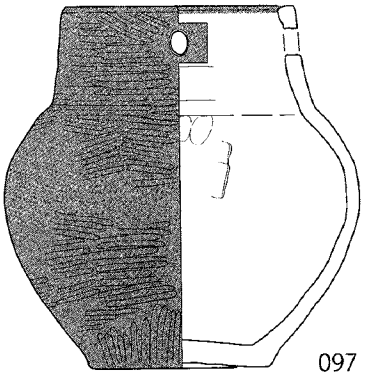


0 25cm (1/10)

（この縮尺は 094 のみ）



0 10cm (1/4)



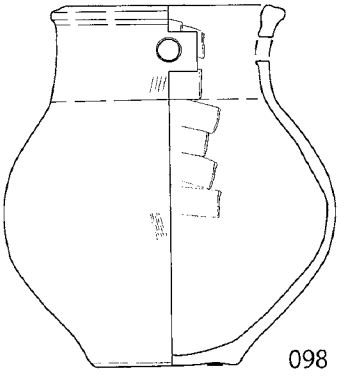


Fig.53　SE027 出土遺物実測図 -1

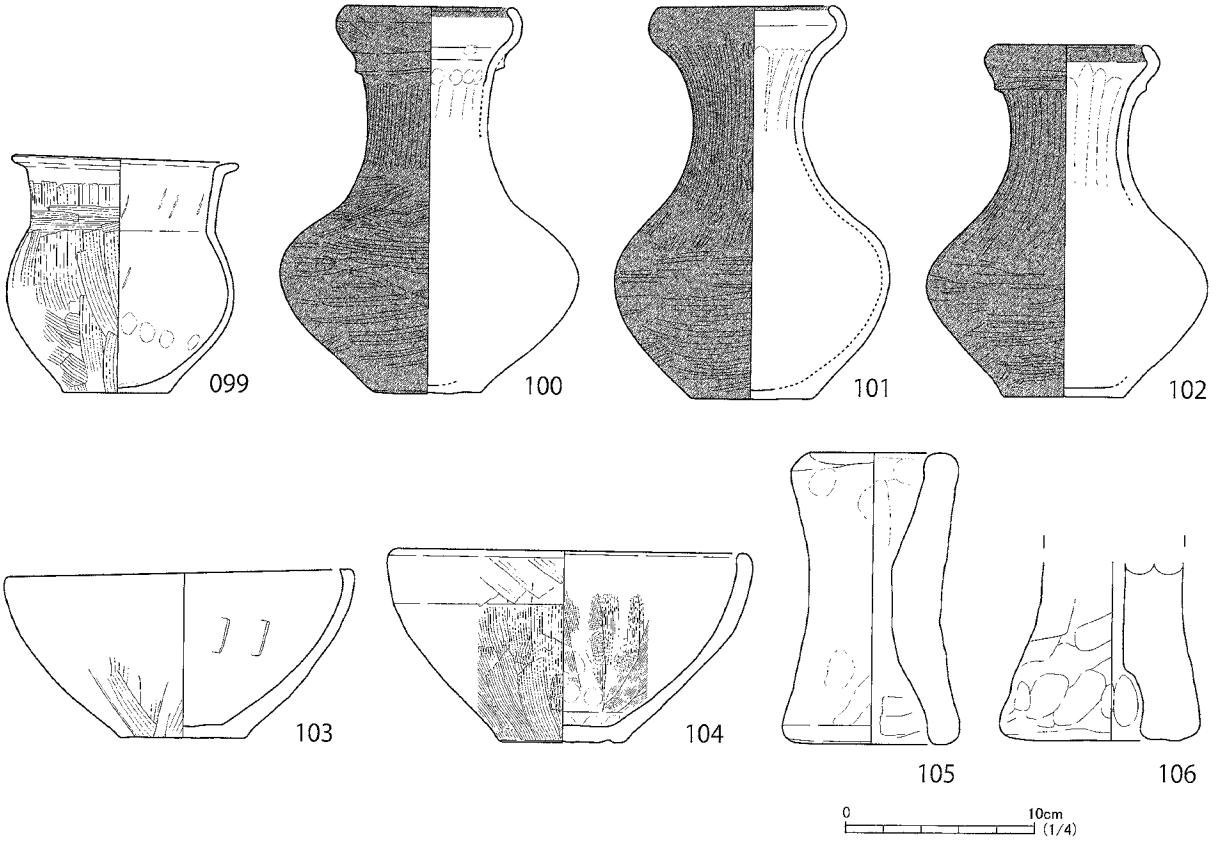


Fig.54　SE027 出土遺物実測図 -2

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
090	下層	弥生土器 甕	—	(7.1)	12.5	にぶい橙 7.5YR6/4	底部付近のみ残存。外面はハケ目、内面はナデ、底部に指頭圧痕が残る。胎土は砂粒が残る。	弥生後期
091	下層	弥生土器 甕	17.3	7.5	18.4	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部を少し欠損する。外面はハケ目、口縁部は横ナデ。内面は胴上部に僅かにヘラ削りが見られ、底部から胴部はナデ。	弥生後期
092	下層	弥生土器 甕	—	8.9	〔8.4〕	橙 5YR6/6	甕の底部。底は平底で、穿孔がある。外面は縦方向のハケ目、内面はナデが施され、底部付近に指頭圧痕が残る。	弥生後期
093	下層	弥生土器 甕	48.7	—	〔11.3〕	橙 5YR7/6	大型甕の口縁部付近のみ残存。口縁部の下に突帯が 1 条巡る。内外面ともナデ。胎土は細かい砂粒を含む。	弥生中期
094	中層 下層	弥生土器 甕	73.0	—	〔71.0〕	にぶい橙 7.5YR7/4	甕の口縁部から胴部まで残存。底部から胴部下半が全く無く、井戸枠としての利用が考えられる。口縁部下に三角突帯が 1 条、胴部に 2 条巡る。内外面ともヘラ削りで、口縁部は横ナデ。	弥生中期
095	下層	弥生土器 壺	—	6.8	〔21.7〕	橙 2.5YR6/8	赤色顔料を塗布した壺。口縁部を欠損する。顔料は底部を除く外面と、内面は頸部まで付着している。外面は全面的にヘラ磨き、底部も磨きが施される。内面はナデ。胎土は精良。	弥生中期
096	下層	弥生土器 甕	—	8.9	〔8.5〕	橙 7.5YR6/6	甕の底部。底部は平底で、僅かに上げ底になっている。外面はハケ目、内面はナデ。	不明

( ) 内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab21.　SE027 出土遺物観察表 -1

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
097	下層	弥生土器 壺	12.0	9.6	19.3	赤褐 5YR4/8	赤色顔料を塗布した直口壺。胴部を少し欠損する。口縁部に1対の焼成前の穿孔がある。外面は摩滅が著しいが、横方向のヘラ磨きが確認できる。口縁部は横ナデ、内面はヘラ削り。	弥生中期
098	下層	弥生土器 壺	12.4	7.4	19.2	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁部、胴部を少し欠損する直口壺。口縁部に1対の焼成前の穿孔がある。外面胴部はハケ目、口縁部は横ナデ、内面はヘラ削り。胎土は砂粒を含む。	弥生中期
099	下層	弥生土器 壺	11.9	5.5	12.6	にぶい橙 5YR6/4	口縁部、胴部を少し欠損する小型の壺。外面はハケ目、口縁部は横ナデ。内面はヘラ状工具の痕と、胴部下半部には指頭圧痕が残る。	弥生中期
100	下層	弥生土器 壺	8.3	5.8	20.6	明赤褐 2.5YR5/8	赤色顔料を塗布した完形の袋状口縁壺。口縁部下には突帯が1条巡る。顔料は内面にも僅かに付着する。外面胴部は横方向のヘラ磨き、頸部は縦方向のヘラ磨き。口縁部は横ナデ。内面は頸部はナデあげて、指頭圧痕が残る。胎土は精良。	弥生中期
101	下層	弥生土器 壺	9.2	6.4	20.9	赤褐 5YR4/8	赤色顔料を塗布した袋状口縁壺。胴部を僅かに欠損する。外面は胴部下半部は横方向のヘラ磨き、胴部上から頸部は縦方向のヘラ磨き。口縁部は横ナデ。内面頸部はナデ。胎土は精良。	弥生中期
102	下層	弥生土器 壺	7.8	6.4	18.7	赤褐 5YR4/8	ほぼ完形の袋状口縁壺。口縁直下に突帯が1条巡る。胴部下半は横方向の磨き、頸部から胴部上半は縦方向の磨きが施される。頸部内面はナデ、口縁部は横ナデで、指頭痕が残る。	弥生中期
103	中層	弥生土器 鉢	18.5	6.6	9.0	橙 5YR6/6	外面はハケ目、内面はヘラ削りが施される。内面の口縁部付近、底部はナデ。胎土は砂粒を多量に含む。	弥生中期
104	下層	弥生土器 鉢	19.2	6.6	10.3	橙 5YR6/6	口縁部を少し欠損する。内外面ともハケ目、口縁付近はハケ目後横ナデ。内面にはハケ目の上に指頭圧痕が残る。	弥生中期
105	中層	弥生土器 器台	6.7	7.1	15.5	にぶい黄褐 10YR7/3	完形の器台。内外面ともナデが、内面の一部にヘラのような工具によるナデの痕が見られる。外面の一部には赤色顔料の付着が見られるが、全面の塗布は確認できない。胎土は雲母を含む。	弥生中期
106	下層	弥生土器 器台	—	10.4	〔9.5〕	にぶい黄橙 10YR7/3	器台か支脚。外面はハケ目が施されたと思われるが、摩滅のため不明確。内面はナデ。	弥生中期

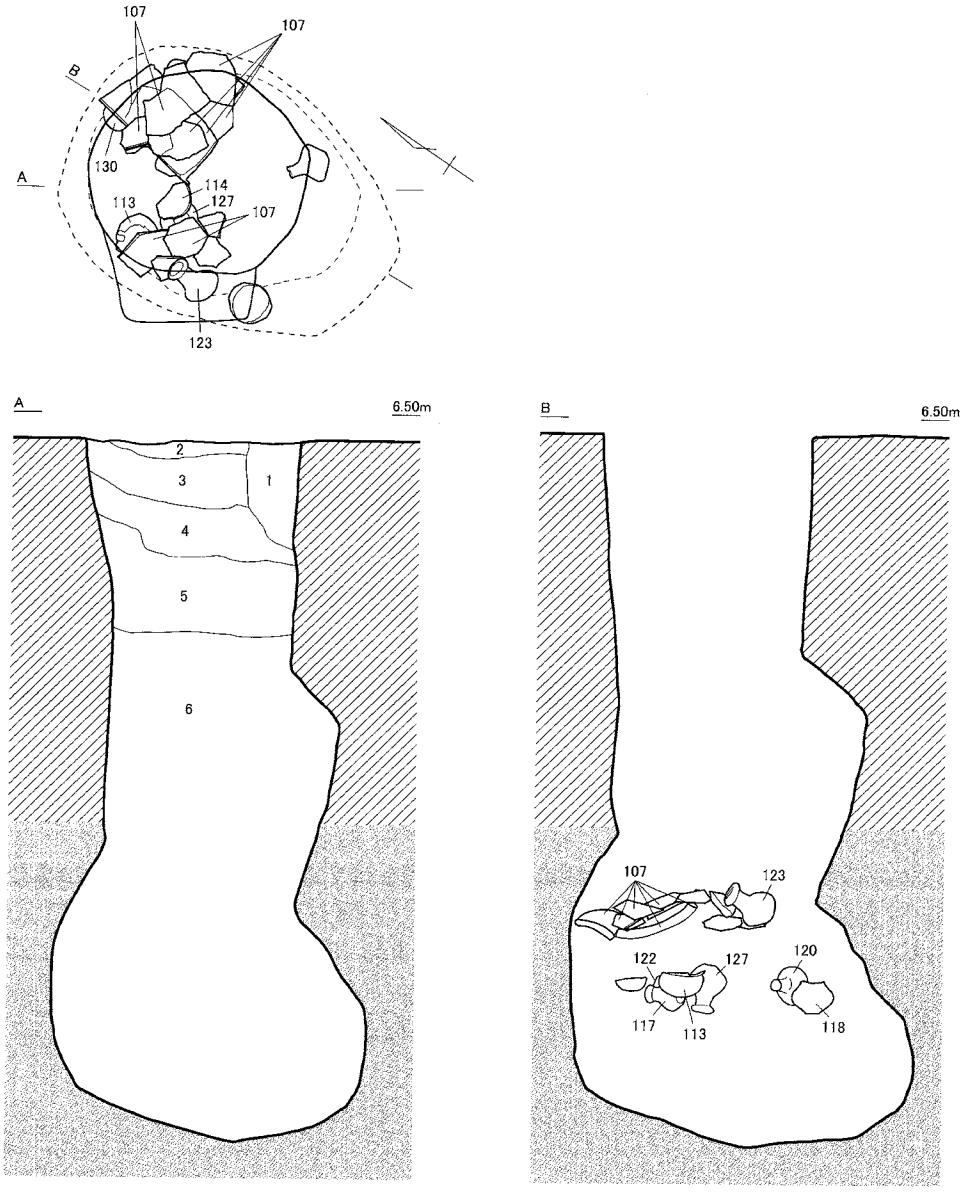
( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab22.　SE027 出土遺物観察表 -2

SE028　井戸跡

確認面は攪乱を受けているが、平面形態はほぼ円形を呈することは判別できる。直径は約 1.1m、確認面からの深さは約 3.8m を測り、八女粘土層には約 2.1m の深さで達している。壁はほぼ垂直に立ち上るが、下部が袋状に大きく膨らむ。

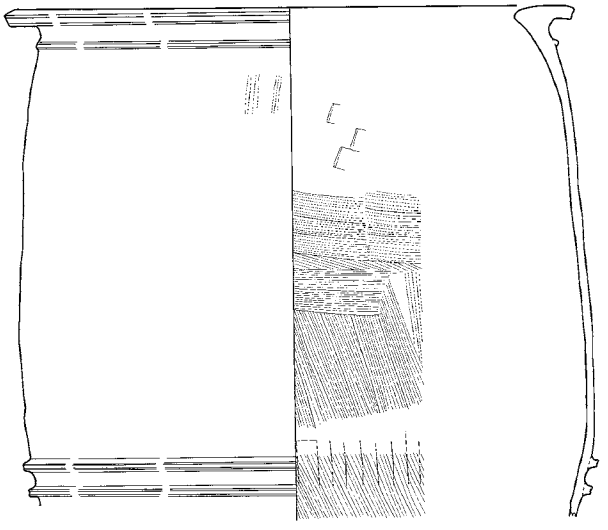
他の井戸と比較して出土遺物の点数は多い方と言える。上層では布留系の甕（112）をはじめ外来系と考えられるの土器片が認められる。中層から下層にかけては弥生時代中期から後期に属する完形の壺、甕等が集中して出土している。また、木製品（134 ～ 138）や板材、堅果類の種子も数個ほど出土している。大型の甕（107）の破片は、復元したところ胴部中央付近から下を欠損しており、SE027 出土の甕と同様に、井戸に付設した機能が考えられる。また、下層から出土する完全な形をした壺は、赤色顔料を施したもの（119 ～ 121・123・127）が多く認められた。



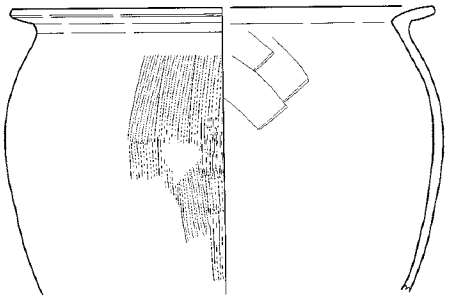
1. 暗褐色土　10YR3/3　しまり有り　粘性有り　　ロームブロック少量、粘土ブロック少量含む
2. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　　ロームブロック多量に含む
3. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　　ロームブロック微量、炭化物を微量含む
4. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　　ロームブロック少量に含む
5. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性やや強い
6. 黒褐色土　10YR3/2　しまり有り　粘性有り　　灰白色粘土を少量含む

0　1m (1/40)

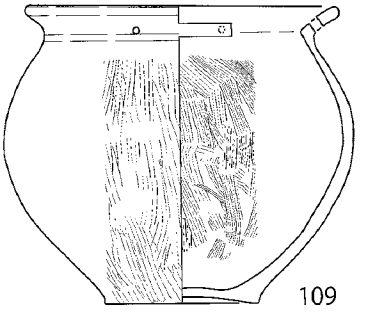
Fig.55　SE028 遺構平断面図



107



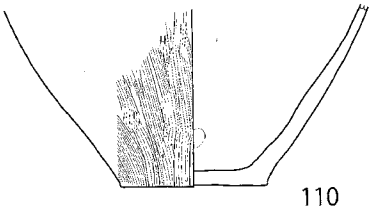
108



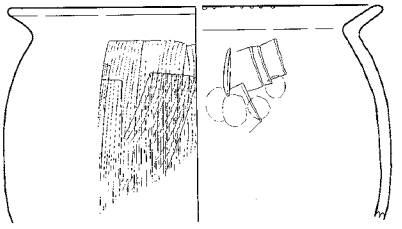
109

0 25cm (1/10)

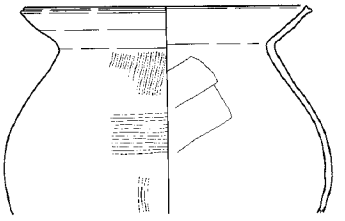
（この縮尺は 107 のみ）



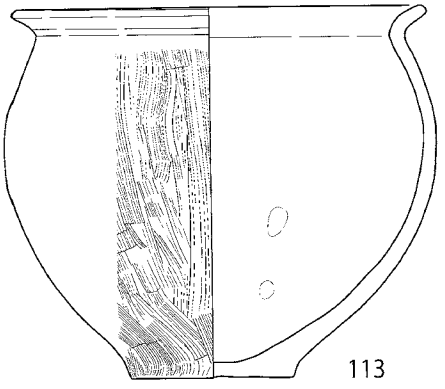
110



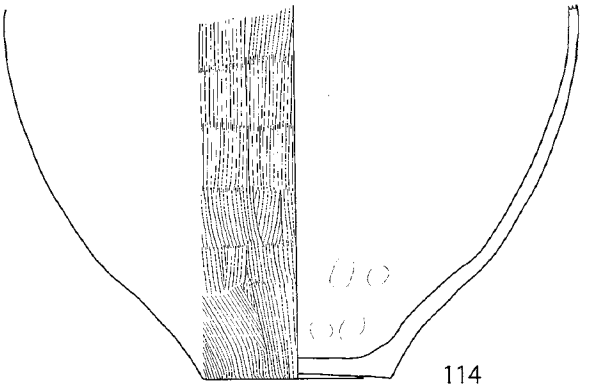
111



112



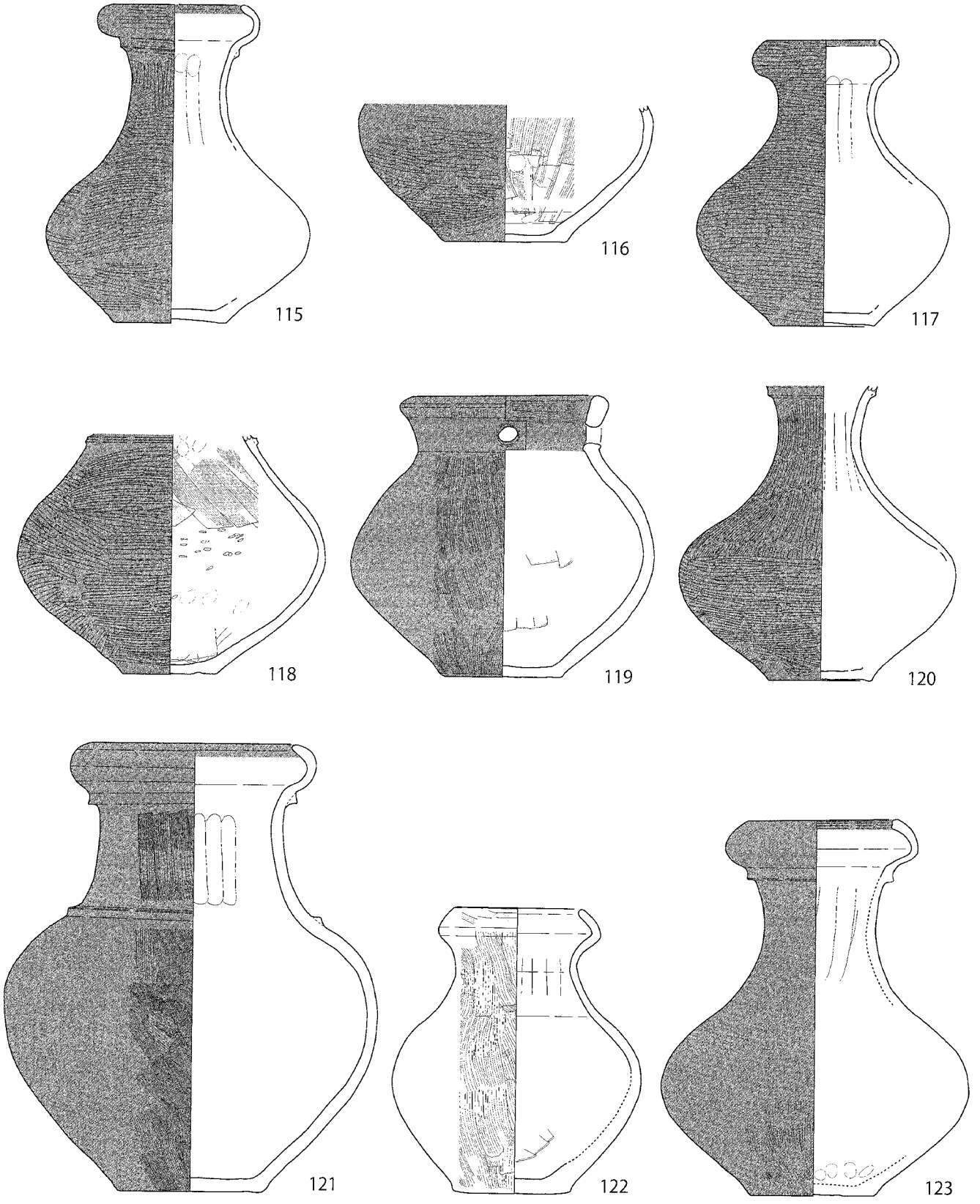
113



114

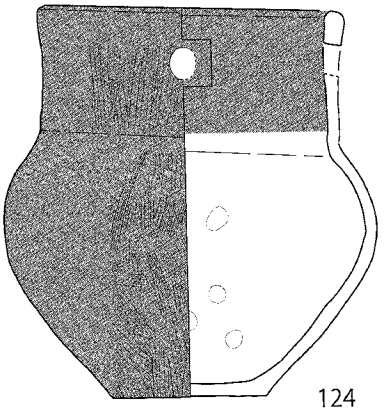
0 10cm (1/4)

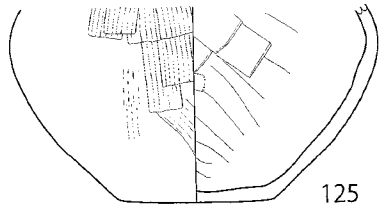
Fig.56　SE028 出土遺物実測図 -1

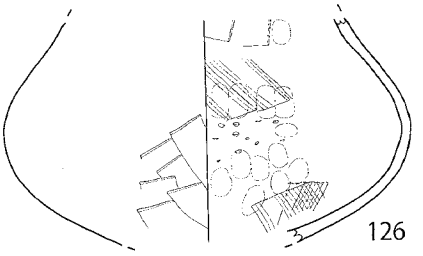


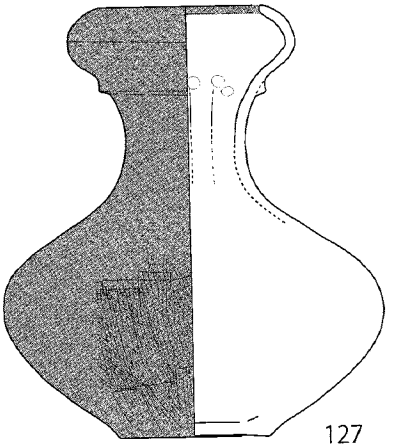
0 10cm (1/4)

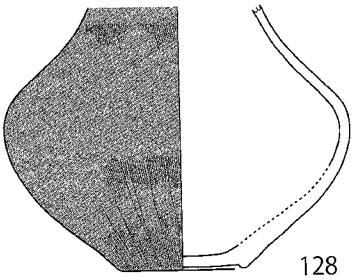
Fig.57　SE028 出土遺物実測図 -2

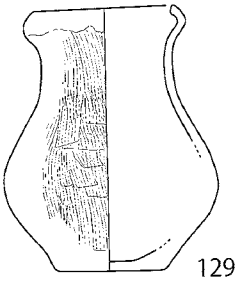


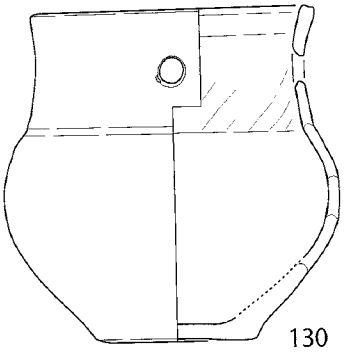


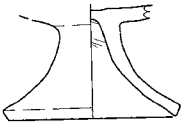


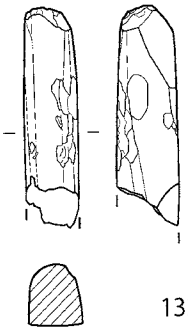






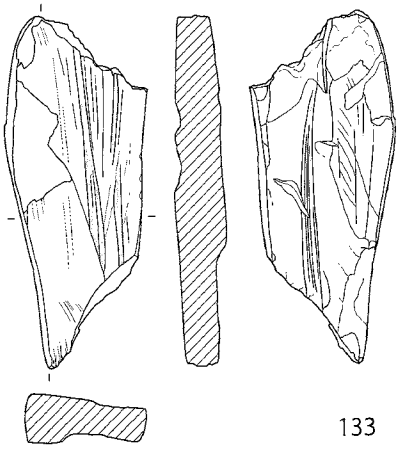






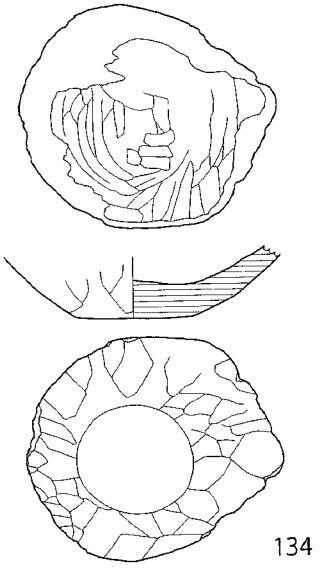
0 5cm (1/2)

（この縮尺は 132 のみ）



0 5cm (1/3)

（この縮尺は 133 のみ）



0 10cm (1/4)

Fig.58　SE028 出土遺物実測図 -3

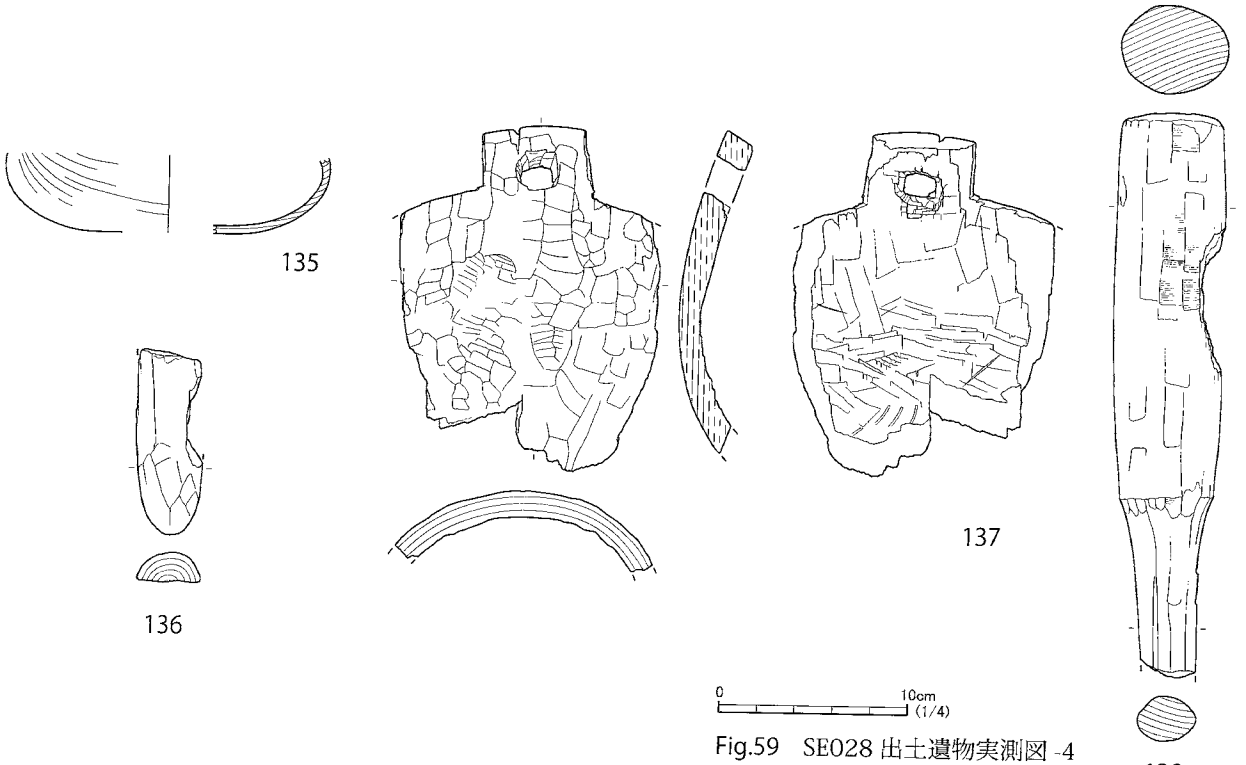


Fig.59　SE028 出土遺物実測図 -4

遺物番号	層位	器種	法量 (cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
107	中層 下層	弥生土器 甕	75.0	—	〔68.0〕	にぶい橙 7.5YR7/4	甕の口縁部から胴部まで残存。底部から胴部下半が全く無く、井戸の枠として利用が考えられる。外面は摩滅しているが、ハケ目が施され、内面はヘラ削り、とハケ目が施される。口縁部は横ナデ。口縁部下に突帯が１条巡り、胴部は２条巡る。	弥生中期
108	中層 下層	弥生土器 甕	(22.5)	—	〔15.2〕	にぶい黄橙 10YR7/3	底部は残存せず、口縁部も一部のみ残存する。口縁部は屈折し、くの字に近い。外面はハケ目、口縁部付近はハケ後ナデで口縁部は横ナデ。内面はヘラ削りで、胴部はナデ。	弥生後期
109	中層 下層	弥生土器 甕	16.2	8.3	15.9	灰黄褐 10YR6/2	底部は平底で、僅かに上げ底になっている。内外面ともハケ目で、口縁部は横ナデ。内面底部はナデ。口縁部が欠損しているが、２個１対の穿孔があったと推測される。	弥生後期
110	中層 下層	弥生土器 甕	—	7.8	9.4	にぶい黄橙 10YR6/3	甕の底部のみ残存。外面は縦方向のハケ目、内面はナデが施され、指頭圧痕が僅かに残る。	弥生後期
111	中層	弥生土器 甕	(19.6)	—	〔11.4〕	浅黄 2.5Y7/3	外面はハケ目、内面はヘラ削りが施され、縦方向の工具痕が残る。口縁部は横ナデが施され、先端付近に刻目が施される。	弥生後期
112	上層 中層 下層	古式土師器 甕	(15.4)	—	11.0	灰黄 2.5Y7/2	布留系の甕か。外面はハケ目、内面はヘラ削り、口縁部は横ナデが施されている。胎土は砂粒を多量に含む。	弥生後期
113	下層	弥生土器 壺	22.4	8.8	19.8	浅黄橙 7.5YR8/3	底部は平底、口縁部はくの字に折れ、外反する。外面はハケ目が施され、内面は底部付近はナデだが、上位はヘラ削り後、ナデ。口縁部は内外共に横ナデ。	弥生後期
114	中層	弥生土器 甕	—	10.0	〔19.8〕	橙 5YR6/6	甕の胴部から底部のみ残存。底部は平底。外面はハケ目、内面は底部付近に指頭圧痕が残る。胎土は砂粒を多量に含む。	弥生中期

( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab23.　SE028 出土遺物観察表 -1

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
115	中層 下層	弥生土器 壺	(9.1)	8.2	23.1	赤褐 5YR4/8	赤色顔料を塗布した袋状口縁壺。口縁直下に突帯が1条巡る。外面はヘラ磨きが施される。口縁部内面は横ナデ、頸部はナデ上げている。	弥生中期
116	中層	弥生土器 壺	—	9.0	〔19.5〕	にぶい赤褐 5YR5/4	赤色顔料を塗布した壺の胴部下半から底部まで。外面は横方向のヘラ磨き、内面は縦方向のハケ目が施され、底部付近は横ナデで、指頭圧痕が残る。胎土は僅かに金雲母が含まれる。	弥生中期
117	下層	弥生土器 壺	—	9.3	〔15.6〕	明赤褐 2.5YR5/8	赤色顔料を塗布した壺で、胴部下半から底部が残存。外面は横方向のヘラ磨きが施され、内面はナデで、指頭圧痕が僅かに残る。	弥生中期
118	下層	弥生土器 壺	—	6.7	〔17.4〕	橙 2.5YR6/8	外面ヘラ磨きの赤色顔料を塗布した壺。内面は底部付近はヘラ削りが施される。底部と胴部は指頭圧痕が残り、胴部最奥は爪痕がほぼ1周すると見られる。胎土はきめが細かく、僅かに金雲母が含まれる。	弥生中期
119	下層	弥生土器 壺	13.2	8.8	20.5	赤褐 5YR4/6	赤色顔料を塗布した直口壺。口縁部を僅かに欠損する。口縁部に焼成前の穿孔が1対ある。外面は縦方向のハケ目、口縁部は外面がナデ、内面は横方向のヘラ削り。内面胴部はヘラ削り。胎土には粗い砂粒を含む。	弥生中期
120	下層	弥生土器 壺	—	7.4	〔21.4〕	明赤褐 2.5YR5/8	赤色顔料を塗布した壺。口縁部を欠損する。頸部上部に突帯が巡る。外面は胴部下半部は横方向のヘラ磨き、胴部上半分から頸部は縦方向のヘラ磨き。内面頸部はナデ。胎土は精良。	弥生中期
121	中層	弥生土器 壺	14.8	10.3	32.5	にぶい黄橙 10YR6/3	完形の袋状口縁壺。赤色顔料は口縁部から胴部中央まで塗布され、なびいたような痕が残る。頸部の付け根と口縁部下に突帯が巡る。外面はヘラ削り、口縁部は横ナデ、内面はナデ。胎土は粗い砂粒を含む。	弥生中期
122	下層	弥生土器 壺	9.2	8.4	20.8	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部を少し欠損する袋状口縁壺。外面はハケ目、口縁部は横ナデ。内面は胴部下半部はヘラ削り、それより上部はナデ。胎土は精良。	弥生中期
123	中層	弥生土器 壺	10.6	9.0	27.3	橙 5YR6/8	赤色顔料を塗布した完形の袋状口縁壺。口縁部下には突帯が1条巡る。外面胴部下半部はハケ目、頸部から口縁部は横ナデ。内面はナデ、底部付近には指頭圧痕が残る。胎土は金雲母を僅かに含む。	弥生中期
124	中層 下層	弥生土器 壺	14.9	8.3	20.9	明赤褐 2.5YR5/8	赤色顔料を塗布した直口壺。焼成前の穿孔1対あったと思われるが、胴部から口縁部にかけて欠損するため、1箇所しか確認できない。外面はハケ目、口縁部は横ナデ。内面はナデ、指頭圧痕が僅かに残る。胎土は砂粒を含む。	弥生中期
125	中層	弥生土器 壺	—	8.2	〔10.4〕	灰黄 2.5YR6/2	底部から胴部途中まで残存。外面は縦方向のハケ目でやや摩滅している。内面は底部付近はナデ上げており、胴部はヘラ削りが施される。	弥生中期
126	中層	弥生土器 壺	—	—	〔11.8〕	にぶい黄褐 10YR5/3	壺の胴部のみ残存。外面はヘラ削り、内面はヘラ削りとナデ、底部付近はハケ目が施される。内面胴部の張り出した部分にはナデ時のものと思われる爪の痕が残る。	弥生中期
127	下層	弥生土器 壺	8.5	7.9	22.9	にぶい橙 7.5YR6/4	赤色顔料を塗布した完形の袋状口縁壺。口縁部下には突帯が1条巡る。顔料は内面にも僅かに付着する。外面は胴部下半部がハケ目、胴上部から口縁部はナデ。内面は頸部はナデ上げており、指頭圧痕が残る。	弥生中期
128	下層	弥生土器 壺	—	6.8	〔14.0〕	明赤褐 2.5YR5/6	赤色顔料を塗布した壺。底部から胴部のみ残存。底部は上げ底になっている。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ。胎土は金雲母を含む。	弥生中期
129	下層	弥生土器 壺	7.4	5.7	14.1	にぶい橙 7.5YR7/3	小型の袋状口縁壺。口縁部を僅かに欠損する。外面はハケ目、口縁部は横ナデ。内面は頸部が縦ナデ、口縁部が横ナデ。胎土は精良。	弥生中期
130	下層	弥生土器 壺	15.0	8.5	17.8	にぶい黄橙 10YR7/2	完形の直口壺。口縁部に1対の焼成前の穿孔がある。外面は全面的にナデ。内面も全面的にナデであるが、一部にヘラの痕が残る。胎土は金雲母を含む。	弥生中期

( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab24.　SE028 出土遺物観察表 -2

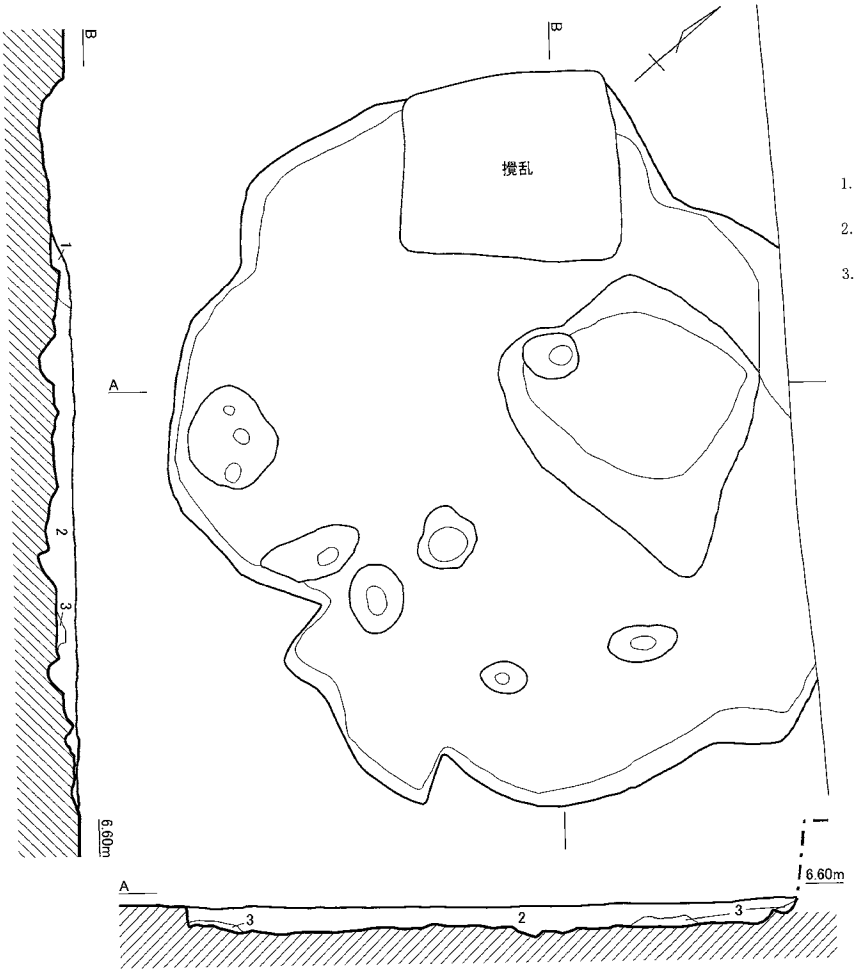
遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
131	中層	弥生土器 高坏	—	8.8	〔6.1〕	灰白 5YR7/1	高坏の脚部のみ残存。外面は摩滅が著しいため、調整痕は不明。脚の内面に巻き上げの痕が残る。	弥生時代
132	中層	石製品 柱状片刃石斧	長さ 〔5.8〕	幅 1.4	厚さ 1.65		刃部側を欠損しているが小形方柱状片刃石斧である。表面に細かな削痕が残る。	弥生時代
133	中層	石製品 砥石	〔14.1〕	5.7	2.1		両端部は欠損する。使用面は2面。細かい削痕と溝状の使用痕が残る。	弥生時代
134	中層	木製品 杯	口径 —	底径 6.2	器高 〔3.7〕		底部のみ残存し、平底。内外面とも削り痕が残る。	弥生時代
135	下層	木製品 容器	—	—	—		刳り抜きの椀。大部分が欠損している。厚みは5mm弱で薄く、脆い。内面に僅かに赤色顔料の付着が確認される。	弥生時代
136	中層	木製品 不明	長さ 〔9.9〕	径 3.5			棒状の木製品の先端部のみ残存。断面は半円形を呈す。先端は丸みを持って尖る。	弥生時代
137	下層	木製品 容器	—	—	1.7		刳り抜きの把手付きの容器で、底部、胴部は欠損する。把手には方形の孔を穿つ。内外面に細かい加工痕が残る。	弥生時代
138	下層	木製品 杵	長さ 〔30.0〕	最大径 5.7			端部はやや丸みを帯びる。断面はやや扁平を呈する。握り部は細く切り出している。	弥生時代

( )内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab25.　SE028 出土遺物観察表 -3

SX029　不明遺構

平面形態は不整形で、最も幅のある箇所で約 6.0m を測る。底面は凹凸が著しく、確認面からの深さは 0.1 m前後を測る。埋土には炭化物や粘土等を僅かに含み、底面には被熱作用を受けた箇所が認められる。遺物は全く出土せず、遺構の性格や時代とも不明である。



1. 褐色土　7.5YR4/4　しまり有り　粘性有り
　　ロームブロックを含む
2. 褐色土　7.5YR4/4　しまり有り　粘性有り
　　粘土少量、炭化物微量含む
3. 褐色土　7.5YR4/4　しまり有り　粘性有り
　　ロームブロックを多量に含む

0　1m (1/60)

Fig.60　SX029 遺構平断面図

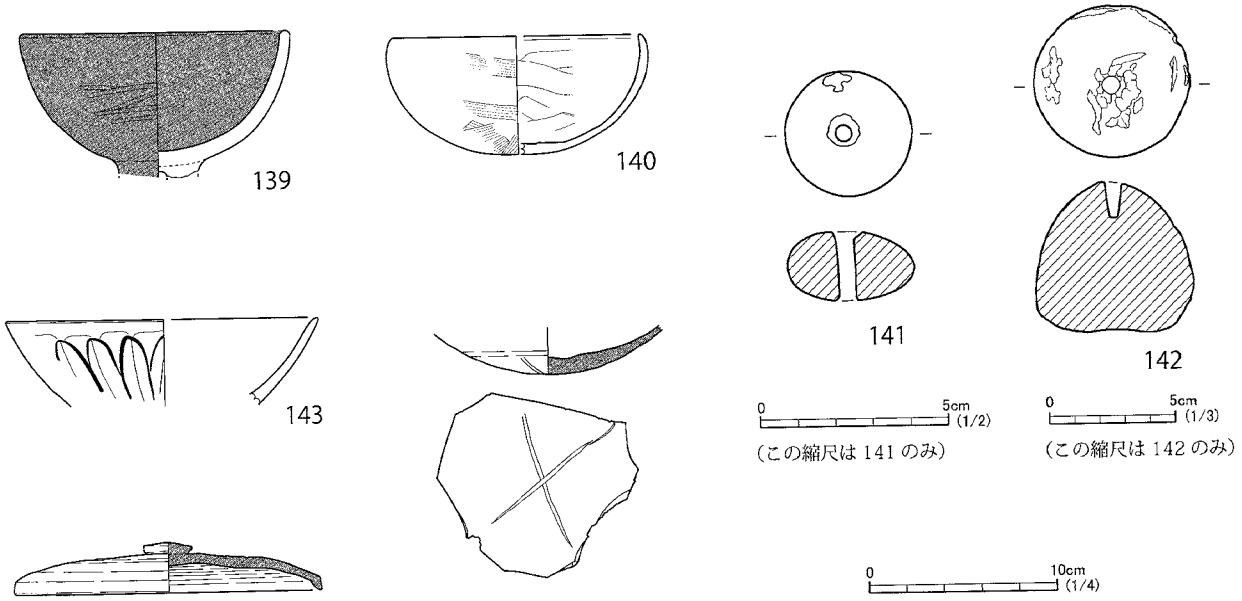


Fig.61　SX029 出土遺物実測図

遺物番号	層位	器種	法量(cm)			色調	特　　徴	時期
			口径	底径	器高			
139	下層	弥生土器 高坏	14.2	—	〔7.7〕	赤褐 2.5YR4/6	高坏の坏部のみ残存。全面に赤色顔料が施される。外面は摩滅しているが、僅かに磨きが確認できる。胎土は砂粒を含む。	弥生中期
140	下層	土師器 鉢	13.0	—	〔6.0〕	橙 7.5YR 6/6	鉢か碗。底部は外面は丸底で、内面には稜があり、平底となる。口縁部はやや内湾している。外面はハケ目、外面はヘラ削りが施される。胎土は僅かに砂粒を含む。	古墳時代
141	表土	土製品 土錘	縦 3.3	横 3.4	厚さ 1.8	褐灰 5YR 6/1	やや扁平を呈す。径 5mm 程度の孔がある。胎土には砂粒を多量含む。	弥生時代 ～ 古墳時代
142	表土	石製品 石錘	縦 6.0	横 6.25	6.0		表面は部分的に欠損している。底部はほぼ平坦。 頭頂部の孔は 14mm 程度の深さで、貫通はしていない。	弥生時代
143	上層	青磁 碗	(16.4)	—	〔4.6〕		竜泉窯系の青磁。口縁から体部にかけての一部が残存。外面は蓮弁紋。SD015 溝跡の上層出土であったが、遺構検出時のため、整地層（表土）から混入した可能性がある。	中世
144	撹乱	須恵器 蓋	16.1	—	2.8	灰白 N 7/0	ほぼ完形の蓋。天井部は回転ヘラ削りが施される。	奈良
145	撹乱	須恵器 壺	—	—	2.5	灰 10Y5/1	丸底の壺の底部のみ残存。回転ヘラ削りが施される。外面底部には「×」の字状に刻みがある。胎土は精良で、僅かに砂粒が混じる。	不明

( ) 内の数値は推定の法量、〔 〕内の数値は残存部の法量を表す

Tab26.　SX029 出土遺物観察表

Ⅳ．まとめ

1．第 82 次調査の成果

比恵遺跡群の調査は、今回で第 82 次を数えることからも、これまで頻繁に発掘調査が繰り返されたことが物語られている。それは市街地ということで開発にさらされる頻度の多さや、内包する遺跡が旧石器時代から中世にかけてと、幅があり広範囲に及ぶのもさることながら、遺構及び遺物の密度もかなり高い内容にあることがあげられる。その中でも弥生時代が主体となるのは、あえて言うに及ばず、当然に第 82 次発掘調査でも、この弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけての遺構が主体となっている。

そこで確認された主な遺構数を列記してみると、井戸跡がとびぬけて多く 22 基であるのに対し、竪穴式住居跡は僅か 2 軒である。こうした数量の構成から、一見するとかなり不自然な印象を受けることは否めない。しかし、今回の調査箇所を含む周辺部を見回すと、後世の大規模開発において、平坦化されていることに気づかされる。すると掘り込みの浅い、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などのような遺構は、既に消滅してしまったと推測される。それ故に余りにも多いと感じた井戸跡は、単純に深いという理由から残存し易かったと判断できる。そうするとどうであろう、比恵遺跡には大規模な集落が形成されていた景観が見えてきそうである。

その井戸跡であるが、ほとんどの遺構の底からは、完全な形をした甕や壷が多数出土する。それも弥生時代中期の出土量が最も多く、器面を鮮やかに丹塗りし、さらには磨きを施す手の込んだものも少なくない。こうした状況の背景には、井戸を潰す際の祭祀行為を読み取ることができる。これは何も今回の調査だけに限った事ではないが、以前の事例も含めると、比恵遺跡では普遍的に行われていた行為と捉える事ができる。

後期以降になると一つの井戸跡から出土する、完全な形をした土器の量は減少する傾向にある。その中にあって SE021 から出土した長頸壷のように、その張り出した胴部には簡素だが洗練された線刻画が描かれるものもある。いったい何をモチーフにしたかは、見る側の夫々に受け取りようもあるだろうが、その意匠性に弥生人の感性を微かに触れた思いがする。そして弥生の優美な土器に代わり、庄内系や布留系と思われる搬入系土器の姿が目立つようになる。

ところで SE003・SE027・SE028 からは、大型の甕が出土しているが、胴部のみ、あるいは胴部下半分が全く認められない点に注目しておきたい。出土した時の状況は、井戸跡の下層から破片が折り重なるようにして確認された。こうした状況から、当初は投棄されたものと考えていたが、接合してみると下半分が打ち欠いて無いのである。これも祭祀的な意図の可能性を推測してみたが、例えば井戸の枠など機能的な要素も同時に考えられる。とすれば、どの辺りに据えられていたのかが問題となってくる。それは地上であれば井桁的なものであり、壁面では井側となり、底においては水溜の機能と場所によって機能性は全く異なるからに他ならない。

さて、出土時の位置関係を改めて検討してみると、いずれもが底面から少し浮いた位置にある。つまりは、底に据えられたものではないことはこれで判断できる。次に土器と井戸の直径を比較すると、井戸の掘り込みの方がどうしても大きい。要するに板材などで桟木を渡さない限り、直接は据えることは不可能と言える。では、井戸の途中ではどうであろうか。甕の破片が集中して確認されるのは、八女粘土層が井戸壁面となるの深さである。この上面には鳥栖ローム層がのっているが、遺構はこの

面を掘り込み確認される。鳥栖ローム層は硬くしまり堆積しているのに対し、八女粘土層は緩く脆い。実際に今回の発掘途中でも、滲みだす湧水も手伝い、八女粘土層はさらに脆弱化しては崩落を繰り返した。今回確認した他の多くの井戸跡も同様に、おおよそこの部分が大きく抉れているのをよく見かけた。こうした形状は構築時の原型ではなく、自然に崩落した結果において形成されたものと捉えられ、著しいものは袋状にまで及ぶ。そうすると、この最も脆弱な箇所には、井壁を保持させる工夫が必要とされ、円筒にした大型の甕が用いられたと推測する。その出土状況も、井壁の土圧に耐えかねてか、内側に折り重なるような状態であった。

2．比恵遺跡群の意義

比恵遺跡群の周囲をざっと見渡すだけでも、東には浅い谷地形を境に那珂遺跡群が連続し、前方後円墳である那珂八幡古墳と東光寺剣塚古墳も内包する。さらに南側に眼をやれば、主なものでも板付遺跡・諸岡遺跡群・井尻遺跡群等々、また御笠川を挟んだ対岸側には雀居遺跡をはじめ枚挙がない。少し春日丘陵まで足を延ばせば、奴国の中心地であり、その権力者を埋葬したと考えられる須玖岡本遺跡や、これを取り巻く多くの遺跡群が所狭しと点在し、まさに福岡平野においても弥生から古墳時代にかけて遺跡銀座の観を呈する。

ところで比恵遺跡群の変遷は、まず弥生時代前期に台地の北側と西側に集落が出現することにはじまる。そして中期になると集落は、台地全体に広がる様相をみせ、中央部には甕棺墓が構築される。さらに後期に入ると青銅器生産に用いる土製取瓶が第40次調査で、さらに第48次では広形銅矛鋳型が確認され、生産活動も積極的に行われていたことを窺わせる。

古墳時代も相変わらず営みは継続されていくが、後期になると大型の掘立柱建物群やこれに伴う柵列が、第8次調査で認められている。これについては、『日本書紀』宣化元（536）年五月条に「官家を那津の口に修り造てよ・・・亦諸郡に課せて分り移して、那津の口に聚めて建て・・・」と見られる、この「那津官家」の可能性が指摘されている。さらに北東側に約300 m離れた第13次調査でも、規模の大きな掘立柱建物跡と柵列が発見されており蓋然性が高まった。

実に簡単ではあるが、こうして比恵遺跡群の概要を眺めただけでも、この地域一帯がいかに弥生及び古墳時代を知る上で重要であるか理解できるはずだ。それは一地域に留まるものでなく、噛み砕いて言うならば、このアジアの東端とも言える列島内で、いち早く稲作文化を受け入れた先進地域として、さらに57年の『後漢書東夷伝』、3世紀代の『魏志倭人伝』と、中国側の史料に二度も登場する奴国の故地でもある。そして大和政権の対外交政策の機能をも併せ持ったであろう官衙の存在へと、連綿とこの地に続く歴史は、常に大陸との関係の中で語られる舞台であった。そう考えると比恵遺跡群が携わった役割も、決して少なくないはずである。

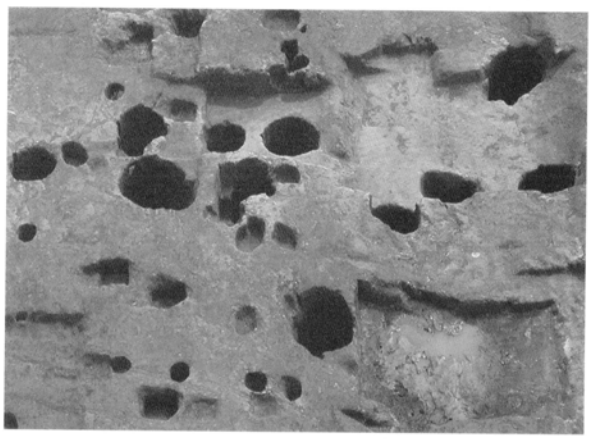
JR博多駅の南側、市街地という開発の波に常にさらされ続けた場所にあって、よく今日まで貴重な資料をとどめてくれた。まだまだ多くの問題点を残すところが多く、言い換えるなら弥生文化の受容、クニの発生と消長、大和政権の外交政策と九州の内治など、注目に値する史実が数多く内包されている。こうした課題を一つ一つ明らかにして行く上で、比恵遺跡群の持つ価値というものは更に高まりを見せるであろうし、そうした認識の下で多くの市民にも親しまれる遺跡であることを願ってやまない。

①. SC006　竪穴式住居跡（南西から）

②. SC007　竪穴式住居跡（北西から）

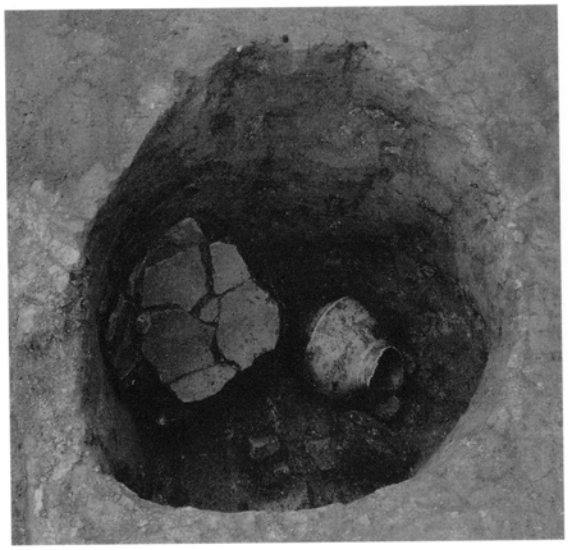
③. SD015・016　溝跡（北東から）

④. SD015　溝跡　作業風景（北東から）



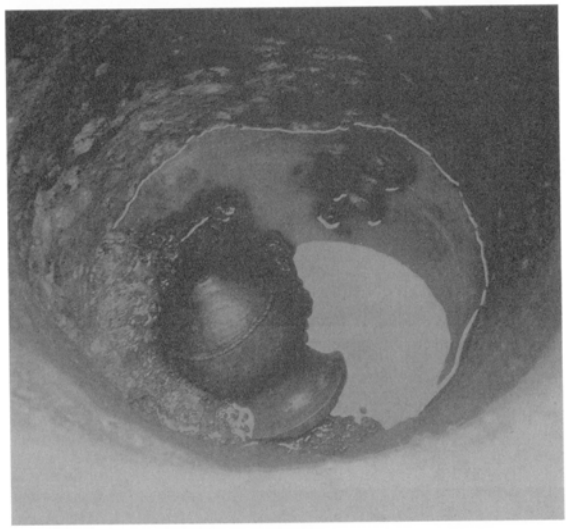
⑤. 調査地区中央付近の井戸跡集中箇所（北東から）

PL2

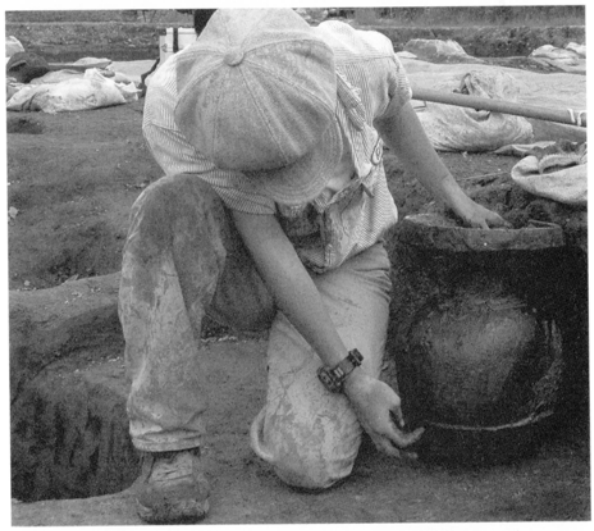


⑥. SE001　井戸跡遺物出土状況（南東から）

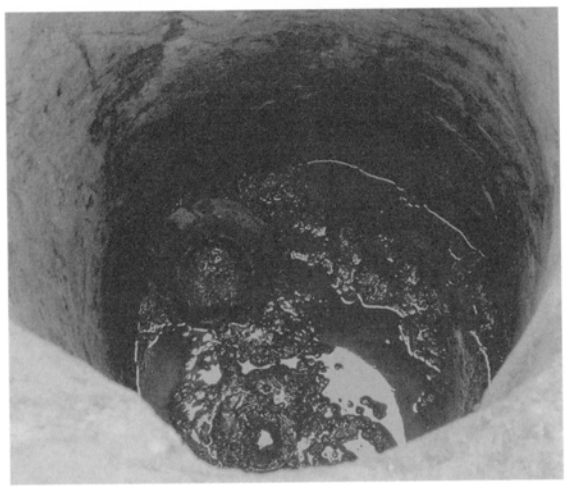
⑦. SE005　井戸跡遺物出土状況（北から）



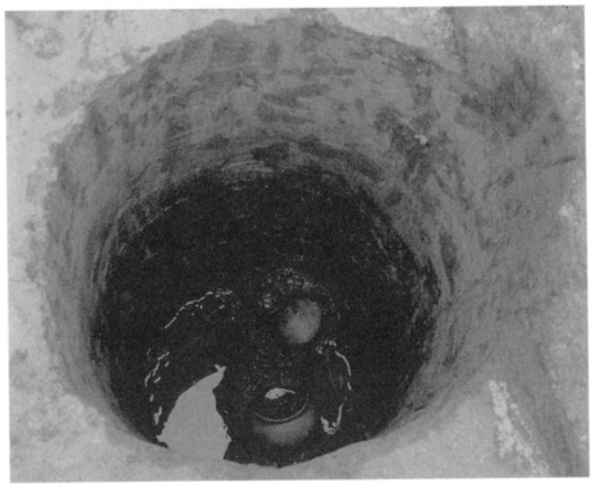
⑧. SE009　井戸跡遺物出土状況（西から）



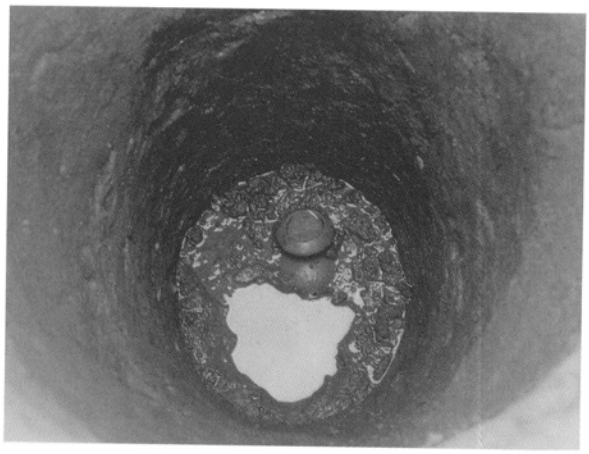
⑨. SE009　井戸跡から出土した壷



⑩. SE019　井戸跡遺物出土状況（北西から）

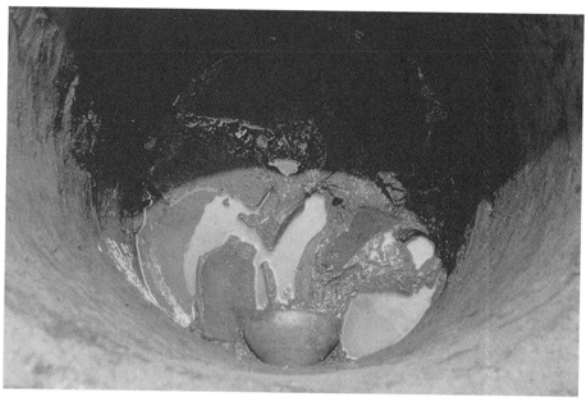


⑪. SE021　井戸跡遺物出土状況（南西から）

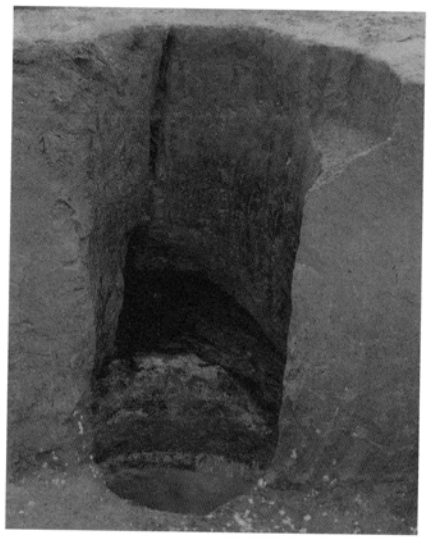


⑫. SE025　井戸跡遺物出土状況（南から）

⑬. 井戸跡掘削作業風景

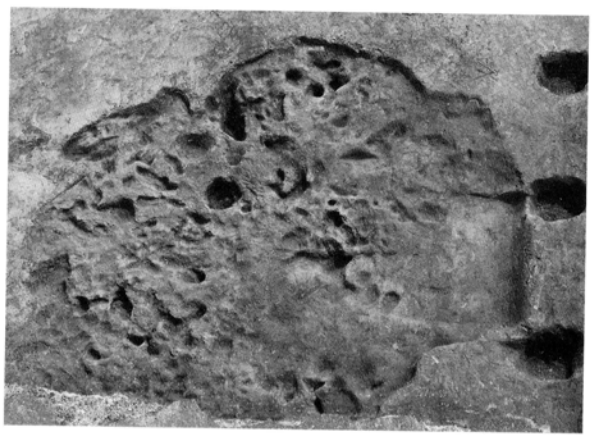


⑭. SE027　井戸跡下層上面遺物出土状況
（北西から）



⑮. SE028　半裁完掘状況（北から）

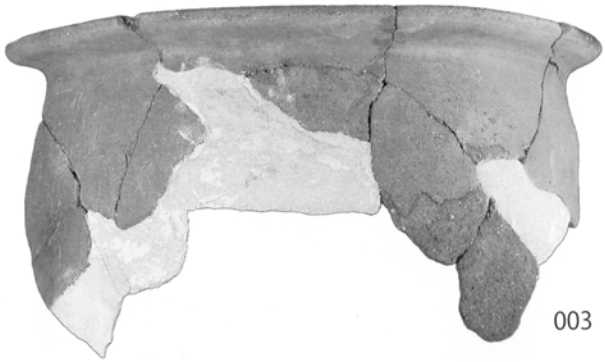
⑯. SE028　井戸跡下層上面遺物出土状況（北から）



⑰. SX029　不明遺構（北東から）

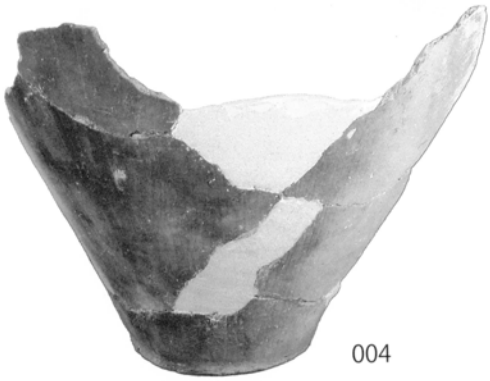
PL4

001



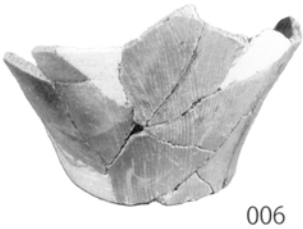
003

002

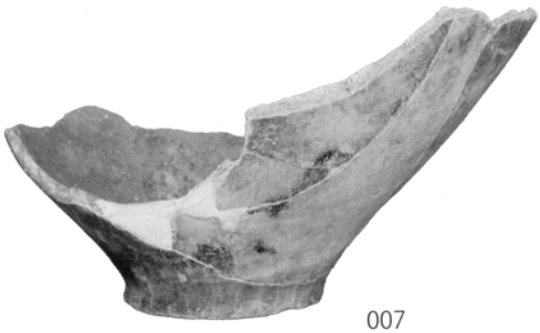


004

005

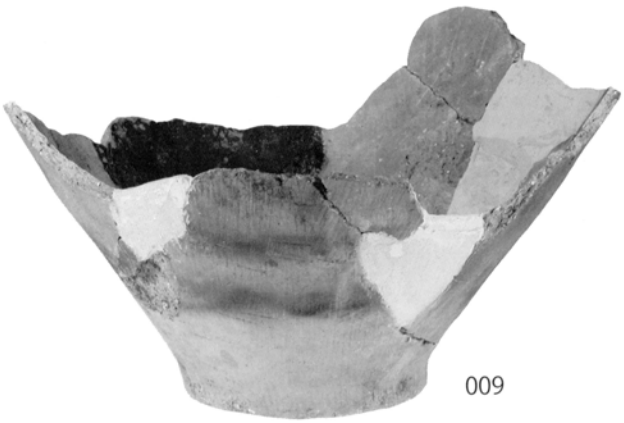


006



007

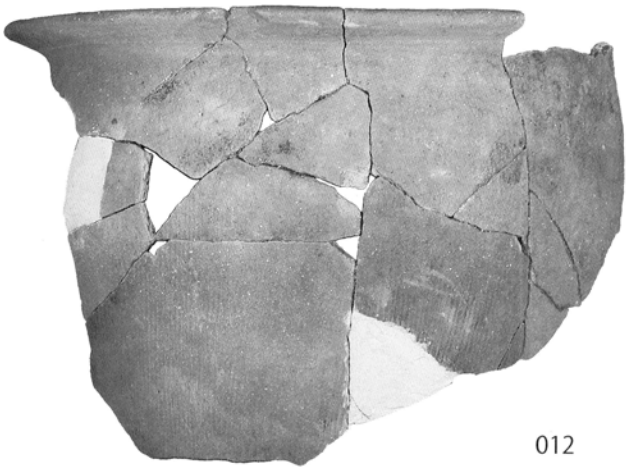
008



009

010

011

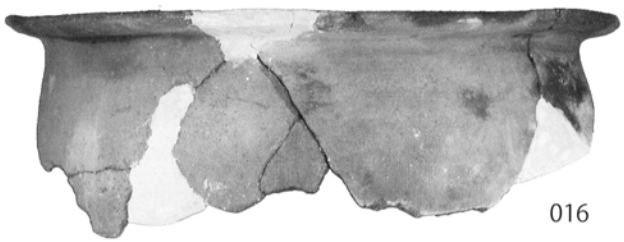


012

013

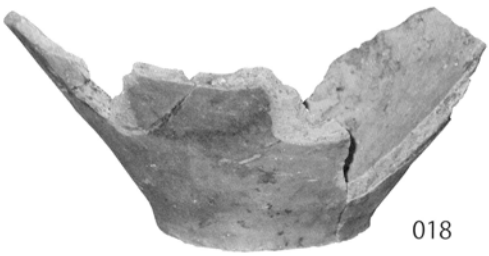
014

015



016

017



018

PL6

019

020

021

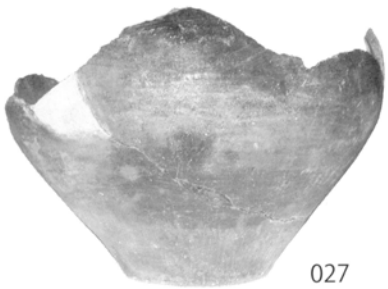
022

023

024

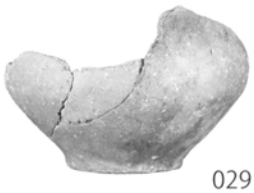
025

026



027

028



029

030

031

032

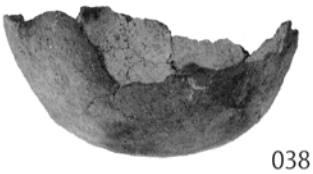
033

034

035

036

037


038

039

040

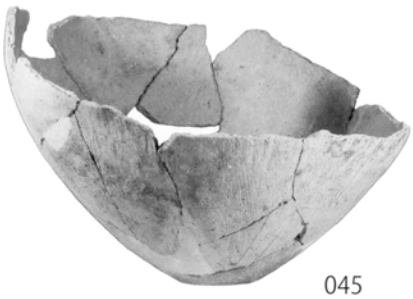
041

042

PL8

043

044


045

046

047

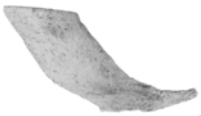
048

049

050

051

052


053

054

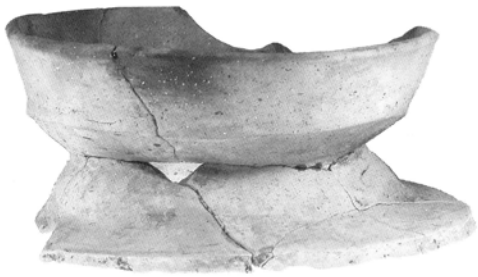
055

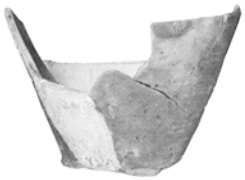
056

057

058

059

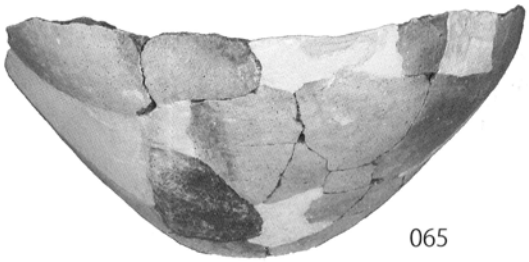

060

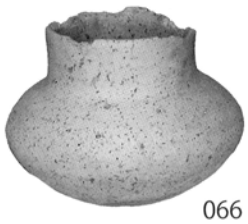

061

062

063

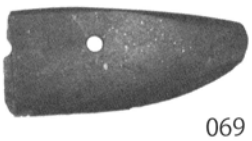
064


065


066

067

068

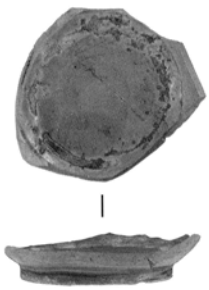

069

070

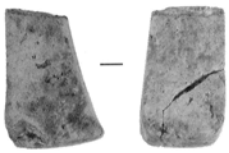
071

072

073

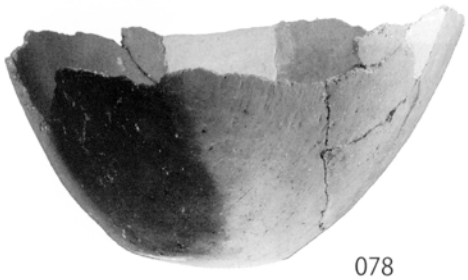

074

075


076

PL10

077

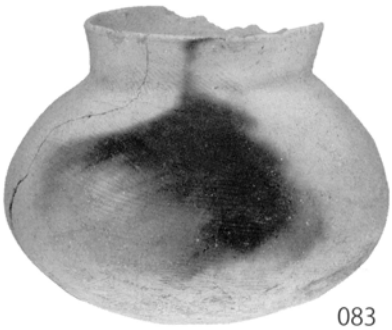

078

079

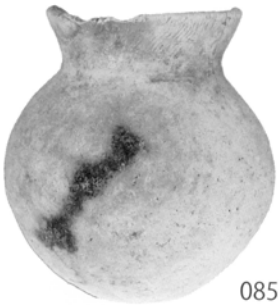
080

081

082


083

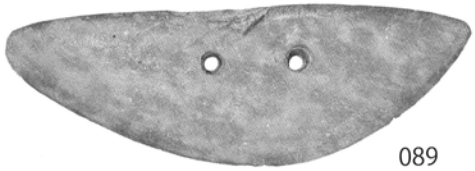
084


085

086

087

088


089

090

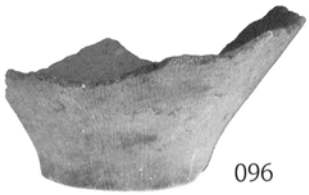
091

092

093

094

095


096

097

098

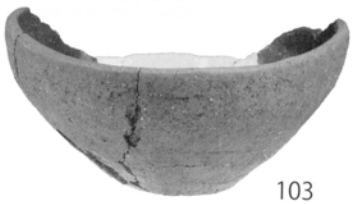
099

PL12

100

101

102

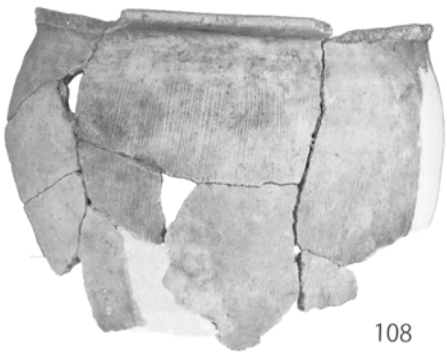

103

104

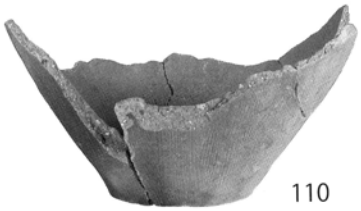
105

106

107


108

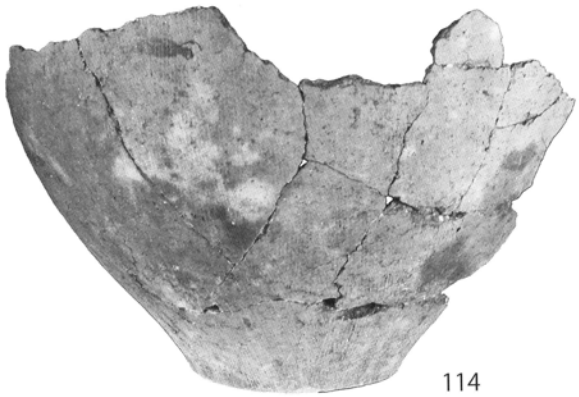
109


110

111

112

113


114

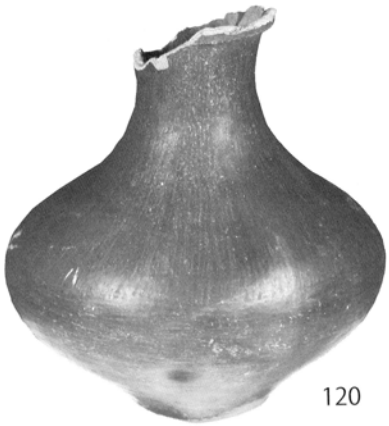
115

116

117

118

119


120

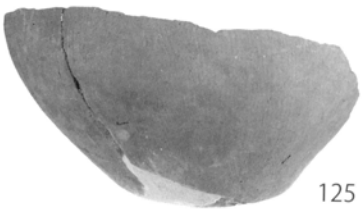
PL14

121

122

123

124



125

126

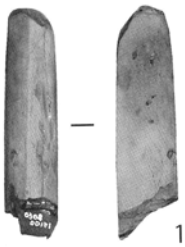
127

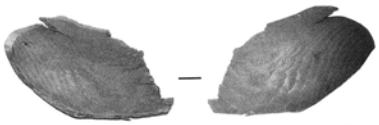
128

129

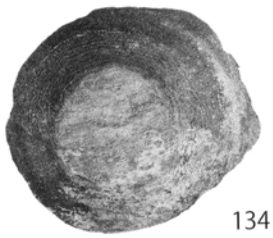
130

131


132


135

133

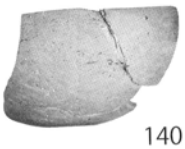

134

136

137

138

139

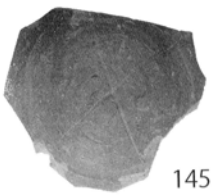

140

141

142

143

144


145

報告書抄録

ふりがな	ひえいせきぐん
書名	比恵遺跡群
副書名	第82次調査報告
巻次	37
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第832集
編著者名	堀苑孝志　中山　浩　入江俊之
編集機関	岡三リビック株式会社　埋蔵文化財調査室
所在地	〒108－0023　東京都港区芝浦4－16－23　AQUACITY芝浦　TEL　03-5442-1980
発行年月日	2004年　8月　31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
比恵遺跡群（ひえいせきぐん）	福岡県（ふくおかけん）　福岡市（ふくおかし） 博多区（はかたく）　博多駅（はかたえき） 南（みなみ）6丁目9番7号	40132	0308	33° 34′ 25″	130° 26′ 03″	2003.5.6 ～ 2003.8.14	約1360.0	大型食料品店 店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
比恵遺跡群	集落	弥生時代 ～古墳時代	竪穴住居　2軒 井戸　22基 溝　3条 土坑　1基	弥生式土器 須恵器 土師器 石製品 木製品 貿易陶磁器	弥生時代中期から古墳時代の集落跡。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第832集

比恵遺跡群37

2004. 8. 31

発　行　岡三リビック埋蔵文化財調査室
東京都港区芝浦四丁目16番23号

印　刷　（株）第一印刷所
東京都台東区根岸二丁目14番18号